

歩心にまかせねば心もとなかりしに。さあけふより色之助がむけんの鐘との大入手水鉢へかゝりて。だんないくゞだ
いじないといふ時髪はほどけひしやくはわれくだけ。石にたつ矢もある物をだいいじないくゞとあまりせいはると
て。惣入齒一度にぬけおちなむしやんとあふのけば。諸見物手をうつて扱も名人かなたちまちがんしよくかはり。兩
の頬すぼり般若顔に成しむかしよりためしなき事と感しり。それよりのちは小判をひらふまでにて町中の大評判。
そのうち色之助老もいればかけはづしにしてだんないくゞの段には。わざとぬいて取様にしかけられしとぞ十年あ
まりも舞臺をつとめ。いさゝか金子もたまれば忰八郎左衛門がわすれがたみの八五郎成人して。廿三歳に成しまゝ
平野の川端に茶屋をさせて篠野屋の新介とあらため。相應のくらし色之助は二度の法躰ゆへ再道と名づき。裏の方に
引こみあられける。一とせ今やまつりのはやし物を近所いひあはせて出すとて。さゝのや新介は鉦をする役にて毎
夜さみせんたいこ笛にあはせ。稽古しけるに再道急病にて養生かなはず明後日が今宮まつりといふ今日息引とりぬ。
然るに孫の新介祭の役にてたき心から祖父の死去をかくし。ひそかに寺へおくりて町内へ披露せず。當日に成て鉦を
すりに出るに何とやらんわが家のけがれ心もとなく。わが身のけがれたるには心つかず祖父の三日のしあげにあたつ
て神事のはやし物に出つんくちうちつちんでん。ハアホチ、ホアアてんくちやんちきちをみしらせしに別火を
くふていてけるもおかし。此心よりせつかくぢいの苦勞してもとでにのこされし。金子も程なくちやんちきちたゝき
あげて仕まひしとなり。

第三 身請の起請より恥をかく仕懸

付り 年より客にはまらする了簡違ひ

昔の野郎は年たけても若衆なり。今の野郎はとしは行ね共おやぢなり。されば八歳のおきな千歳めんばこによつと

持て出るより。身ぶりこましくやぐれてゆたかならざる事皆心のなすわざと。奥殿門の行者是を難せり。大坂鹽屋九郎
右衛門座にて。岩井歌之助平井しづま京にて玉川千之丞是はあづまへ下り。河内通ひの狂言ひとつて三年かへざる大
入まさしく承應の頃の事なり。玉林吉彌吉田伊織加川右近伊藤小大夫鈴木平七袖岡政之介小櫻千之介瀧井山三郎櫻山
林之介上村吉彌藤村半大夫松嶋半彌小松半大夫坂田小傳次山本左源太藤田鶴松浪江小勘上田才三郎藤田皆之丞竹中吉
三郎川嶋數馬三枝歌仙などいふ若衆心中いきかた今の世には夢にも見がたし。それより程へだゝりて元祿十五年の午
歳都の座組。今よりは四十五六年まへの事なるが。名代都萬大夫座本古今新左衛門此座。立役は坂田藤十郎中村四郎五
郎若林四郎右衛門三尾彌三右衛門藤田九八郎淺田善右衛門坂田直右衛門筒井傳六秋山加左衛門に座本新左衛門もくは
はり。敵役には三笠城右衛門山村長五左衛門。道外には金子吉左衛門天井又右衛門。若女形霧浪千壽淺尾十次郎鈴木
辰三郎高嶋尾上嵐喜世三郎市村玉柏藤田大次郎山下龜之丞藤本花桐をはじめ多あつまり。若衆形に小野川宇源次その
頃のたて物なり。松本友十郎色子にして山下小才三が上に立たり。花車形橋本平介にて事すみ。今一軒は名代夷屋松
大夫座本大和や藤吉。此座立役山下半左衛門音羽次郎三郎櫻山四郎三郎山下佐五右衛門宮崎義平太澤村十郎次。敵役
藤川武左衛門大森辰右衛門森山十三右衛門。道外金澤五郎次山田甚八天野藤八。若女形芳澤あやめ山本歌門瀬川傳之
丞霧浪花妻尾上右近高尾林之助筒井吉十郎水木竹十郎唐松金彌をかしらとしてあまたかゝへ。若衆形中村大藏吉岡求
女。花車形小勘太郎次にて評判もとも上々言といふは。立役に藤十郎半左衛門。道外に吉左衛門五平次。女形にあ
やめ。若衆形に宇源次。花車形に太郎次斗にて。上上といふ事よくくならねばかゝず。中ノ上といふが今の上々
吉にもあたる位にてありし事也。狂言も作者まかせにして立ものよりさしこまず。作者もまた立ものよりつかれぬ程
の器量ありしゆへに。一慮をもつてくみたてし狂言なれば始終義理とよのほりて。見物宿へかへりてもはなさるゝ事
成しに。めい／＼もちこみの狂言扱は古出のやき直しもの而已にて。あらたに趣向をうみ出さぬゆへ見る内はおもし

ろき様なれ共。跡にてよく思ふて見れば替名と外題がかはりたるまでにて。いつもおなじ事を見て居るやうそれより十七八年後。享保亥ノ顔見せ都萬大夫名題にて座本も同人つとめしには。立役上上吉音羽次郎三郎上上吉坂東彦三郎上上吉金子吉左衛門。實悪上上吉三保木儀左衛門。敵役上上吉宮崎義平太上上吉岡三郎介。道外上上吉玉川源三郎。若女形上上吉山本歌門上上吉山下龜之丞。扱一軒は名題夷屋吉郎兵衛座本大和山甚左衛門にて。立役上上吉小佐川十右衛門上上吉大和山甚左衛門但しやつしにては極とあり上上吉片山小左衛門同百人一首源三郎。實悪上上吉藤川武左衛門。敵役上上吉八鹽幾右衛門。道外上上吉大嶋嘉十郎。若女形上上吉荻野八重桐上上吉引合山村歌之助上村喜世三郎。今一軒は名題早雲長大夫座本神山四郎太郎にて。立役上上吉柴崎林左衛門上上吉神山小四郎上上吉歌流佐和右衛門。實悪上上山中權十郎上中川茂十郎。道外上上吉山田甚八上上松嶋茂平次。若女形上上吉霧浪瀧江上上吉玉村菘之丞なとにてむかしに引くらべて見れば。上上吉みだりにおきやうなれ共今上上吉と書は其頃の瀧江の位と引合せがたし。いはんや其頃小四郎などははやり出の最中にして今黒吉の衆におとるべきや。然れ共時代のふうといふ物ありて位をさだむるに。昔とは品かはれる事全く世のならばにしたがふゆへなり。若衆の心もそれにつれてむかしの様に。まことをたつるまじはりうすし是も時代といふ物に。かづけておくより外はあるまじ。こゝに高村三代三郎といふはうつくしき事世にたぐひなく。狂言は十五人なみなれ共座敷の繁昌より人も用ひよき役をあてがひ。内證のゆたかなるにつけて若道の情は我を買。客をたはけとさげすみある遊女とふかくなじみ。女郎も此若衆ゆへ客をそてにあしらい。すへはふうふのやくそくかたくもとより此女郎親方ながら子ぶんにて。行衛さだめぬ身の年のあき時なく。杖にすがりて三ツ輪くむまでもつとめさするに。いやのならぬ因果を悲しみ祇園町八木屋の客に。東の洞院へんの七十ばかりなる老人ありけるをたらしこみ。身受してもらひ其うへて三代三郎とそふ術をなさんとそろ／＼ねんごろにしたしみこのみせぬ起請を書ておく。よい鹽合を見すましかこはれ度ねがひ。老たるも若きも此道に目のくらむはなら

ひにて。老客よねんなく悦び急に身請の相談手を打腕に成て起請といふ物をありがたがりしは。おとそも此道に目くらむはならぬの事にてわれら七十にちかけれ共。はたはばかりよりつかひさかりて。此方ははやらぬ事になりきたれり。われら相はつるとて所詮百年の壽命は心もとなし。今年か十五年かせい一はいといふ物老のたのしみに。大せつなる金子を出し孫や子共が思ふまへをはゞからぬはよく／＼の事とおもひ。われら存命の内かこひおく所より外へ。一寸も出まじ又むかしのちかづき一人もよせまじ。萬一かけおちいたさばそのたて金十双倍にて相わたすべしとの一札に。加判が取たしとのつめひらきその加判はたれをお望とへば。かね／＼そなたがねんごろしてゐる高村三代三郎に加判取より外の事なし。うけ出してくれよいかにもとさつそくにうけあふ程に。そなたをおもふわれらなれば日ごろのこんたんきゝあはさずにおくべきや。しかれ共つとめの内にそれをせくは大海の魚をひとりして。手ずくひにしたがる様なものにて無益の事ゆへつゝにいひ出したる事もなく。又そなたが座敷にぎはひに三代三郎をよべと。すゝめらるゝ時もがてんでよびよせ。やりくり人の心はつかぬかとふたりばかりがかしこきものとおもはるゝ仕内。此老眼に見ぬいてそれがなくさみに成。たとへ外に心あり共とても老さらぼひしわれらに。眞實あるべきやうはなしぶりしやりとせられずつとめてくれらるゝを。年よつてのたのしみに存せしにうけだしてくれよとは。うそにもせよわれらがぶんのたつ所望。そこ心はともかくも一札さへとれば心が打とけあす死ぬるとても臨終がやすかるべしと。あとさきに釘をしめたるいひぶん。女郎も此おやぢ殿の粹といふ事はじめておどろき。身うけの取さた此邊にかくれなければ今さらいやといはゞ。三代之助さまの名までたゞんとつかへをおこしけるもことほりなり。おほくの人われに智恵ありとのみ思ひて人をうつけにするゆへそのうらをくふ事かぎりなし。かゝる相談はむかしの野良にゆめ／＼なき事にて男女の子三人めしたきにまではらませ。後家茶屋をわんがけ河原の水茶屋へ相圖の文出しておきながら。子供顔して客にあまへらるゝ事心のとはいかゞこたへんとある上人の御説法のむねなり。

第四 自前遊びは色身の外の思ひ

付り すいくわにかぶり付口元で耻かしいはいな

それ金銀をつかふに減金活金あり。是生死流轉の界にまよふ客にある事にて女郎は論の外なり。若衆名高きを不便がりわが身上をよく顧て家買とらせ。よき抱をとらせなどあと／＼までその若衆の恩にきる金のつかひ人あり。花代高直なるをむだよびにつめていつ遊びをめしやら。いつあそびとまりしやら切角おほくの金をつかひながら。今少の事にて出あひし茶やの門もまはつて通り。その若衆に道であふてもはつす様になるつかひ人あり。第一かりそめのつき合によぶは各別三十目四目十目の身上では。大夫子と出あひそんじやうその客とよばるゝは算用なしなり。四十目目のふり廻し随分氣づかひなし取あつかへば一ヶ月六百匁より多くは。利銀はいらず一日にわり付て廿匁づゝならずや。一夜ゆるりとあそべば六十匁よりそとへ出るに。月に七八會も出かけねばかよひさかりし時は通ひたる様にあらず。七度にて銀十枚より上へは出るとて内場ではすまず物日つけとゞけ舞臺衣裳をしてやるの。山ゆきのその友だちへ物を送るのおのづから此若衆ゆへ。一ヶ月に二度も芝居へ行さへ二軒つゞきの上ざしき。あづまにてはうづらの六七軒めのにしがはをこのみ。是等の費残る百六七十匁ではとまらず。そろ／＼元銀へ手がつくと來月より歩のりまへも次第おくりにならず。一寸さきは闇とおもへばこそ。わづか百兩ばかりの旦那が草履取をつれて大夫子のつゞけ買もする事なり。むかしは壺入といふて野郎の内へあそびに行。料理ごのみさせて附といふ事もなく。節季には見はからひにさしざばにそへて銀子をおくりけるが。おゝさぬとて藥代も同じ事にてとりにもやられずと古書に見へたり。今はよびよする茶屋より花代まさりの雑用しやでもひでもとらねばおかず。しかれ共折ふしは喰にげにあふてゆるする程かさから來る客。打てもたゝいでもないといふめあてに成てはせよかだけのてまつるへと。なる事ゆへ茶

屋中よりあひをつけて。向後お客かたをばはじめてする時いづれより威とも口いれを。たしかに取たる上家持の人を諸人に取て遊客請狀之事。一此たれと申仁前々の遊び方より。我等よく存じ儲なる身だいゆへ我等諸人に立申處實正明白なり。尤きりぎわにぶしくし申人にて無之い。一しうしは代々野郎衆にてとか女郎衆にてとかしたゝめ。次に一御亭主より被仰越々書出しに小事申少も相そむき申さず。きわより四五日もまへかどに急度相すませ可申い。萬一くひにげ取にげ致されいはゞ受人方よりその品わけをたて。少も御損かけ申まじく爲後日客請狀よつてくだんのごとしと。取ておきたき物といへばたゞさへふけいきなるみぎり。お客を奉公人あしらひにしたらばにはかにさびしくなるべしと此さうだんもはかゆかず。役者ばかり客にする宿屋ありて紫帽子取のけ西瓜にかぶり付て。くはるるさへあるにけしからず。暑いといふて大はだぬぎになり。鯖のすしをむち／＼ほねまでのこさず。茶わんざげ引かけてほろ酔のさい申くはしやが出て。きみ様へ人やりませふかといふ折ふし。ぼんと町からてござりまするといつも勝手知てゐるかごまはしが。つきいてこゝへむかひに來れば多ひまぎれに。欲をわすれ今は外へゐてじや程に跡をとふてお返事申ませうといふて。かけておゐてたもと客をつつておき女郎をよびにやるは。内外の損にたまふける金を取にがし女郎の花代を出す。女郎は來てうれしさふによりそへば。わがうつくしき姿にきやつまよひけると。思ひ込たるがすなわちまよひのたゞなかななり。女郎はあんな室町の客めが盆を十五六七とやくそくしておきながら。今に成て變改しくさつたと聞て。よい／＼それほどの事はおれがしてやらふ爰へ出てあよ。くわしやさんのみこんでやつて下さんせといへば。女郎は何のいなあのおまへに金つかはします事をごんせうぞ。どうぞ外へくゝつて見ませうといふ程底うれしき氣味ができてせひにこちからうけこんで仕廻ふ。粹の手ばまり大ぎけに成て屏風引まはさせ。とろ／＼とやる所へ又駕のものがわかひ者がゆりおこし。せめて一ツはおつとめなされませいと正躰もなきを。かごにのせたれ共酔つぶれて夢中にぼんと町へ行。座敷へうつゝの様に出ればなじみの客にてはや酒もとれて。床へいら

せられ大夫おそしとまたせ給ふに舌もしとろのそひぶし。客も興さすほどの酒くさゝ是は又例の高野衆がもりつふしたか。あすの舞臺もある物をと介抱して給はるを若衆はぼんと町とは思はず。客を女郎と心得盆のみこんだ氣づかひするなと客をかきよせ。おびをときかくるゆへ客はがてんのゆかぬ口上ながら。おれをおれと思ふて酔の内にもあふてくれる心かこよひにはかぎらぬ事と。たゞきつけらるゝをむつとしふたの物の間よりちと文章にはかゝれぬ物出しかけ。さうふると益もへんがいじやと腹をたつるに。客はきもをつぶし傘を見ればしあはせがよいといふがまづはねどころでめづらし物拜見せしと。まくらもとなる脇指取て手をたゞきかごいふてやる時ほんしやうになり。しなやかにする程おそろしげがたつて客はやどもとより急用申きたれりとてさとりをひらかれしとなり。なんと有がたい事ではござらぬかとすべて兩道の法談をすましける。聽聞の内より櫻谷源介藤わき一學所の講師はたしかわがたづぬる文藏様に。きはまりしと御説法のはてるまで待かけ。ひそかに御めにかゝりたきよしをぞ申入れける主従つきぬ縁こそたのもしけれ。

四之巻終

禁短氣三編 五之巻

第一 敵のありか根を堀江の水いらす

付り 色だんぎのあみだ池へはまらす工夫

父と君との仇にはともに天を戴かずといふ事。耳のあるほどの者たれか聞つたへざらんや。然れ共勇氣なくておこたり。勇氣ありても義をしらすして安然たるもあり。又義勇兼備はれ共運つたなくして是をうつことあたはざるたぐひも又すくなからず。こゝに越路の大領梅永の嫡男文藏よしはるは奥州今川兩大夫にまよひ。大殿の勸氣をうけ國を立のかれしが身のたゞずみなく。色説法をとりたて諸方行脚めされ。都へかへらせられけるにさきだつてたづねに出ける。櫻谷源介藤脇一學兩人是を聞つけ。あるひはきもいりとなり又は大盡と成て。若殿文藏殿にめぐり逢んため智畧の色説法方々とかせぎ。ありかをきかんとさがしもとめけるに文藏殿と思はずも出あひ。大殿は大藏殿たくみによりに浪人乾戸大夫といふ者にうたれ給ふ。御家老望月八郎左衛門工夫をもつて。おまへ様御歸國までは大殿の御死去をかくしお茶道頭池中尊齋を大殿に仕たて。けいせい今川をおやしきへよび取おまへのおたね藤松様をかしづきそだて。わたくし共はお行衛をたづねにいだされましてござると。始終つまびらかに申上れば文藏大きにおどろき給ひ。わが不行跡ゆへとは云ながら大殿の御さいごにもはづれまさしく親のかたきを。今日までうたざる事天命にもつきはてたるかと。どうどふしてなげき給ふを兩人いさめ奉り。大藏殿はおちごながら大悪人戸大夫と一所に。攝津國南堀江と申す所に渡世なく茶屋商賣をいたしくらすよし。是により兩人よそながらとくと見とゞけおきたれ共。八郎左衛門思案にはとかく若殿さまにうたせずしては。御一分たちがたしと申わたされしゆへ他國へのかざるやうに。其邊に

家來共を揚弓場させてつけおきたり。いざ是より攝津國へ御立こへあそばししかるべしと。はや飛脚を仕たて入郎左衛門方へも申つかはすべしといふに。何かたきのあり家はしれたるとや一刻ものばしがたしと。南堀江にぞ下られる。大藏はかり金屋といふのうれんをかけて妾に茶屋をさせその身は用心して一寸も内を出ず戸大夫はそのとなり玉屋とつきて。是もおなじおやま商賣身をつゝしみ。うら道をつけて大藏と出あふよりほかは人にあはず。惣じて此すぎはひ女房名題にて事のすむ事にて心やすくくらしけるゆへ。ふみこんでうたん事はいかなるぬけ道かあらんと氣づかひし。何とぞおびき出さんと主従三人心をあはせ。さまざまにつけねらひ文藏殿申さるゝは。とかく夜談義をほじめてもあらば晝とちがひ聞にいづる事もやあらんと。小寺をかり例の色法談出家に出立兩人の士は伴僧といて立。四五夜もつゞけて説法にことばの花をぞふらされける。然るに兩人がはや飛脚のしらせによりて。望月八郎左衛門は今川も藤松殿ものり物にていざなひ。津國にたちこへひそかに文藏殿の旅宿にたづねあたり。久々にての對面たがひに主従のつきぬ機縁を悦びあひ。今川もうらみ數々つもりしか共大殿のうれへ。涙にくれらるゝ中へも申がたく藤松殿そく才にて引あはすれば此うへの悦びと。文藏も涙をとどめ給ひける。扱かたき大藏戸太夫此邊に茶屋を渡世してゐるにつき。おびき出さんとおもへ共用心して申出ず。段々聞あはせば大藏が方とうら道をつけて折々たがひによりあふよし。何とぞ一所によりたる所へみだれ入て打たきものなり。一方へうちいらば一方は聞にげせん事はなはだ心もなしとの給へば。八郎左衛門つくぐと聞て。大藏殿は悪人の張本戸大夫は直に大殿を手かけし科人。いづれをうちもらしても後のきこへ口おしかるべしと。しばらく思案をめぐらささいわら今川殿はさきの者共も見しるまじ。戸大夫方へ遊女奉公につかはし給ふべし。はてあのゝ物のと有てきやくをふりつけ。その内に大藏殿が戸大夫方へ來らるゝを此所までしらするれば。その所へ打入て御本望とげ給ふが專要とぞんずる。源介一學はかけりんぐに釣にやつし戸大夫のきに御難し。今川殿よりの通路をつとめらるべしと。手をまはしてきもいりへかけ今川をつき出しのつとめに出したきとの武いれ。戸大夫さつそくのみ込こんばん初夜時分つれ立きたるべし。きりやうを見て顔談せんといへば。扱こそしてやつたる物と今川にとくといひふくめ。名をおらんとかへて一たん塚のちもりに勤今は町住の女との仕たて。ずいぶんかうとうにてたゞせ初夜をおせしとぞまたれける。

第二 子に逢て子に別るゝ老の涙

付り 孫の立身に一念發記の實惡の開山

浮雲の富氷上の家一旦の榮花に名を辱かしめらるゝの後を顧みざるは。おろかなりとやいはん惑りとやいふべき。乾戸大夫はもと若狭國輕澤のうまれ浪人して劍術は人に勝れたれ共。一文不通の愚者にてもとよりいろはさへよむ事あたわされば。書ことは猶もつてかなはず大欲にしてさまぐの事にかゝり。すこしのたくはへも手拂になり。今日のたてがたさに娘を越前の三國へうり。本名大熊船右衛門を乾戸大夫とあらため。娘の身の代をもつて身上をかせぎ。おつ付娘をもうけ出さんと思ふうち大藏にたのまれ。大殿をだにころしなば二千石あておこなはんと欲に眼がくれ。大殿をころしければ家老望月八郎左衛門がせんぎのがれがたなく。大藏と一所に立のき津の國南堀江に遊女茶屋となり。忍びくらす所に内のでつちが濱側にて。大黒を畫し廉扇一本ひらふて來るを。錢百文やりてその扇をとりひそかに二階へあがり。机の上に扇をひらき壁にもたせかけ。御酒をそなへつゝしんで扱ぐぞんじよらす。大黒様のわたくし方へお入下さるゝ段わたくし富貴いたすべき瑞相と何程かありがたく存奉ります。以來ずいぶん御馳走申上候はんまゝ御油斷なくおんまもり下さるべし。すなはち一に俵おふまへなされしごとくもの知行取になされ。二に逃かくれし有家のしれぬやうに。三に酒はわたくしもすんぶんすきてござればおみきはたへさずにあげませふ。四ツによそ外へわたくしの住家のもれぬやうに頼上ます。五ツいつまでもいきどをしに致しまするやうに。六ツ無病を

くさいに。七ツ何事なきやうに。八ツやしきもちと成。九ツ子供にめぐり逢。十でとう／＼かたきうちをのがれまするやうに。ひとへに願ひ奉るとはいふたれ共。文盲第一の男なれば大黒天を神か佛かしらず。南無あみだぶとも又かしは手もたゝかれず。口の内に南無大こく舞を見さいな大こくまひを見さいな。忝なやありがたや南無大こく舞を見さいな願以此功德ととなへけるに。思ひよらずきりやうすぐれしつき出しの奉公人。金やすでとらるゝ相談申來りひとへに大黒まひのおかけと悦び。くれ過よりまちける所に今川はおらんと名をかへ。文藏殿は戸大夫が見しらぬゆへ一學を相肩にて駕をかき。八郎左衛門は内よりついて來たる男のていにて。中戸の小くらがりひかへ。今川臺所へあがれば戸大夫立いで顔見あはせ。ヤアそちは身が娘でないか越前の三國へ賣わたし。今は今川といふよししかるにしかへられて來るといふも。ひとへに大黒のつちに生れしとおさな名はおなべ。やれなつかしやとなげけばおさなき時とはいへども十三までぞだてられし父上。なかは見そんずべきおまへのもとのお名は大熊船右衛門様あのむめ永の大殿をお手にかけ給ひし乾戸大夫といふはおまへの事なるか。はあはつとばかりに泣しづめ庭には文藏殿一學中戸には八郎左衛門こゝにてきやつをうつては。大藏にげさるべしと見あはす中にも文藏殿は。父のかたき戸大夫今川が父なるかとあきればはてらるゝばかりなり。戸大夫はがてんゆかずその梅永殿を手にかけし事其方が身に引うけてかなしむは。その意あらずといふ内に今川は懷劍取出し。すてに自害と見ゆるを戸大夫すがつておしとむれば。ととさまこゝはなしてしなして下されよ。みづから梅永文藏様にふかくなじみ。ふたりが中には藤松殿といふ子まであり。御家老望月八郎左衛門殿のはからひにて藤松殿は梅永のお家の跡つぎと。定まり給ふに大殿を手にかけられしは。みづからが親とししては文藏様何としてみづからとそひ給はんや。なましるに生なからへては藤松殿おためにもならずこゝはなしてたべとなげけば。戸大夫大きにきもをつぶし。何その方は梅永文藏殿となじみ子迄あるうへに。その子は若殿に定りしとやしかれば我ために。縁を世にいだす。世の中のかなしみは。そなたをうけもどし世にあらせんため。大藏殿にたのまれ大殿をころし立身せんとはおもひの外。日かげものと成たり相から行も左からゆくもそなたを思ふ親ごゝろ。子ゆへのやみにまよひたる悪心の一味。我子にあふてそのばてわかるゝ死出の旅だちとむるにもとめられす。因果は我身にせまりしとおひの涙のせきあへずむせびかへるぞことばりなれ。

第三 雷の落口は知ぬ契情の行衛

付り 戸大夫が云譯をきゝのよい家老の思案

大こくも俵をふまへておちつゝ居らるゝは福神の表相なれ共。たちさはぎて舞るゝは貧乏神の仲間入といふ事心つかず。南無大こく舞を見さいなと。となへし大黒は大きにくらやみに成て。わが心迷ひくるはんとの前表なりしかと。戸大夫とむねをつき今は何をかつゝむべき。いかにも大殿は大藏殿たのみによりて身が手にかけたり。すなわち大藏殿此となくれすまるれ共。四五日いぜんよりみつゝ京都へのぼられ。二三日には下向有べし。此上われたばかりで大藏殿をからめとり。是をその方が手がらにさせそのうへにて身は覺悟あり。そなたに立身させたまきばかりに。大藏殿にくみせし事なれば一念をひるがへし。そなたが身もたち藤松殿のお身のさはりにもならざる様に一思案あり。それまではこれにとどまりて戸大夫がしわざを見るべしといへ共。いや／＼ともいきながらへは文藏様へたためといふを。中戸にひかへし望月八郎左衛門かけ入。久しや戸大夫よもや見わすれはせられまじと挨拶し。いかさまこゝは大事の場所いまこなたが自害ありては。大藏殿へもれて手にまはるまじ子ゆへのやみとある段よく聞とゞけたり。それまでは此八郎左衛門は戸大夫に付そひ。大藏殿をうけ取までは一寸もうごかし申まじ。是戸大夫家内より外へもれぬ様にとあればそのだんはすこしもおきづかひ下されまじ家内はわたくし下知にまかす様に。ひごろしめしおきたるがのつて見へたる駕のもの共がと。いぶかる時。文藏殿も一學もほうかぶり取て。梅永大領が嫡子同苗文藏好春

同家來藤脇一學。父のかたき主君のあたとつめかくるを八郎左衛門おししづめ。さいぜんも申通り大藏殿風をくらはれては後悔さきに立べからず。此場は八郎左衛門に御預けあそばさるべしといさむるにつき。文藏殿も萬事は八郎左衛門次第と心をおししづめ給ひ。八郎左衛門と今川をのこし一學をめしつれ。もとの駕の者にやつし旅宿へこそは歸られける。八郎左衛門は片時も戸大夫そばをはなれず起居に心をくばり。今川はとかく悲しきものはわが身と一間に引こもりなげきくらすも長き日ながら。中三日たちまちにくれて秋にうつる空かきくもり。雷ふるがごとくかしここゝに落ちて晝夜いなびかりやむ間なく。別して河州柱本とて大坂道の一村へ十二三もおちける中に歩路を下りかゝりける侍。此里にしる人ありてとまりけるにその家へおち侍は雷火にうたれてちぎれくへに成て死し。雷はその家の榎にかきつかんとせしに。年ふる榎ゆるぎおれて。雷是にうたれて半死半生のよし。むかしよりかみなりは陰陽水火のあいさしる所にして形なしとはいへ共。王充が論衡に鬼神形連鼓のていにしてしぬるもあたらしき事にはあらず。萬葉集にもとわたる神とよみ。神代卷に龍雷の口傳とのこせり。いざや見にゆかんと近郷はいふにおよばず聞つたへに諸方より群集をなせしに。所のさはぎとて秘して是を見せず。京難波好子のものそのかたちをみ出し一枚紙に雷いけどりの圖とて。かしらは牛にめはな人に似せて四足三ツの爪ながく。火をはくていに圖して事書をそへ賣ありきける。河州はしらもと雷の繪圖ことくはしく書付て一枚が一文ともつはらに此きたなる所に。南堀江の茶屋かりがね屋の亭主刀をさし。上京してかちをくだりはしらもにとまり。雷にうたれ。かたちきれくへにとびてはてたる由。ばつと取きたしければ。八郎左衛門も戸大夫も案に相違し文藏殿もおどろき夜に入て。此さたいかどと相談に見へける時。戸大夫申けるは。かたちきれくへに成しとの義何とものみこみがたし。ふかくつゝむとすれ共此間のやうすと成り。事なればもれ聞へて。大藏殿やどもとより注進せし故大雷をさいわるに。柱本の者となれあひ雷火にて死したるとふうぶんさせ。京ぢかくに忍びるるゝと先此戸大夫が胸にはぞんじこみたり。是まで奥意なく申談事たれば大方京都の引こみ所も推量いたせり。いざ是より京都へ御出あるまじきやといへば。文藏殿も八郎左衛門もげにもとおもひ。一學源介を戸大夫宅にとどめ今川藤まつ殿につけ置。とるものも取あへず都をさして出らるゝ刻限ははやひる八ツ半とぞきこへし。

第四 魚荷も義と情を荷ふ老心

付り 内證の狀あけて云れぬ隠れ家の子細

かくれたるよりあらはれたるは梨木町邊に。借宅して身の難をのがれんとする梅永大藏。大坂にて出入のさかなや堺の小市といふものをかたらひ。本宅よりの通路小市は錦のたなへ看になひこむつゝ。狀を取つぎ用を達しけるが大藏方より大坂妾のもとへの返書をうけとり。つれ立し者共とはおくれしまゝ今いせ船にのりはずさじと。鳥羽道へ急ぐ所に秋山の邊にて。文藏殿八郎左衛門戸大夫に行あひ。外は見しらぬ共心の鬼にて戸大夫に見られまじと。道をかけぬるよりかへつてふ審たち。まてと聲をかけられ常にとなりと身が方へ心やすく。さかなをいゝゝ其方が身共を見ていやがる心ね。がてんゆかずと二言ともなく三人かゝり打たをし。くはいちうを見れば大藏かへな忍山とありて。手跡も人だのみなれば證據にならね共文ていまがふ所なく。なにとやらん取きた心もとなきゆへ近日鎌倉へ立のくべしとの義。あて名おかる殿とは妾の名なればさあおのれまつすぐにぬかせばよし。遅々いたさばぶちはなすとおどしに。さすがは下請にて大藏にたのまれ通達するわけ。のこる方なく白狀しけるまゝしからば案内すべし。ほうびには過分の金子を取すべしとてさきにたてゝ。直に大藏がかくれ家へ案内もなくつつといれば。大藏それと見るよりもはや絶體絶命の場と覺悟をきはめかたな引をばめて。文藏に打てかゝるを戸大夫よこあひよりつけいり。よこばらへぐさとつらぬく刀は左の肩へぬけ出たり。文藏殿親のかたきと一太刀きり付らるれば八郎左衛門は主君のかたき國

のあたと。くび打おとしけるといなや戸大夫しさつて。さしぞへさか手にわが腹へつきこまんとするを。八郎左衛門
 その手にすがりとむればわれ大殿を害せし。下手人にしてたま〜大殿殿にたのまれ娘ふびんさのあまり心をへん
 じたるらん。武士のかざかみにも立がたき身のうへわれだに死すれば。娘をおめかけになされ下されてもさはりはあ
 るまじむすめが申しわけには大殿殿をたづねいだし御本望たつせさせまいらせしにて。何事も御ゆるされてすへなが
 くめしつかはれ下さるべしと。ぜひ死なんととのぞむを八郎左衛門。いや〜一通りは聞へたれ共。最初大殿殿にたの
 まれられしも息女ふびんの心よりの義なれば。今日息女のために心を變ぜらるゝ事。是はじめよりの望にある所なれ
 ばふ義にはたゞずそのうへ大殿のかたきは大殿殿にてたゞ今事相すみたり。申ても御代つぎ藤松様の御ゆかり。さあ
 若殿戸大夫髪を御きりすてなされませいと申上るに。尤と文藏やがて戸大夫がもとどり切はらひ。それより大坂へ通
 達あつて今川もふじまつ殿も。よびのぼせめてたく越路に歸國あり。いひなづけの橘數馬殿の息女笹ひめをよびむ
 かへて祝言あり。今川はおそぼがしら奥州もうけ出されておてかけにそなはり。藤松殿をわか殿とさだめ鎌倉へ文藏
 殿御家督のねがひとこほらず。一家中のにぎはひ知行は穂に穂さかへ〜てめてたひ事づくし年〜かさなり。福
 徳そなはる政道におさまる國ぞめてたき。

明和貳年酉正月吉日

江戸大傳馬町三丁目

鶴鱗堂 山野孫兵衛板

五之巻終

跣婦人傳

龍も穴に住ては土龍の店をかり。鯉も浅みに出ては目高と鼻をひとしうす。此書也むかしく入口の婦人せきが顯す處にして。色道玄々の至極を述たり。既に紙屑籠に投じて老鼠のしとねにならんとせしを。例の道人。傳を著はし文を編して漸く二三が六章を得たり。至れる哉。盡せるかな。腹實圍ひの切り賣して。寂光淨土の揚屋を見下し。釣鬚したる奴子を相手に眞實自然の情を悟る。文は辻番の卑しきより出て。理は火の見櫓の高きよりたかし。河岸端のいぶせきに居て二階座舖の尊きに通ず。何れ一流正統の粹人なり。是は高慢の鼻かけ地藏の化身たる事。疑ひなからん。抑至盛は大夫の徳にして廓中の本尊なれど。春宵一刻の樂み。難波の事のよきも悪きも。吸蔓の花のから名に従ふなるべし。勢ひつきては蛸も足をすぼめて蛇となり。鰻が發心して山の芋となるかもしらず。されば黄金の肌とはいふならん。思ふに身は中流の船と等しく。常に帆あしをかけたつはづしつ。客の機嫌をとり梶面梶。なせどもく或は地色の風にさらされ。または密夫の波に洗んで。彼の岸に漕付る事は。桃源の思ひに等しかるべし。跣は實に老君子の肺肝に入り。江口の君の流れを酌んで眞實不二の妙處に至れり。癡好も口をつぐみ。式部も指をくはえるの才もあらずんば誰か此理を發明し。何ぞ此章のこゝろばせを知ん。酔て考へ。醒て思ひ。よくく此書を熟讀して大門に至らん人は。此道の聖域に入るべし。嗚呼かの闕文見まほしきことを。

寛延ふたつの秋

風 鈴 丈 人 漫 畫

跣婦人傳序

水の清麗なる塞で流れざる時は子を生子を生じ。五穀の生を養ふ體で食する時は肝胃を損す。既にあんばいを失なつて
 咎を羹にぬり付る。思ふに無寐ならずや。傾城流れを失なつて山猫を生じ。地色味を損じて御赤飯組となる。凡物
 に長ずれば必ず方圖なし。古しへの色たる者二つ。今の色たるもの數十に及べり。僧形の酒者あり。賣物の地女あ
 り。いゝつべし。下流に居て上に反する徒なりと。予が支泥郎子也。爲人飄輕にして普く此道に通習せり。上は揚
 屋の雪に映じ。下は管船の螢に照し。悱々憤々たる筆既に年あり。且跣婦が六章を一覽せしより。忽ち龍の雲に乗
 じ。大晦日に金を拾ひし如く。臂を張り鼻を微腫つかせて。一旦豁然として色道の團底をうちぬきたり。終に跣婦を
 推し貴んで。風情を江口の下にあらざとし。是が爲に傳を著はし。來つて予に見せしむ。予是を熟覽していはく。天
 まつに跣婦を以て拍子木とせんとす。我もまた子が爲に序せんか。泥子莞爾として笑て曰く。善哉々々。此書の全意
 之を以て充べき而已。

寛延二年孟冬既望

杯 物 郎 書

四十振袖好
 相見惹客頻



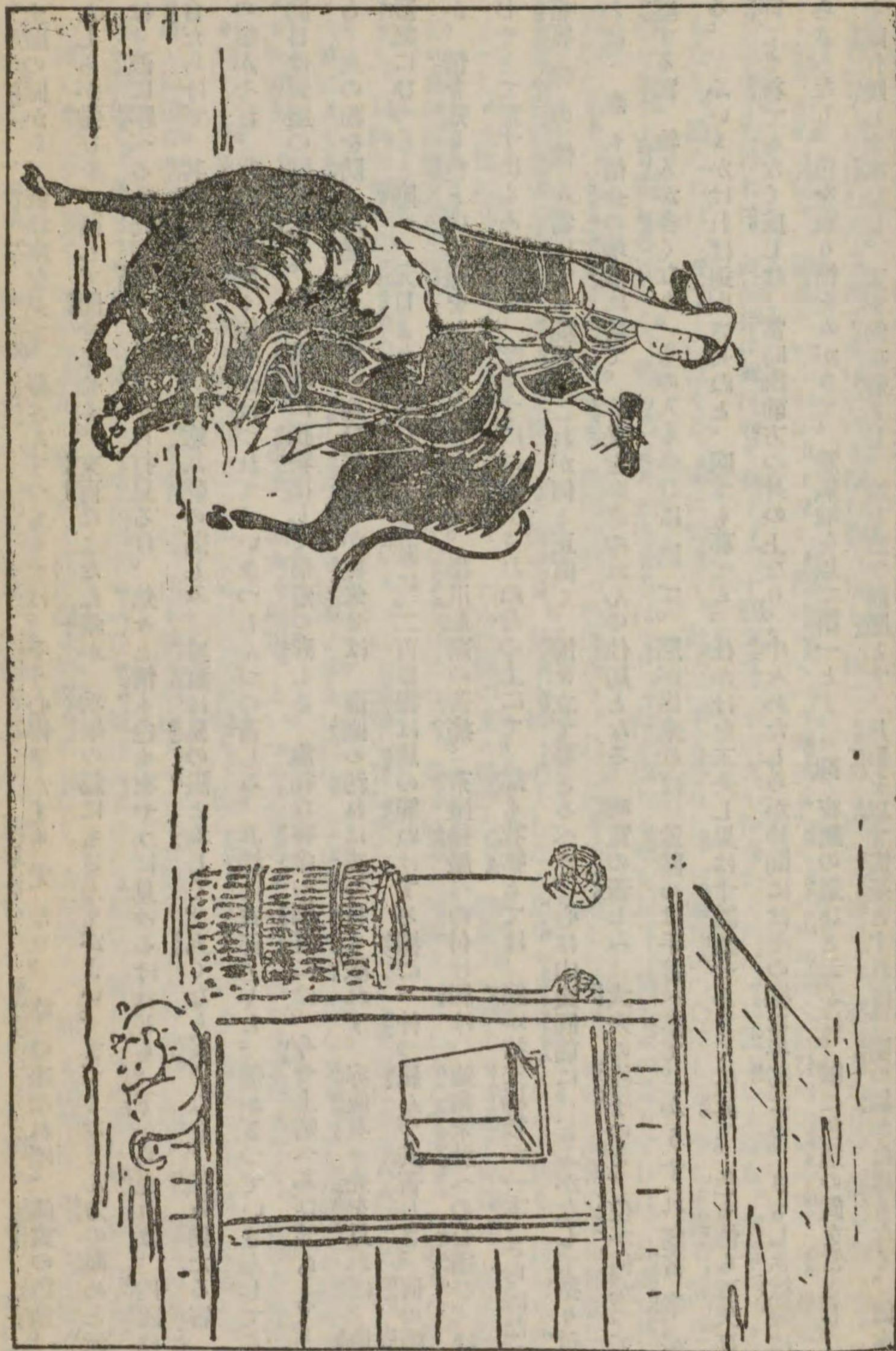
交情總若醴
 希笑獨醒人

兼子題

跣婦人傳

夫造物者の功用たるや。千態萬象にして。其變化も交極なし。南枝北枝の梅の開落。既にことなるを見るにも。非情すら猶斯の如し。況んや人倫に於てをや。好悪貧富は。即ち天の命ずる處にして。人力の施す處にあらず。下惠盜跖。兄弟の如くなるを以てかんが見るべし。是等はすんど上代の事にして。しかも見ぬ唐人の寢言なれば。虚かもしらず。いつの比にか色と欲との堺町に。仕切り場を勤めし男ありけり。坪皿のそこはかとなき。仕舞博奕の。どうも動かぬ身となりて。小見世物のいゝ立と。變じて見ても。川太郎の尻がつまらず。七化のばけしまひが。終に二人の娘を賣喰にして。果は完落の角めだちて。忽ち闇雲に打乗て。何くの空へか逐電しけり。誠に鐵砲の玉と。人の行衛は。しれぬものにて。妹娘は新町の三浦へ買れて。高尾に仕はれ。青柳といへる格子女郎と成て。嬌なる名を揚屋町に耀かせり。性質利口にして坐鏡なく。位あつて。和かて。古手買にみせても孔雀絞りの立者とは知られたり。夫に引替て。姉娘は。すこし食粒の過し生れにて。同じ流れの浮節ながら。ひよんな處へ入江町の夜鷹と成て。川竹にあらす。うき材木の蔭に功勞へて。三十振袖の酒者とはなりぬ。青柳は我身の全盛につれて。姉の事を思ひ出せば。同じ勤のういが中にも。我は錦繡の暖かなるにくるまり。名木の烟りにまみれて。金銀は卑しきものと。手にさへ觸れず。萬づ雲上にのみ。暮すを思へば。大名の御姫様も。我身の果報も。只毛の三筋足らぬばかりなるべし。夫に引替へ姉様の苦し。寒風に素布子着て犬の産所を見る様な孤張に床入して。露霜を凌ぎ。漸くぶつけに腹をふさげば。はや夜鷹蕎麥の浮名を立られ。嗚や苦しがるべし。其上夜鷹に姉ありと沙汰ありては。苦界する身の恥なれば。兎角此里へ引取りせめては河岸か伏見町の勤めでも。今の苦しみ外聞には遙に勝るべしと。前々より度々いへども。

元より氣強き生れつきなれば。我がいふ分では中々隙入れ給ふまじ。兎角。姉女郎衆を頼みて得と合點の有縁にいふてもらひ。すかしたり。恥しめたり。どふがなして。得心させましたく。此大略を高尾に咄せば。高尾も聞より成程尤もなる願ひなり。手前の口からいなものなれど。おれも高尾といふて其名高く。此道の惣太夫となり。幼少より世界の粹の中にもまれて。諸護手管の仕かけ迄一ツとして暗からず。自恣な客衆。利口な末社。無理な口説に出合ふてもついで一度の不覺をとらず。おぬしの前では遠慮なれども陸場所へも往とどかぬ。姉御の口先き。どのやうにもいゝくるめて。其日から此里へ勤めたいといはんす様にして見せませふ。もし此事をいひふせずば。おれも高尾じや。二度此里へ歸らぬ法もあれど。花車な口から廣言はなつて。いつぞの序を待ちたり。打節幸ひと。深川の開帳参りに事よせて。妹女郎の山路をも引つれ。三人連にて會所より樓船に乗て。早くては目出つも嫌なり。晝の間は二間茶屋に遊び。歸りがけに尋ねべしと。なにがそれ者の寄合。此三人が口を揃へて言廻さば。いかなる天魔鬼神なりとも黒雲より猪牙に乘らせ。鑊杖をも質屋へやらすべし。まして夜鷹の五人や三人。わが粹方のいたつた咄しをして聞さば。いか程我強き姉御なりとも。忽ち賤しき心をひるがへし。夜鷹の苦患を救ふべしと。自慢たらん夕しほの暮かよる時分洲崎より船を歸し。材木河岸を見渡せば。今ぞ夜見世の出じほなりけりと。三人は船より上り。何れも禿を左右に引連。遣手若者にかしづかれ。八文字の道中。ゆたかに練り出せば。光り耀やく生無の瑤瑤は。未だ月あらざるに何の影ぞ。蹴出しにひしめく緋縮緬は。時ならざるに何の紅葉ぞと。目を驚かせり。青柳は先へ駈抜け。姉を呼出して。立ながら積る事どもそこゝに咄しぬ。扱姉女郎衆。今日開帳参りの序に。御前にお目にかゝりたいとて。朝から此處へ御さんすが。ちよと逢ふて私が御世話になる。禮をもいふて下んせといふにぞ。姉は早や合點して慥に是は妹に頼まれて。吉原へ藏替の勧めにきたので有べしと。獨飲込み。成程御目にかゝらふ程に連ましてきやといへば。青柳は悦で二人の姉女郎を案内すれば。姉のせきは少しも騒がず。通々と丸太に腰を掛けながら。件の舊席を左り



に抱へ。喰残りのけんどん茶碗を右の手にかいこんで。少しもうてたる色目なく。高尾山路を目八分に見下し。是れは是は御二人の衆よふこそ御ざんした。青柳が何やら斯やらいかいお世話になるげに御ざんす。随分かあいがつてやつて下んせと。鰯なき言葉に。高尾は仕すましたりと會釋して。アイ左様で御ざんす。それはく青柳どのが。いたい氣にして下んすことは眞實信の兄弟と思ひまして。何のかのと勤のうさをも語り合ましてきつい力に成ます。夫に付ても主様の事を。青柳が不斷いはれますはどうぞして。同じ廓に勤めたい互ひの樂しみにも成事じやと。私等迄が思ひます。申すのもどうやらしけれど。廓といへば色里のつかさなり。聞へもよく。人々の辛抱次第で。座敷持にも。立物にも。ついなるるゝが勤の手柄。今の御勤めの艱難は。嚙々苦勞でも御ざんせう。其上御前の御器量なら。縦令太夫にならんしても恥かしからず。先第一に。ひとつでなく。張が強く功者もあり。粹な客ほど受取座配。いく度床入さんしても。大義にも思んせねば。床第一の屋形衆にも至極よく。功者が有て床がよければ本に鬼に鐵棒。はやらしやんするは慥に私が請合ます。おりく御聲の鼻へぬけるも。兵四郎風のめりやすには。どふもいはれますまいし。是程の御身を以て。今の勤めをさゝんすのは。玉を泥に捨るとやら。さりとは惜ひ事。御前を女郎に仕て見たいと。そろくと勸かゝれば。せきは聞より色を變じ。怒の鼻聲耳に響きて。コレ高尾どの。皆迄聞に及びませぬ。それは粹を虚氣にするといふ言まはし。咄のやうな事ながら。毎夜壹貫五六百は。端目なしに賣こなす此せきてござんすぞへ。其様なしらくしい直魯意くるめで。今時の人が斯るものでは御ざんせぬ。白化の今の世の中に。中々二人の衆の様な。青い事ではいけません。夫も道理。わづか三町四方足らずの廓の内。客衆の五人や拾人や。取りさばかんす心で。わたしらをくるめさんすは。ほんに天水桶の子子とやらん。大門の外的事知らぬ。目狭き衆の口からは。意外で御ざんせう。わたしが勤めといふは。こな様がたの二日分程の客衆は。夜食前に勤めます。そうじて色も情も粹も野暮もしりもさんせぬ心で。賤しい様に思んせうが。湯殿雪隠とり集めて。百疊たらずの揚屋の座敷で。

土藏の間から。狭ひ空を見て。暮さんすつもりでは。そう心得さんすも尤なり。幸の事なれば。眞實の色道。わたしが遊びを。話して聞せませふ。文盲なこなた衆が。功學の爲にもさんすがよい。まづこなさん方の勤めと云ふは。波に浮べる水鳥同前。よそ目から打見るは。悠々と情も色も有やうに見ゆるけれども。下から見れば。内證は釣合だらけて。其水掻のせはしき。八寒八熱の若しみ。盛衰は猫の眼と均しく。丸くなり長くなり。頼み切たる客衆の氣がそれ。當にして置く無心がはづれて。いきつしんづの苦しみ。其様に衣部へと。着かざつていさんしても。明日は質屋の藏を塞ぎ。わが着物に損料出して借着の悲しさ。龜相な客衆の酒盛には。今や上着へあびせらるゝかと。火の粉を防く取廻し。寢相の悪ひ客衆が枕失せば。蒲團の汚れに夜の目も眠れず。赤飯臭き禿を見れば。胸の動氣にひつしと應へ。元日より大晦日迄。月に華に。二百日程は馬の籠ぬけする様に。伸つ屈んづ其苦しさ。何の隙にか。情を知り色といふ道をわきまへさんせう。指爪起請の苦痛。茶屋揚屋への付け届け。連衆末社への心遣ひ。けふじやとて着すにもあられず。やらすには猶濟されぬ身の上にて。然も我物としては。錢が拾文楊枝が一本。さらになし。皆客衆の懐を當にする境界。これが何と正直で。情を立て暮さるべき。心は山賣同前に。どぶがなして括り付けねば。忽ち借金地獄に落て。赤恥をかきのれんの住居となる。呵責の苦しみ。大夫の格子のと。位が何がつて全盛する程。物入が多くなり。もの入も多ひに隨て。慾が出来れば。追詰めは手管へ落て。かうすれば客衆が登る。どふいゝかければ退引させぬと。明ても暮ても。仕かけを工夫し果は十露盤せんさくに成て。色も情も取失ひ。粹でも杭でもなく成しは。當時御前方の身の上なり。中々わたしが仲間にはその様な卑劣なる。さもしき欲氣はさらさらなし。色を賣り情をみがきて。意氣地を以て第一とす。抑夜鷹の遊びと云ふは。誠に色道の眞を常とし。欲を離れ賤しき事なし。天を釣夜着とし。地を三ッ蒲團とす。月影を以て燭臺とすれば。明の届かぬ處もなく。眞を切る世話もなし。川風に床をあふがせ。夕立に打水させ。八百八町の河岸通り。皆私しらが次の間とおもつて居れば。

百萬人の一座でも。ついぞつかへた事がごんせぬ。物日なく。身揚りなく。天地破れねば。寢道具疊の表がへに氣つかひなく。引込む禿も。持たれば客衆を頼む物入なし。床てくるめる間がなければ。客衆をたらす偽を知らず。飢へし奴子が心に任せ。歸るといふわがまゝなし。横にゆくべき卑劣もなく。心中の間夫狂ひのといふやうな。鼻毛の長ひ客衆がなければ。此挨拶に氣ほねも折す。二十四文で二十四文が情をかくれば。口説といふ様な。家暮らしき沙汰もなし。嫌なればこず。すけばくる。客に偽なく。此方に手工多なし。只眞實信の心にして。少しも飾る偽なし。偽りなきより誠なるはなく。飾らぬより正直なるはなし。此正直なる心を以て。男と女の交りすれば。此處が色道の根元にして。ちと洒落才ことながら。陰陽自然の色道なり。此色道を以て樂しむ時は。客衆に勘當心中の難義なく。女郎に自前借金の辛勞なし。もえ出るものと詠せし。妓王が操。心とむなと思ひやりし。江口の風情も。自からわきまふべし。女郎に苦しみなく。客に樂しみあり。わが色道の玄々微妙なり。御前方の響そやさんす粹達は。椀久様を始め。藤伊様紀文様を先として。何れも盡して見さんしたれど。是ぞ此衆の流義といふるしもなく。添通した女郎もなし。只時の張合にて。金つかはんしたばかり。いはゞ是等も青ひから。あたら身上を皆にさんした。是といふも皆女郎によくあるゆへ。金銀でせり上。客衆を流浪させましたり。辻立や狂氣にならんすも。こなた様方の様な衆が。立物顔して。全盛するゆへ。情誼。名曳。素女。檜垣。といへる君達の。流れを汲べき女郎もなく。色道の風情は廢り果て。手近くいへば。欲と虚との二つでかためたこなた衆と。飾らず。貪らぬ此方の意氣かたとは。大鵬と。土龍ほどの違ひなり。またも片腹いたき事には。色も情も胡椒丸のみの女郎衆。わが身の睡い腹立が。扱は前方なる客衆を振付て。是を一廉張と心得。ちと時花出すやいなや。無性によきかと思ひ。儘目なもの前には。俄の床がけ。この賤しさ。さもしさ。不洒な女郎の勤を捨て高尾様も夜鷹がましなり。山路様も。妹も諸共に。わたしが弟子にならんせと。一言もなくいゝ伏られ。二人の女郎は。天窓も上らず。臍をとられて。暮正月を頼みし客の。俄に國へ

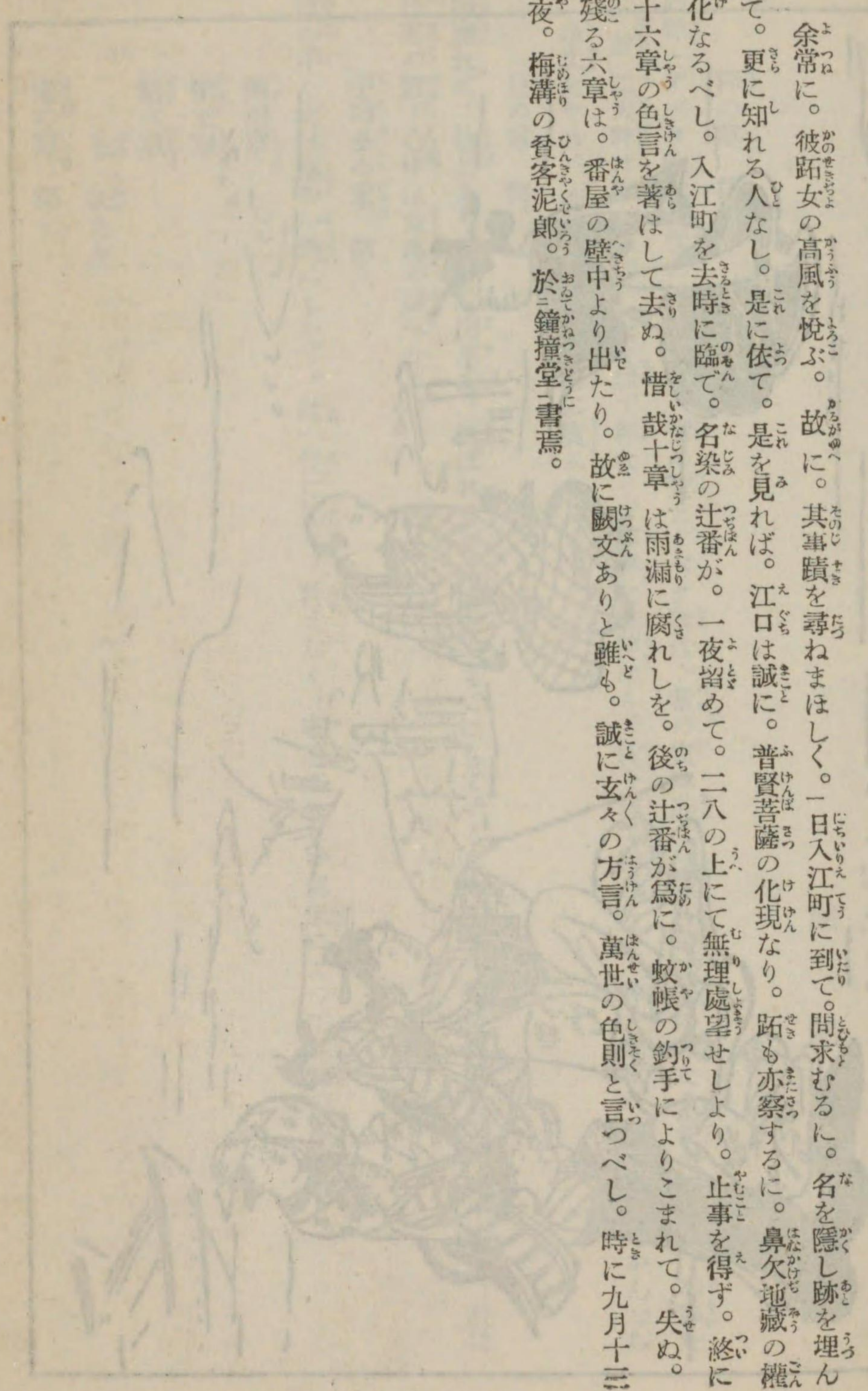
立ちたる思ひ。取はづしたるあしたの如く。忙然として立ち立れず。うろくするを。ようく道手に助られて。船へ逃込み。初て黄なる息をつきぬ。

泥郎が曰。我はじめ此章を得て。其言を信ず。後三浦の遺手が咄しを聞て。其行を見る。爰に於て思へらく。象も。吾髮筋を以て。繋ぐ事を知る。鯨をも。吾腕を以て。押へる事を得べし。蝮蝎に至ては。是を釣べき餌を知らず。彼は是。婦中の蝮蝎なり。老子曰。虎も其爪を措處なし。生姜酢でもいけずとは。誠に。妬婦がいなる哉。

里雀曰。大坂夕霧は座頭に一度の情あり。江戸元祖奥州は中町にて一文銭を戴きたり。是等は諸客の美稱する處なれともみな一小意氣地にして。大道をいふに足らず。一代男の與の助が女護の島渡り。椀久が小判の豆蔲も。皆浮氣の沙汰なり。粹過れば虚なり。虚なければ溺れ易し。青樓ありてより。妬婦が如きははまだあらず。

色 説 序

余常に。彼妬女の高風を悦ぶ。故に。其事蹟を尋ねまほしく。一日入江町に到て。問求むるに。名を隠し跡を埋んで。更に知れる人なし。是に依て。是を見れば。江口は誠に。普賢菩薩の化現なり。妬も亦察するに。鼻欠地藏の權化なるべし。入江町を去時に臨て。名染の辻番が。一夜留めて。二八の上にて無理處望せしより。止事を得ず。終に十六章の色言を著して去ぬ。惜哉十章は雨漏に腐れしを。後の辻番が爲に。蚊帳の釣手によりこまれて。失ぬ。残る六章は。番屋の壁中より出たり。故に闕文ありと雖も。誠に玄々の方言。萬世の色則と言つべし。時に九月十三夜。梅溝の貧客泥郎。於鐘撞堂一書焉。





泥 郎 章 句

色 説

粹の章 第一

粹の粹とすべき物は。常の粹に非ず。實の實とすべき物は。常の實に非ず。諸客皆。粹の粹たる事を知るは。不粹なり。故に大粹は粹ならず。是を以て粹なり。不粹は能粹なり。爰を以て粹ならず。粹人絶されは。色道さかんならず。血文をやめ。起請を捨て。女郎に實あり。

色の章 第二

色道廢れて。物日あり。間夫出来て。仇ほれあり。大盡ふもてにして。くるめあり。内證昏亂して。心中あり。故に貧は客の常。心中は女郎の衰へなり。

手巧多の章 第三

數百の手くだは床の一悦にしかず。此一悦に至て。粹もなく。家暮もなし。其無によつて無量の極意あり。

第四章

第五章

第六章

各 闕たり

遊の章 第七

能遊ぶ客は。もてるに心なし。能樂しむ客は。面白きに心なし。もてるに心なく。面白きに心なき時は。何處に遊ぶとしてか。もてざらん。何れの女に逢としてか面白からざらん。

第八章

第九章

第十章

各 闕たり

大盡の章 第十一

粹をやめ知恵を捨てば。遊の利百倍なり。ぜいを絶もてを離れて。女郎眞實にかへり。間夫をせかず。口説をせねは。女郎に偽なし。大盡至りを失つて。粹を落。粹を失て。手くだに落ち。手巧多を失て。指爪あり。指爪は。女郎の難義にして。大盡無手金の初めなり。

間夫の章

第十二

女郎身の上の章

第十三

意氣張りの章

第十四

右三章條目有て闕文

太鼓の章 第十五

古のよく太鼓を持物は。大盡を利口にせんことを欲せず。愚にせんとす。遊の續き難きは。粹になるを以て也。粹になりて遊ぶは。遊びの下品にして樂しみの盡かゝりたるなり。旦那愚かに末社たはけにして。遊樂長久なり。第十六章闕たり

評

泥子曰。椀久物狂と成て曰。破れば。ぐわちもなかりける。葛城無間の鐘を撞くとき。家暮ならこふした。浮目はせまじ。此言漸く大道を知るに似たり。窮して正にかへる惜哉。尻放て。尻をすぼめたること。又曰。四代目の高尾曰。粹じゃ〜といへど。來ぬが粹なりといへり。此言大道に似たる。異端なり。これ斷無にして。陌婦人が。不味因果にそむけり。

浮世の是非。彼我は。萬事塞翁が馬なりと。古風の洒落者の。諺にして。誠に萬古不易の金言なり。凡木の曲れるものは。木挽町に鋸の難をのがれ鵝の聲なき物は。瀬戸物町に鍋の害をまぬかれぬ。因て思へば善は不善にして。不善は善とやいはん。とかく犬猿の密合。蠻氏融氏の角めだちたる有さま社まことに水懸論なるべし。鼻凹の見にくきを笑へば。闇の夜に用心よしと悦び。聲の不自由なるをおかしめば。雷の聞へぬ徳ありといふは。ある肝煎姥の骨槽なり。彼が鼻欠けにならん事かたく。是がつんぼにならん事かたかるべし。只虚靈にして谷心中に座せんこそ。我儘の妙所ならん。爰に一日石原社にあそんで。一竹簡を得たり。これ。跖婦人が言の葉にして。鳥の跡たらず。傳へて六章あり惜哉。その全書見る事不能。今猶残れる所を察観するに。至女神妙。皇々としてその奥を得ず。黙々然として。翫味し。暫らくして悻々焉たり。やゝあつて天々乎たり。反復するに。嬉々把々として。仰て嘆じ。俯しておもふ。眞に。其辭簡にして。無聲無臭の妙所にいたり。巻ときは。懐にかくすべく。のぶる時は四海にあふれつべし。其化のおよぶ所。野夫飛で粹にいたり。眞御侍たちまち戀の淵にはまる。彌高く彌堅し。惘として座をわすれ已をわする。眞に後世の賜物なり是が爲に事を好むの雅英子。跖婦が事蹟をつらねて。一卷として。其遺章の後にしるせる處。綱領細目南華老子の陽にわけ入。猶其上に出たり。心術を論する。きもなますのふとひ猷立に。伯夷叔齊が。蕨とつて餓死だ偏屈より。比干。子胥が無分別尾生が。馬鹿律義。いづれも犬死の取沙汰。人間わづか。百年足らぬ命。そのうちにも死だの生たの。頭痛疝氣の事まで。十露盤にあてゝ見れば。口明て笑ふ日は。漸く一月に四五日なり。夫に八百萬年も生る氣に成て。名利に使わるゝは。いかい白痴大厦千間なるも夜臥八尺に過すと。一口味噌にいゝ込たる。神色容貌。歴然と見るやうなる文勢。勇辨遺文。卓然として句々金玉の聲あり。これがしりえにつたなき辭を添えん事。印殿に煉珊瑚樹の。とり合せにひとしく。見る人の誹り笑ひ草となるかも。聞かぬが極樂と。空嘯いて。是も志意を悦ばしめ。命を養うの道なりと。隨意の荷擔人して放言なをやまず。王濟杜預が類には

寛延己巳歳長月下浣

葛飾守株窓

寶曆三癸酉正月吉日

跖婦傳續編
東武書肆

近 刻
萬屋彦八
川村善六
大坂屋秀八

跖 婦 人 傳 終

本朝水滸傳

本朝水滸傳序

いてやむらきもの。心のくまの八十くまを。樂ぎろひの本のかにしも。いひわたるものは歌なり。或は又うつせみの。世の事種の五百ぐさを。うまこりの。あやにしも樂いつぐるものは文なりけり。こゝに吾友太氣能の綾足は。歌をこのみ。文をこのむ。さは本の樂にしもいひわたり。又あやにしもかいつぐる人ならむ。抑も奈良の大御代ゆ上つかたの言は。秋の月夜の西にくたせるごとく。唯幽かにのみ残りたるさまになんおぼゆるとて。是を望月の。たはし聞えむことを。萬づにつけておもひめぐらすなへに。よしの物語とふ書を作りて我に見す。こは實に作れる物語にて。事は漕ぐ舟の跡なき事ともなり。しかはあれど詞はいそのかみ。古き事ともゆ考へ合せて。かの世にたはし聞えむ物としつるに。讀得て其古言をとらむとする人には。蓋や此書もよしあるべかめれ。又是を水滸傳と號けし事は。作れるおもむきのよく其ふみに似かよへばとて。よしの川邊の事によせて。書屋がわざにしつるといふ。なる

明和十癸巳陸月

大神太夫 藤原朝臣加禰與 しるす

本朝水滸傳序

本朝水滸傳目錄

卷之一

第一條 味稻の翁仙女と契り百人の子をまうく
第二條 太宰府の阿曾丸勅を受けて弓削道鏡を召まゐる并高野天皇道鏡を愛始給ふ

卷之二

第三條 藤原倉丸石村村主奏するによりて藤原惠美押勝を討しむべき勅あり
第四條 道祖王釣舟にめされて遁れ給ふ惠美押勝戦ひ負る

卷之三

第五條 豐丸角丸が骸を繞く并佐保の大道に首を梟る
第六條 惠美押勝祖王を將奉りて伊吹山に隠る白猪老人祖王をあづかり奉る

卷之四

第七條 豐成がむすめ狹霧姫を王に奉る押勝印を授て七人の物部を國々に出し自は東國にくだる
第八條 和氣真人清丸勅をうけて宇佐の八幡大神宮に詣つ詣て終りて歸るさに巨勢金丸をとふ

卷之五

第九條 清丸神のをしへを奏すによりて道鏡に罪せらる巨勢金丸清丸をたすく并金丸親子みづから死す
第十條 金丸親子清丸を將て紀伊の温泉にしのお井泉彦軍書を講く

卷之六

第十一條 守部が輩罪をゆるされて清丸金丸が跡を追ふ清丸が妻子金石獵野に逢て紀伊國にゆく
第十二條 山賊清丸の妻子を盗み去る明日香大太刀金石に逢ふ并人々伊吹山に行く

卷之七

第十三條 忌部宿禰海道跡見武雄同しく武荒の兄弟に偶て清丸の妻子をすくひ并三人して清丸のとははれをす

卷之八

第十四條 海部鯉劍術を教ふ并奈良丸を立て大將とし徒をつどへて白山にのぼる

卷之九

第十五條 二人の大將軍々兵と徒を將て白山のいはにこもる并泰澄法師兵糧の事を謀る
第十六條 大伴家持泰澄に逢ふ并家持が放てる鷹を諸兄すもちてかへしたまひ糧を白山に贈らしむ

卷之十

第十七條 守大伴宿禰家持糧を白山に贈る并和爾部眞太刀家持の舖に來る
第十八條 清丸金丸手節が崎にて妻子にあひてともに將て伊吹山にのぼる

卷之十一

第十九條 人置の眞鯨韓白の犬神金をわかつ并弓屋の俊雄隱妻をむかふ
第二十條 弓屋の俊雄人置の眞鯨訟す并高橋手力二王をすくふ

〔これより以下原書に目錄のみありて本文無し讀者勿惑〕

卷之十一

第廿一條 高橋連 手力盜賊をゆるして我役及氏姓を譲り高橋連 足柄と名のらしむ并盜賊を集て碓日にこ

第廿二條 高橋連 足柄俊雄が罪をゆるす并 兵を將て碓日にむかふ

卷之十二

第廿三條 高橋連 足柄俊雄が罪をゆるす并 手力寄手の馬をたばかる

第廿四條 盜賊等三河遠江に忍び文石倭蛛をかたらひ人の財寶を奪ふ并 赤坂の宿にて手力に行逢ふ

卷之十三

第廿五條 國々の訴奈良の都にのぼる并 道鏡はかりて大伴宿禰書持を白山にむかはしめんとす

第廿六條 光明 皇后浴室を立て手づから往來の人をあらひ給ふ乞食來りて皇后に事をかたる

卷之十四

第廿七條 皇后ひそかに書持をまねきて事をあかし給ふ并 書持位保の郎女に別れを惜しむ

第廿八條 書持白山にむかひて戦ふ并 書持戦ひ死す

卷之十五

第廿九條 大伴宿禰家持世をそむき立山に隠る并 書持が靈魂出て家持にまみゆ

第三十條 鞍馬高神陸奥にありて術を賣并 勝虎兄弟鹽燒不破の二王を將て奉り奇丸に逢ふ

卷之十六

第三十一條 酒屋足丸外濱にありてえみしをはかる家持北國の并 軍兵を將て外濱にくだる

第三十二條 蝦夷の棟梁カムイポントンビカラ使黨を將て海を渡り來る

卷之十七

第三十三條 惠美押勝家持はかりて和す并 カムイポントンビカラ美人を乞ふ

第三十四條 奇丸が文外濱に到る并 家持松島に行て不破内親王を將て參る

卷之十八

第三十五條 足丸はかりてトビカラに内親王を拜さしむ并 トビカラ神孫の貴きを聞てことごとくくしたかふ

第三十六條 鹽燒王 鹽燒となりて殘香玉の姫にかたらふ并 守部等王を射殺す

卷之十九

第三十七條 勝虎兄弟守部等にいけどらる并 姫おひて死給ふによりて淺香王くみす

第三十八條 不破内親王 鹽燒王の墓をいたきて隠給ふによりて人々悲しみの歌をよみ姫の墓をならべてつくる

卷之二十

第三十九條 宇佐八幡の森に天狗集る并 阿曾麻呂前の采女を得たり

第四十條 阿曾麻呂政務をみだる并 箱崎に遊女を置く

卷之二十一

第四十一條 阿曾丸が家人秦金明 諫む并 妻子を殺さる

第四十二條 藤原清河揚貴妃を將てひそかに筑紫に歸り住む

卷之二十二

第四十三條 清河松浦の娘子に契る并 阿曾丸に近づく

第四十四條 小治田連珠名清河にめぐり逢ひて昔を語る并 阿曾丸を討む事をはかる

卷之二十三

第四十五條 金明糧を斷て香椎の宮に祈る并姑の老婆來てなげくといへども金明諫るによりてともに祈りて爰に餓死す

第四十六條 揚貴妃日本言を習ふ并珠名が妻ともにも阿曾丸につかふ

卷之二十四

第四十七條 阿曾丸船をうかべて樂しむ并あやしき魚阿曾丸をうかゞふ

第四十八條 海人の男狹磯清河に逢ふ并男狹磯に事をはかる

卷之二十五

第四十九條 阿曾丸箱崎の濱にわざおぎやをつくる并遊女等俳優舞す

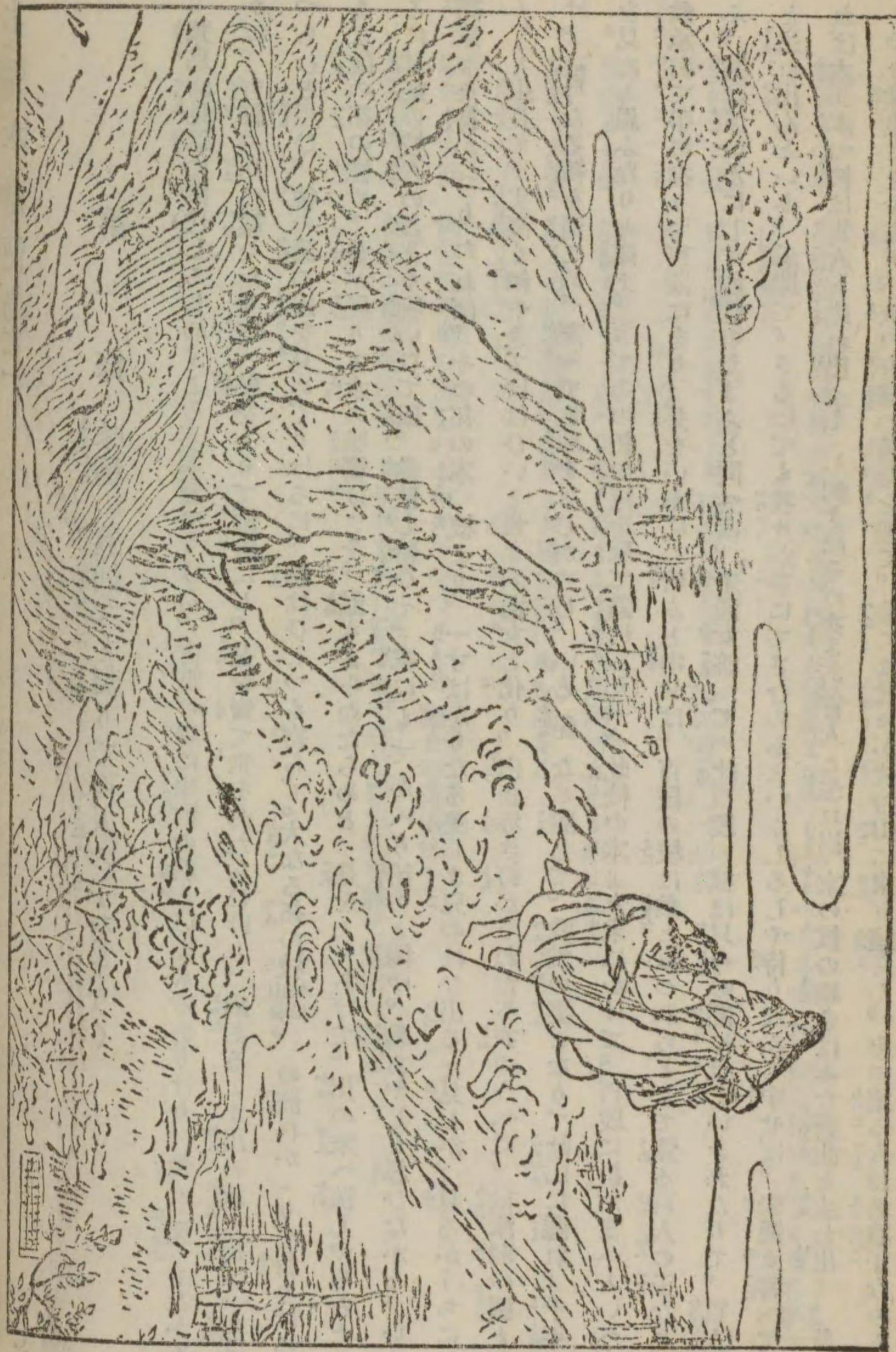
第五十條 清河が妻珠名が妻ともに阿曾丸に殺さる并珠名揚貴妃を將て熱出へ歸る

本朝水滸傳卷之一

第一條

味稻の翁仙女と契りて百人の子をまうく

飛鳥河見原に御代しろしめすころ天武天皇なりけん。吉野の里に味稻の翁といふものありけり。世の業もなかりしかば。吉野の川に築をたちて。鮎をとりて飯鮎にし。是を賣て世をわたらひけり。翁あるとき川の邊に出て。鮎や寄つらむと思ひ。彼の築の邊を見めぐりけるに。鮎はひとつも寄らて。大なる拓の枝山象の流れかゝりて侍りけるを。あな醜の拓の枝や。是が懸りて水の鳴響ばこそ。鮎もよらぬならめと。是をとりあげて。川の末へ流しやらむとしけるに。拓の枝人のごとく物いひて曰。翁流し給ひそ。家にもてかへり給へと聞ゆ。翁あやしと思ひながら。いふが隨意々々持かへりたれば。その拓の本つ枝より。一寸ばかりなる美しき兒のはひ出ると見しが。見るがうちにひたくと生長て。丈高く細やきてけはひいと貴き未通女と化り。白き赤き打かさねたる衣のうへに。秋津羽の襲とりかけ。紅なる袴を着こめ。薫みてる扇をさしかさし。いと艶なる聲して。我翁の妻となりて此山に隠れ。千年の末を見んと思ふなりと聞え。さてその拓の枝を取て翁にあたへ。此枝の本より末にかけて。百段に折たまへといへは。翁承引て手に握りて百段にをり。是をいかにし給ふと申せば。百段の枝は翁とみづからとして産る百人の子なりといふ。其は又いかにして如此のたまふと問へば。未通女答へて。此百段の枝は只今の間に世にいきわたりて。百人のひとと生れ出んといふ。翁聞て。さるにても我々が子にてさむらふといふしや侍りなんと申せば。未通女答へて。されば太き本つ枝は貴人と生れ出。すこし細きはそ次々の官人と生れ出。末の枝の細きはみな蒼生と生れ出。此處にいゆき彼處にとどまり。世の有様の善惡を經て。終には我々が住む山に來り集らん。その集る人は皆我子なりとおほ



せ。是かさる器なりと告終り。その百段の枝を又川の邊に擲出。今翁と自として此河に流しやらん。此水に流したるがひて。夜日をわかず紀伊の海原に流れ出ば。波に隨ひ風にまかせて。只一時に國中の浦廻をめぐり。其中には唐國にいきて生れ出るも有べし。蝦夷の島に生れ出るもはべらむ。又海なき國は河を溯り來て。今五十年が間には。善人悪人種々生れ出んといひ終り。翁の手をとりて彼方へと聞ゆるに。白き雲立渡りて。耳香の嶽にたなびきけるを。地を踏なす踏したき高山のいゑりに紛れうせにけりとぞ

第二條 太宰府の阿曾丸勅をうけて弓削道鏡を召し參る
井高野天皇道鏡を愛初たもふ

飛鳥清見原天皇。御位を廣野姫天皇 持統に譲りたまふにより。則藤原の宮に天下をしらしめし。又御位を豐祖父天皇文武にゆづりたまひ。つぎに豐國成姫天皇は元明皇都を奈良にうつし給ひて。御位を清足姫天皇元止ぞうけつがせ給ふ。次に豐櫻彦天皇は聖武御位を阿倍内親王にゆづり給ふ。則是高野天皇 孝謙にていまそかりける。天皇例ならず御職おはしますにより。百官思ひわびて侍りけるに。太宰府の阿曾丸事ありて都にのぼりてはべりけるが。奏して申さく。伊與の國弓削の濱に。弓削道鏡と申す修行者のはべるは。役の小角が行ひをつたへてさむらふものなり。祈るに其驗なきことあらず。是を召して御祈禱仕ふまつらせ給はんには。たちまち大御心清くしくなりおはさんと聞えあくるに。左大臣橋諸兄うけひかせ給ひ。其よしを奏し給へば。うべなはせ給ひて。則阿曾丸早船に乗りて伊豫に下り。その道鏡をめして參れとなん諸兄のたまひ下し給ふに。阿曾丸かしこまりを申して。從者はいとやつし。只御急の御使なる旨を畏て出ける。ときは天平勝寶元年二月十日。巳の時に奈良の都を出て。午の時に大坂戸を越。今之龍田未の降に浪國の浦に着く。里は八里を越ときは三時を過ぎりければ。阿曾丸心に悦び。浪國の浦より沖津鳥嶋云船の。小

いと速く侍るに。搔子四人を立構取二人を立。従者は浪花にとどめ。只五人を側にさむらはせ、申のとき過るばかりに漕出したたり。風よく追ひしうへに。搔子ども爰をきはみと。力をくはへて漕撓しかば。八十里ばかりの海道を。其夜の間に追ひたらはして。十一日の曉弓削の濱につきぬ。阿曾丸船を出て。蓬庫の塵の首に落たるを搔拂はせ。冠を着官服を着袴を着。笏を捧げ。太刀を掛はき。香を鳴らして道鏡が室に到る。もとより従者をつかはして。さきにしるべしおきたれば。道鏡道に立迎ひて禮をなす。阿曾丸中の重の上座に。彌重疊をしかまへたる上にのぼりて。勅を告聞ゆるに。道鏡かしこまりきこえ奉り終れば。阿曾丸従者を遠く退かせ。此室に侍る童どもをも立のかせ。道鏡と額を合せ耳を取交して。互にひそめきいふ事あり。いかなる事にか侍りけん。さてしばしもたゆたふべき御使にあらすとして。急かしつるにより。只行ひ仕ふまつるべき具ども、僅に略して。皆珠の箱に入れて。錦の袋に納め。その表を新薦に纏ぎ。船の中の上座に積せその身は圭冠を着。欄衣の椽に染たるを着。長き紐を結び垂れ。括緒の袴の白きを着こめ。腰には珠ごめの柄を葛巻にしたる太刀一振を帯。手に山多豆筭なり。をつき。脚には白檀の高履を踏鳴らして。阿曾丸にしるべさせて船に乗うつり。御祈の修行者にさむらへばといらへて。阿曾丸が左の上座にをれり。その日も辰の時ばかりなり。さて其船をおひかへらんとするに。風は東より吹下りて。船の上るべき汐合にあらず。搔子も楫取も。是をなげき。いかにつかふまつるとも此風この汐にさからひては。御船速く参るまじきと申せば。阿曾丸眉根をかきて是はいかにせん。ちから及ばずとわぶれば。道鏡ほ、笑つゝかゝる筋はいと安き事なり。御こゝろ安かるべし。只今海龍神に申つけて。此波風を東さまにむかはせはべらむとて。手に持たる珠數をすり鳴らし。三度ばかり唱言しけるに。波風忽打かへして。西南の方より吹のぼりけるに。船は只翅の如くその日の申の時計に。和泉の國なる高師の濱に着く。阿曾丸此しるしを見て大に驚き。かゝる行ひにおはすれば。上の御櫓は立どころに怠りおはさむ。さて御車など申渡にあらねばとて。所の刀禰どもにいひて。脚利く走べき馬三つをおさせ。先

靴の具を前なる馬に負はせ。申なる馬に道鏡をうち乗せ。その次なるには。自身はひ乗りて。従者どもは。只あゆむにまかせて参りつけといひて。鞭をうち立て足掻をはやめしほどに。此度は平坂なる。當麻道をうち越て。九里餘の道を。一時に追ひ通り。酉の時を申ころほひ。西の大御門の前につきぬ。さて馬より下りて中門の御前に道鏡をすへおき。神具をも荷ひ入らせ。しばし立待せたまへといらへて。おのれは大宮にのぼりて。左大臣殿へしかゝと申上ぐれば。諸兄大に其速なりしを奇み。浪風を祈りかへしたりしを貴みおぼして。其隨意奏したまへば。上限りなく愛たくおほし。阿曾麻呂よく御使仕りたりとて。録多。賜追て勳功の御恩賞はおはしまさむと仰下さる。さて道鏡には一時もはやく。御祈仕り始めよとなん。又御祈につきては。陰陽寮より。よろず承り仕れと勅あるに。それれく申觸れて。畏み仕ふまつりける。道鏡奏して申さく。上には行ひの聲を。まぢかく聞しめさるゝなんよろしきと。聞えあげたれば。御祈所は寢殿の御わたりちかき。對屋の中につかふまつれとあるに。道鏡石占を考て。さる事にはべらは西の對ぞ占のおもてに叶ひてさむらふ。若事あらば。東の對に祭り代ふべしと聞えあぐるに。事なしとて木工寮よりそれつかふまつるべきが参りて。西の對をかきはらひ。祭殿だつかまへす。道鏡参りて。中の柱に眞枕をうちて鏡を懸。左右には竹珠を間なく貫垂れ。めぐりの壁には。葉薦を垂れて防壁とし。御前には酒瓶すままつり。千座の置坐を置なみたるには。天津かな木を本うちたち末うち断て置足はし。又あまつ菅蓆を本刺たち末刺たちて置たらはし。小治田に生ふる物は。和稻荒稻大野原に生ふる物は。甘菜辛菜荒山中に住むものは。毛の和物毛の荒物。青海原に住む物は。鱈の廣物鱈の狭物にいたるまで。横山のごとくうち積置。さて手携たる山多豆は。右のかたへにさし置。佩せる太刀はぬき出して。前なる高机にそなへて。行ひつかふまつり始んとする時。春の事なれば。上の愛給ふ猫の妻とひすとて。唐猫のいと小さくをかしげなるを。すこし大きな猫の追ひつきて。俄に珠籠の小簀のつまより走り出しが。千坐の机を踏わたりて。彼そなへおける太刀のしぎ刃に。先なる唐猫の胸をつき破りてげ

り。猫は聲立て鳴くに。血はいたく流れ出たり。御祈につかふまつりける官人は是はと打驚きけるに。道鏡すこもし騒がず。暫く眼をふさぎ。口に唱へをはりて。侍ふ人をまねきて申けるは。是は吉瑞なり。上の御祈はつかふまつるに及ばず。たちどころに怠り給ひなんと申もはてぬに。妻木の侍従勅をうけもち出て。橘諸兄を召て申さく。上の御惱只今怠り果たまふさまにて。俄に御匣殿を召さる。又内膳司にも御食の御間侍りと申さす。諸兄道鏡に向ひて。しかれば汝が申ごとし。此うへは御祈やすらふべしやとあれば。道鏡かしこまりて。猶此うへの御祈を。しばしがほどつかふまつらん。しかれども猫の血いたくこぼれ落て。御具をけがしたるをいかにせん。御祈所は東の對に祭りかへてはべれば。俄にそれへうつし給ひて。御飾ども具どもを作りかへ給へ。おのれも身潔つかふまつり改めむと申す。さはとて御祈所を改めかふる間に采女のともがら承りて。身潔所をかまへ。主水司承りて。清き御井より水を汲運びて。盥にたへさす。さて身潔所には。采女ども道鏡がしるべしたり。道鏡いきてみれば。葉蘆をしきなみたるうへに。素布を敷渡し。黒木もて造れる衣桁のうへには。白き浴衣手拭さまの物を懸。盥には柄杓を添て。清き水を漉はしめたり。洗頭槽洗足槽爪磨などすゑて。めぐりには蒲の防壁をかけ。高床には火取を置て。伽羅の木よく薫るを打きりて。焼おけり。その前には短床をすゑて。いづれも塵よく掻はらひて。采女が輩は。襷をかけ裳を巻あげて歩板如ものうへに。つかふまつりをりける。道鏡采女のさむらふを呼ておのれが衣残りなく穢にふれたり。只今身潔つかふまつる間に。上よりはじめて下なる衣までもあらためかへてたまはれと申給へといひつゝ。上なるも袴の下なる衣も鬢鼻禪にいたるまで。引脱きひとつに押纏めて。土間の上に投出したり。さて盥の前にかいつぐばいで。口にはものを唱へながら。柄杓をとりて頭よりうちかづく。采女かくと承りて。侍従に申せば。縫殿にまゐりて只今の間にかゝる衣どもは調ひはつべしやと聞ゆるに。いかなる御威光にさむらふとも。いできなんととは覺さむらはずと申。此うへはとて左大臣殿に申せば。上の御祈と侍るに。何にかをこたりはべらむ。さらば奏して太上天皇の

御衣のさる濡きかたにはべらむを。申給りてとり興へ給へ。道鏡は行ひに馴てはさむらふべきが。この夜のいと驚く侍るをばいかにせむ。そはそもあれ御祈時移りなんと申に。侍従かくと奏しければ。上聞召て御父天皇の御祈にもさるべき事なりと宣はせ。則法の御衣をも添て玉の箱にうち重ねて賜りける。さて道鏡は心をひとつにし。身潔仕りてはべりけるに。上老髪刀自をめして宣はく。道鏡早も行ひは。仕りそめきや。老髪かしこみ承りて。只今身潔つかふまつりて侍るなりと奏す。上聞召て。道鏡はこれ生神なり。さる身潔して侍らんさまも。人の身には類べからず。朕物の透間に拜まむとのたまふ。老髪かしこみ承りて。いかにあらはにてや觀瞻あらんとて。かの身潔のよくみえ通るべき。渡殿のこなたのおよしをかきはらひ。珠簾の小簀の編間をすこし括りわきて立よらせ給ふ。御前には刀自二人右左に立て。唐めく團扇の中のほどを穴にしたるをさしかさねて。持たるを彼括りわきたる簾の編間にさしあて。大御頭の透影にや見ゆらんとて。刀自又大御後に立て。蓋をさしかけたり。道鏡かくとも知らであるに。もとより其性いと端正先面よりはじめて。手脚にいたるまで。その色雪のごとく。肩はいと黒くて畫のごとく。眼は磨出せるごとく。齒は白梅の含るごとく。髪はいと房やかなるを渦のごとく巻あげて。銀の挿頭をさし。丈は五尺をば遙に越て。身は肥脂づきて。骨をかくし。膊などはいとふくらかなり。さるは氣添は衣の色香を借らてこそと見えたれ。天皇太の大御手をのべてうちかさねたる團扇をかいのけさせ給ひ。小簀の編間を今少し括りあげよと勅ありて。大御眼をとめてみそなはしける時。道鏡もたる柄杓をさしおきて立ば。天皇大御袖を大御面にお負はせ給ひ。大御眸をさしめぐらし。かへり見しつゝ入らせ給ひぬ。道鏡は身潔終りて高床を見れば。珠の箱にうちかさねたる御衣あり。是をとりて香をうつし。下より上に着重ねたるに。綾の衣のこまやかなる。上の衣のなやかなる。これ直人の衣にあらず。太上天皇の御法衣を申給はりて。すべらせたるなるべし。我はからずも。此御衣を着なん。ほい爰に足し満りと。心中には思ひ喜びける。さて御祈所にのぼり。行ひ始んとしける時。諸兄勅をもちて。道鏡に告て曰く。修

行一度仕りたらば。天皇御目のあたり召されて。竊に御占あるべき旨あり。然心得べしと聞え給ふに道鏡かしこまりを申。既にその御行ひはつるにいたりて。老髪刀自道鏡を率て大敵ふかくまうのぼりける。

本朝水滸傳卷之一終

本朝水滸傳卷之二

第三條

藤原倉麻呂石村村主奏するによりて藤原惠美押勝を討しむべき勅あり

太上天皇崩御よりて朝政暫く絶て。天下いと嚴密なりき。さる間には物語なども多かるべし。御忌どもはてて。今ははゞかり覺す方もなければ。道鏡に法皇の位を許し給ひ。太宰府の阿曾磨をば。道鏡奏するによりて。太宰府の定に三島を加へて賜り。さて道鏡には御側さらず政務をも問はしめ給ふに。世の中騒出べき筋もおほからん。とき藤原倉丸石村村主等身には胃を着。手には手纏を巻。脚には鐵の脚帶をゆひ。馬をば西の大御門の前に乗捨。大庭の廣前にかしこまりて。頓に奏すべき事ありと申。天皇その有様を問はしめ給ひ。御まのあたり開召すべきよしにて。大極殿の高坐にのぼりまし。道鏡を御左にすゑさせ。珠垂の小簾をなかば卷せ。大御前にその二人を召させて。奏す事を聞しめす。倉丸村主ともに奏して曰く。左大臣橋諸兄その子奈良麻呂。ともに冠を脱。裝束を脱。太刀を捨笏をすて。家を捨財寶を捨。いづこともなく立さりさむらふ。判官等まあり正して候に。申残せる事も侍らず。只出居の壁に。一首の歌を残しおきて候のみなり。其歌にいはいはく

橘をこじて植なばことさへぐ枳殼の實となり出んかも

と諸兄が手をもて書付てさむらふ。いと恐れれど。此歌の心をもて考仕るに。北國に知邊ありて身を退て侍ならんと申。又藤原惠美押勝は。竊に太政官の印を盗み。東の兵を集め。近江國高島郡。三尾崎の大城にこもりて候。又春日野の烽火の野守が此あかつき訟申さく。唐國の天皇色欲にめて給ふ怠りによりて。臣安録山兵を集めて。御

代を奪はんとす。録山もし本意遂ずは。船を東に枉て。此御國をや窺ひ候はんと申。されど是は遠境の事にて候。たとへ近きにもあれ。小繩なす異人等。なでう事をかせむ。只捨置がたきは。近江の國の騒にて候と奏すところへ。刀自が輩大御前にはい出て奏しけるは。太子道祖王春宮におはしませず。御侍宿につかふまつりさむらひし内舍人。一人は明石豊丸。ひとりはお田角丸是れも二人ながら侍らずと奏す。又鹽燒王は不破内親王を。かねて御氣色はべりしが。是はさる御罪のよしを書殘し給ひて。ともに率ておはしてさむらふと奏す。天皇聞召をはりて。大御心を惱まし給ふに。道鏡かしこまり奏して申さく。臣おもひ得てさむらふは。道祖王は太上天皇の勅によりて。太子に立給ひけれども。我君深く愛おぼさず。大炊王を太子とし給ふべき。御さざしの侍るをしろしめして。宇治の稚郎子の御心をつがせ給ふならむ。又鹽燒王は。不破内親王の迷ひにかこち。是は押勝を頼みおぼして。近江にくだり給ふならんと奏するに。天皇諾なはせて。祖王の御行方は。俄にも求むべからず。只鹽燒王ならびに不破内親王を。急ぎて追ひとめよ。さて倉丸村主には。千萬の軍兵を賜はりて。直に近江の國へさしむけたまはんとなりける。

第四條 道祖王 釣船にめされて遁れ給ふ惠美押勝戦ひ負る

道祖王は。明石豊丸小田角丸の二人を將て出給ひ。惠美押勝を頼みおぼして近江の國をさして下りたまふに。大津の邊にいたりませば。船どもの侍るを。豊丸とりはからひて。君今よき御船に召されて侍らば。追ひ奉らむ人來りもとむるとき。必ず君顯はし奉らん。又蓬うちかけて候舟にめさば。さる人又疑ひはべらむ。只彼方に繋げる釣船を乞て。釣人と共に篋笠をめされ。我々も網子にやつしてはべらむには。人かならず怪しむまじきに。遠かるまじき海の邊に御船を漂はし。夜に入らば帆を捲て三尾が崎にうつし奉らむと申に。角麻呂ともにしからんと申て。潜に撈よせたりし釣船にめさせ。衣袴どもは脱ぎて。太刀などもともに船底にかくし。さるべき篋笠にかいまぎ

れたまふて。船を十丁ばかり撈出して。彼に漂はしおはしませず。矢田部老軍兵を將て。鹽燒王不破内親王の御跡を覓て。大津の邊に來たりけるが。浦人を呼てかゝる様の貴人ぞ。爰より船にめされて。高島のあたりをさして漕いで給はずやと問ふに。浦人ども答へていふ。さるさまの女を將て。此處より船にめされたるは覺えず。さきつとき都方より。貴人の三人まで。おはして。釣船にめされて網などうたせ。釣などさしおろして遊び給ふは見き。彼見給へ十丁ばかりかなたの海の上に。いとちいさき船の見えて。波の上に漂ひたるが夫なりと云ふを矢田部きゝ得て。三人とあれば祖王にやおはさん。また浦人どもが謀りてや申ならんと思ひ疑ひ。なにもあれいきて見ん。早船漕出せと告立て。よき兵十人ばかりをさし添はせ。搦手八人に漕渡らせたれば。一箇の息の間に。船はたゞ間近くなりぬ。祖王はよくいひ合はせて置給ふに。追ひてまゐりたるを恐み給はず。船のへにさしうつむきて釣針おろし。船は只漂はせておはしませしけるに。矢田部老近く參出。是はいかなる御有様にかと啓せば。祖王聞して。少し打笑せたまひ。世の申いと騒かし。かく鮮魚とりて侍る事は。事代主の御まねびをつかふまつるなり。鹽燒王大炊王もおはしませば。太子なきにしもあらず。汝歸りなば。我はその船を踏傾け。天の逆手をうち鳴らし。青柴垣に隠れたりと申せと宣ひをはり。御船靜に撈せたまふに。矢田部老。つらく御形狀を窺ひ見て。誠に押勝には御心なかりしと思ひしかば。御返事奏し奉らんと申て。又大津の方をさして漕ぎ戻りぬ。祖王二人に向ひて。よくもかく計らひつる。最危かりしとのたまふに。日の暮んずまではとて。ある島影に御船を奇せて。御食など奉りける。さて夜にもなれば。帆を巻いて只一時に三尾が崎に追ひつきぬるに。押勝が籠居たる大城を見れば。月の光にはさやかにあらねど。湖をめぐらし入て。大城を帶せる沼とし。高塀には透間をつけて。征矢負たる兵をすへ。隅の層樓舎も透間をつけて。多くの射部をのぼせ門をしめ。杭を打ち石を轉ばし出し。眞木をつまてを切出し。兵容易く奇來まじくしたり。又打俯仰ぎて見れば。長き旗短き旗は空に靡き。雲に亂れて。高く濱風に吹なされたり。二人の内舎

人祖王に啓して申さく。かく鎖てさむらふに。参り寄らん道もはべらず。夜もいたく更けてさむらへば。程なく
 曉にやなり侍らん。日のさし昇りてさむらはんとき。隅の層樓より見通すべき所に。君をば据へ奉り下官等は冠
 を正しくし。衣を搔繕ひて。恭しく仕りをらば。大城の軍兵必ず見咎めてはべらむに。其儘押勝に申て候はゞ。押勝
 又樓に登りて窺ひ奉るべし。さてこそ君をば見出奉るならめと申に。承引せ給ひて。松の大木の打垂たるもとに立
 寄らせたまふに。御庭もなければ。清げに花咲たる草などを刈布て据え奉り。早明なんずと思ふに。夏の夜なれ
 ば短くて明けぬ。さて其木のもとを立出させ給ふに。層樓より差覗く人ありと見えて。暫しありて南の大門を開き。
 倭文鞍置る馬に紅の飾して前にひかせ。軍兵等百人ばかり走参りて啓して曰。押勝層樓より御容体を見留てさむら
 ふに。かくさすらはせ給ふは故こそ侍らむ。先速に迎へ奉れと申すによりて参りぬ。御車と申べきを。かくみだ
 れにさむらふときなれば。脚利からねと穩しき御馬奉らせたりと聞えあぐるに。王聞召し。誠に舍人等が申に違は
 ざりつるとて。御馬に召せば。内舍人等左右に添ひ奉り。兵等御前を追ひ。御跡方を守り奉りて。大城の内に
 入れ奉るに。押勝迎へ奉りて。高床の上に据へ奉り。思ひがけずと啓し奉れば。王は只何事も宣はず。内裏
 は道鏡が亂にとのたまひ終りて。御泪の溢るるに。押勝畏まり聞えて。下官天皇の御寵愛を失ひ奉りしを怨み奉
 りて。かく守りたるにあらず。只道鏡が天が下の民を苦めむ事を思ひはかりてさむらふのみなり。既に太政官の印を
 もて。東の軍兵をさしまねき候に。かれ走集らんずる間はかく籠りてはべらむ。さて参り集りて候はゞ。天皇は御過
 あらしめざるさまに計ひ。只道鏡が首をとりて。京の巷にかけんず。また君は太上天皇の勅によりて。寶祚しろし
 めすべき君なれば。天皇いかばかりに勅ありとも。おして御位にとおもひつきてはべるのみなりと啓す間に。大城の
 門守騒ぎ立て。官軍千萬の勢をもて。大將には藤原倉丸。石村村主差向ひたり。東の軍兵未だ走集らず。大城のうち
 は僅に千に充ざる兵なれば。その勢の競ひ難きを思ふ者も多くはべると申す。押勝聞得て固より思ひ巡らす所な

りといひて。王に啓して曰。君とも此處に籠りおはしませば。必ず下官と御心を合せられて。御位を望ませ給ふな
 りと世に申さん。さるときは天皇の御怒募りて。下官此戦に打負けたらんときは。御命にも及び給はんと思ひ奉る
 がいと苦しき。官軍只城の前に集るのみにて。いまだ城の後を遮らず。只今の間に軍兵を添て。何處へもいませ
 ん。かく申すも早や事の急迫になんと申す。さてある間に門守の軍兵等走参りて申すは。此城内に鹽燒王なん。押勝
 を頼みてまゐり給ひつらん。おのれ王を捕らへて天皇の御褒美を被り奉らんと申し騒ぎて侍ると申すに。王聞召し
 て。鹽燒王はみづからが兄の皇子にておはすが。何とてさは申すなり。是も道鏡が騒ぎを覺して。内裏を出給ふなる
 べし。よしさらば御ありかをも探り覓給ふならんに。みづから鹽燒王なりと名告て。軍兵の目前にて自刃にふして
 死なん。さありて後。我面をかへ兄皇子の御首なりとて欺かば。長く兄皇子は隠れおせ給はん。押勝しか議れとのた
 まふ間に。層樓に火つきて大門も焼のぼり。官軍は亂入りて。押勝が軍兵は多く討れにければ。押勝冑を着甲を着手
 纏も巻あへず。四尺ばかりの太刀を抜きて。中門を少し開かせて。おのれ一人躍出で。左右に伐斵け堅横に難立たれ
 ば。見るが中に千首を伐落す。官軍押勝が武威に怖て表をさして引退くを。押勝更にも追及す靜に中門をさして内に
 入り。二人の内舍人を差招くにいづこにも居らず。いかにしつらむと見れば。明石豐丸は。祖王の御装束を給は
 りて御冠をも着。又小田角丸は同じめしがへにもたせ給ひし御装束御冠を着て。さて押勝に向ひ。大臣は是より
 我君の御供まうして何處へも御ありかを定め給はれ。我々二人は思ふ旨ありて只今軍に向ひ。御兄弟の御心を安し
 奉るなりといひ終りて。中門をあらゝかに引明け。我は太子道祖王なり。我は兄にて鹽燒王なり。天皇を恨み奉
 るにあらず。道鏡が横さまなるを憎みて。押勝を頼みおもひて此處に來れり。さるも押勝心を遂げず既に官軍をひき
 うけ奉れば。正に是朝敵なり。我々かくてあれば押勝が黨なるを恐み。只今兄弟双にかゝりて死ぬべし。首を取
 歸り道鏡に與へ。天皇にもかくみおきたる旨を奏せよと告終りたまひ。互に劍を抜合せて。先面を突傷り。さて互に

胸さかを刺連ぬきたまふに。倉丸村主進に見て。御命を損ふべからずといひつゝ。翹來るあひだに。痛く突交したまふによりて死入給へり。御首をたまはるべきにもあらねば。御骸は其儘にて御棺さまのとりまかなひて。馬に負上せ軍兵どもつかふまつれり。さて炎は大城の外重をめくり。すでに中門にも火つきたるに。押勝が軍兵いたく討たれ。或は火にやけうせなどして。今は残るべき人もあらず。倉丸村主進に進て中門を破りて入るに。押勝はいづこにも居らず。後なる門はとて見れば。少しも開きたるさまなきに。いづこに立ち置れん限もあらず。又めぐりの沼なると深く見ゆるに。打越てゆかん所もあらず。さらば押勝は空從超りにけんとして。只惘て立る間に。火は中の重外の重に燃え渡りければ。官軍も大城の前に走せ出。倉丸村主もさふらひえねば。是も外の方に立出てるに。火は風のまにまに燃とほりて。隅の層樓も残りなく崩落。高塀などもなくなりたるに。さばかりの圍は見るがうちに。只春の燒野なす亡びにけり。さて見れども押勝もあらず。押勝が家に名高き軍兵十名ばかりは。その行方もなくなりければ倉丸村主は爲方もなくて。二人の宮の御骸を守り奉り。空しく京へ歸らんとしける。

本朝水滸傳卷之二終

本朝水滸傳卷之三

第五條 豊丸角丸が骸を焼く并佐保の大道に首を梟る

倉丸村主の二人は。豊丸角丸に欺れて。その死骸をいよ二王の御骸なりとおもひ。棺さまの箱に納め奉り。此ま都に守り歸し奉らんと思ひ居しに。又思ひめぐらして相議て曰。我々勅を蒙りしは。只押勝を討べきのみなり。二人の王を殺し奉れと侍る旨にはあらず。是は不意かく大殯の時にもあらず。横さまに双に伏て雲がくれましぬるを。御顔いたく疵つきて侍るに。此儘に守かへし奉らば我々いたく責奉りしと。かへりて御怒を蒙り奉らば。その御ことわりをいかにせん。又戦には勝て多くの軍兵は討とり。大城は焼はらひてさむらへども。押勝が首は得ざりしと申さば。甲斐なき爲行とやおぼしなさん。さはいかにせんか。らはとやせんずると。心得深き軍師を集めて。種々いひあはせてはべりける中に。物部勝成といふもの思ひめぐらして曰。下官思ふに道祖王鹽焼王は惠美押勝をたのみおぼし。ともにこの大城にこもりませしともしらず。城は堅く守りてはべるに。官軍爲方なく。時しも濱風のはげしかりしに乘て。只周圍の圍を燒拂はんと計り。大門高垣に火つけてさむらひしに。思ふに違はず軍兵走出候に。心やりなる戦仕りて。多くの軍兵も討取りぬ。さても山風の吹替りていと荒く侍りしまゝに。中門にも火つきて候に。寄人も責入難く。籠りたるも出難くや侍りけん。戦しばし引しろひてはべりけるとき。中門の櫓に冠裝束したる貴人の二人までいておはし。いと高く御聲をあげて告てのたまはく。我は是太子道祖王なり。我はこれ兄にて鹽焼王なり。押勝をたのみおもひて此城に籠りてはべるが。天の時いたらず地るとき又いたらず。只今國津御神に御暇を乞ひ奉りて。黄泉の王に仕へまつるなりと告りをはらせたまひ。側に御はしましける官女とお

ぼしきを捕へまし。是は不破内親王なり。是まで將て奉りしかど。心遂げず侍るに。只今伴ひ奉るなりと宣ひ。太刀を抜きて刺殺したまひ。さて御兄弟の王は。互に御胸をか刺してかくれ給ふ。さるさまを見奉り居しかど。いたく炎に遮られてはべるに。參りのぼらん道もはべらず。火少し焼通りてはべるまゝに。軍兵に申付て槽こぶ槽に水を湛はし。只往通るべきばかりの道をひらけとて。手にそゞぎかけて侍るまゝに。辛苦して中の重に入りて。さりととも御骸を残し奉らむと思ふはしに。惠美押勝も樓にのぼり。炎にまされて死けると見えたり。さても水をそゞぎ柱を打かへし壁を破り棟瓦をうがちて。二王の御骸。ならびに押勝か骸を炎の中より引出してははれど。いたく焼たゞれて候。又内親王の御骸はやく火のうちに紛れたまふならむ。僅に御裳の焼残りて候のみなりとて。いかなる衣の端をも焼焦して見せ奉らむ。又二王の御骸は今只今城の内に持行。いたく焼たゞらし奉らん。さていかなる人の骸にもあれ首をとりて焼焦し。これを押勝なりとて持歸らむに。誰かは正しはべらむ。又押勝が家人に名高き武士のさむらふを。十人あまりの首を伐て大方に焼たゞらしてもてかへり。大道に梟並はべらば。今度の大将は譽れ仕給ひけると人申さむに。上の御褒美厚くはべらん。我々も祿蒙り奉らん筋なりと。よく辨へて申けるに。倉丸村主これを聞き。よく思ひ巡らしたりと讚へ。いかさまにも押勝等逃出べき透間もあらぬに。定て炎のうちに紛れ失せけん。是欺くに似て。偽にあらざ。さらばしかせんとして。二王の御骸を箱より掻出して持て行。燃のこりてはべる柱どもを集めて。彼方此方焼爛らし。又こなたかたかさかして。首とふ首を拾ひ集め。すこしも押勝に似つきてはべらんをとて見るに。よく似たるぞ一つあるを。似ざる方ばかりを焼たゞらし。女の装束どもの端々残りはべるを。是もさるべき所をとりて。脚などの焼たゞれてあるを引出して。不破内親王に似つくべくし構へ。押勝が以下の首十五よきさまにつくり立て。ひとつく名を記して札を立。軍兵の行列を正し。旗を立鋒を立。戦に勝る佳儀を述べ。酒をもり歌を誦ひ。鼓を打鳴らして行列を整へ。瀬田をわたり石山を越え。宇治を過挑川を渡り。奈良山を越て

京に入りぬ。左右の兵衛督立向ひて。事どもを正し。戦のありさま始終委細に奏しければ。天皇大御心落居給ひ。よくことあげせずとりては歸へりし。二王の御骸。ならびに不破内親王の御骸は御位の例をすこし略て。御葬り仕れ。又押勝をはじめ以下の首は。佐保の大道に梟て。札を立て事をわきまへしらせよとのたまはず。又倉丸村主軍師物部等は。御前に召されて御恩賞を蒙り。軍兵どもは例にまかせて祿厚くたまはり。世の中いと静穩になりける。

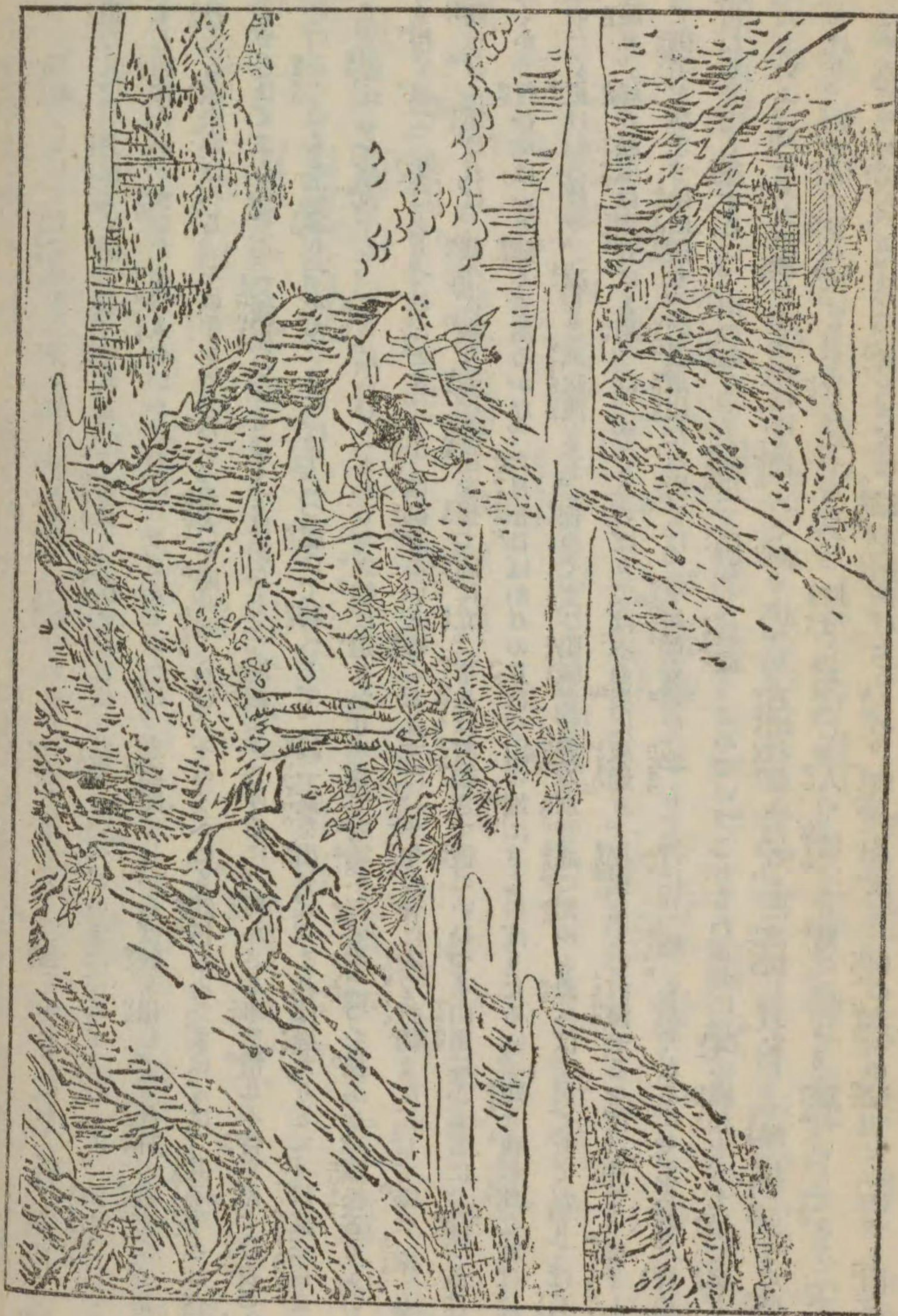
第六條 惠美押勝道祖王を將奉りて伊吹山に隠る白猪老翁祖

王をあづかり奉る

官軍いたく責て。中の重の忌門に火つきて侍る時。おのれが家人のうちに。年比思ひ頼める武士。十人ばかり侍りけるを招きて申けるは。軍いと迫れり。此押勝ばかりならば。官軍千萬の勢ありとも。たやすく伐斃て追散しはべらんが。祖王かくたのみきこえまして不意おはしませり。又豊丸角麻呂ともに明心をもて御命を惜み奉り。おのれに御身の上を頼みおきて死ねり。今は王を將奉り。此圍を逃れ時を待居て心を遂ぐべし。汝達我に伴ひ給へとて。王を負奉り。さてかゝる時のために。用意したる浮橋を出して。いとやすく後なる沼を打越にけり。さて道をば山陰の八十隅にさして行く。かゝる術は寄人の兵に知らざりしかば。後より追ひ來る人もあらず。王行馴み給ひしほどに。軍兵等かはるゝ負奉りて。その日の夕つがた伊吹山の麓に到る。人皆疲れたれば物食んとて。怪しき家に入りて。米を買ひ鹽を買ひて。先粥を煎て食るに。酒やあると問へば。怪しき老女が濁酒こそはべれといふ。酒肴はといへば何もあらず。此處は山の獵夫のみ住あたりにて。大野の原は侍れども。辛菜一房つくり植べしともせず。此老女が犂の候が。これも彼獵夫にて候。晝は林に交りて鳥を捕り。夜は山に入て獸を射とり候。又此山の上に久しくおはします。山の獵夫の王のおはすが。數多の獵夫を召抱へ。大なる城を構へ。富榮えておはします。山深き所なれ

ば。國の守もしろしめさず。貢などもせず。又何の役もはべらず。いと豊けき王なり。御名は白猪と申なり。此老女が犂も即ち此家人にて候故に。をりくは召されて王の御用は承るなり。此夜もし御もとに参りけるにや。又山の獵に出てや侍る。又老婆が娘の侍るは。王の姫の此頃煩ひ玉ふに。御伽に召されて候へば。今夜此老婆一人ありて何の御饗應も候はず。いかにせんと申間に。軒近き山道を下り来る人ありて。鼯鼠は梢もとむと足曳の山の獵夫にあひにけるかも。と云ふ歌を誦ひ。弭いと短かき弓に獵箭握りそへて。袴の衣に袴の脚帶し。枯れたる草の葉を頭巾にして。家の戸をば脚もて押開き。濁たる聲して老婆子待給ひつらん。今夜は山風さわくに。鹿も猪も免らも。驚き走りて。二三度射違へて侍るに。惜しき征箭を失ひつる。此鼯鼠が捕られたるに。まづ山の神を祝ひて歸りぬといひつゝ。武士の多くいり居るを見かへし。又上座におはします君を。怪しげにうちまもりて。老婆子これは何方よりの賓客ぞや。是はさいつがた此山道を踏違へて來り給ふ人々なり。いと飢給ふとて。錢を出して米を買ひ。粥煮させてめすなり。酒は濁酒を賣りて候に。酒肴はと問ひ玉ふにつきて。老婆が問はずがたり聞え奉りて居れりといふ。犂聞て酒肴は此の鼯鼠に過たるはあらじ。いでまゐらせんとて。皮を逆剥にして。乾鳥の如くあぶり立て。土器に盛りて差出し。さて賓客達は軍兵達な。いたく血のつきたるもおはす。さは軍に打負けて。山に匿れんとてぞまぎれきたり給ふならん。今老婆が問はず語り聞えたりとあれば。定て委細聞給ふならん。我王は獵夫の王にてはおはすれど。かゝる人々をばほしがり給ふに。たとへうしろめたく逃來り給ふにもあれ。是ほどのうちには。すこしは武士の心得あらんもおはすべければ。それは王の御眼にためし給ひて。強き人をば武士にし。弱き人をば獵夫にして。分相應使ひ給はん。さいへばおのれは獵夫なれば弱きものなりと覺さんが。これ見給へ。此腕のふくらかなる。この脚の太きをなど言ひ誇りてやまず。老婆がいはいく。今犂が聞え奉るさまなり。もし山に匿れんとおぼさば。此犂に案内させて。王のもとにおはして。御身のうへを嘆き給へと云ふに。押勝思ひめぐらす旨あれば。よくこそ教えたまへる。

さらは御案内頼み参らせんといへば。犂聞て山は麓をめぐりて行く。道は平坂にはべれど。そこを過ては草木原いと深く。石群ごととして立重なり。谷を渡り岨を傳ひ。打橋をわたり石橋を踏みて。雲霧を千わきにわきて。辛苦して登る道なれば。月はよく照らして侍れど。木群茂く立榮えたれば。荒雄といへどいきなづみてさむらふ。武士達はいかにもし給はんが。女びたる貴人のいかにおはしますさんといへば。老婆聞てしからば錢を出して。此林の彼方に。よき牛持たる獵夫のはべる。その牛をやとひて。貴人を乗せ奉らむ。そのうへにも錢惜しみたまはずは。其子牛のはべるをもやとひてまゐらせん。又續松などもなくてはあらじと。慇懃にきこゆるに。何かさる事を借しみ侍らん。今夜の中にその王のもとに参りつかん。さらば牛二つ雇ひて給へとて。錢一貫を出せば。これは過たりとて。只錢三百をとりて。餘れるをば返すを。種々にいひことわりて老婆に遣りたり。さて老婆が行て牛二つを挽かせ。續松どもいとい多く持て來て。牛にとりつけなぞす。王は御身のいと軽くおはすに。子牛の脊に衣を打鋪きなぞして乗せ奉り。押勝は身の重ければ。親牛に乗り犂は續松を提て前に立。軍兵は打續きて彼のいひつる山道にかゝるに。聞つるは最易くかく行むにはいと難くもあるかな。六月廿日ばかりの月は。山の端にさしのぼりたるに。短き夜の比なれば。いといたく更けぬるにや。涼しき風吹渡りて。笹のくまび鳴騒ぎ。谷の水音遙に聞ゆと思へば。めぐりくだりては石橋を渡り。峰の松風は雲井にと思へば。めぐりのぼりては木の根に取纏り。獨梁などの打渡せるをば。牛より極下し奉りて御手をひきて殆に渡り。岩根這出たる所をば。軍兵ども負ひ奉りて行に。曉ちかくなるにやあらむ。森の鳥飛わたりて鳴く聲するに。山の嶺なども起出て鳴なり。霧深くこめていづこともわかぬに。犂が續松をうち消て参りつきぬといふ。さて見れば雲のすきかげに。樓めく家もはへり。石垣打疊みたる上に高垣しわたし。弩杭さまの備もしおけり。かく人の登り來けるを告るにやあらむ。時守とおぼしき人の樓より見おろして。鼓のいと大きなをいとはやめてうち鳴らしたれば。鈴をさゞげ鐘を握あげたる人の。幾人も出來て。何の人々の登りたるにやと問ふ。



犖答へて是はおのれが役なり。よき人等を案内して参れり。王にとく申たまへといへば。朝霧のまがひに汝をば見
 出ざりし。犖の故か〜といひて。其儘門を開きて賓客達まつこなたへといふ。押勝まづ牛よりおり。王を懐きお
 ろし奉り。緻びたる御衣かい繕ろい。御冠をめさせ。禮正しくしてつかふまつりをるに。鹿の皮を袴にしたる男の
 禮正しくして。一人二人出迎ひつゝ此方へと申す。押勝王に伴ひ奉り。軍兵とも後につきてまゐるに。獵夫の王に
 やあらん。黒き木の皮もて作れる冠を着。麻もて織たる袍のいと黒染たるを着。袴は狭青なる麻にて手には扇を
 もて板敷の下に這出たるを。押勝早く見れば稚くて別れつる兄の豊成に違はず。こはいかと思へど。豊成は三十年
 以前に。難波の海に落て死ける物と思ひつゝ。うちまもるにすこしもたかはざれば。かくさむらふは惠美の押勝なり。
 上坐におはしますが太子道祖王にておはします。そこは我兄の豊成にてやおはすといへば。あるじは禮儀も打忘れ起
 あがり。押勝が面をみて。君はいまだ生れまさざりしかば。面知り奉らず。汝いまだ總角にてはべるときなれど。
 冠しつる面さしもかはらず。是はいかなる事ぞ。都の人の傳とてはなけれど。仄に言渡るを聞つる。藤原仲麻呂こ
 そ。天皇の御寵愛厚く。位は大保なり。右大臣に任られ。又家は大職冠より以來。國を輔佐てあしき人をば捕押へ。軍に
 は打勝の功ありとて。藤原惠美押勝とたまひ。そのうへ御寵愛のあまり。一位を授け大師に任じ給ふ。臣なりとなん。
 さる事の後には聞きしに。いかにしてかく太子の御供つかふまつりて。山のかくれには迷ひ來つる。思掛ずとて打驚
 くに。押勝如此しかのよしを語り終り。さて我兄の翁は難波の海に溺れ失せ給ひぬとけ給はりしに。いかにしてか
 かる御有様には候なりといへば。老翁涙を押しへて。汝はかく寔たれども功勳あり。我は功もなく給仕もなく。か
 く山籠りの老翁となり降りたるに。弟の汝にも面伏なる。さても往事を語るべし。御前をば畏み奉れども。始より
 とりて終まで聞え奉らん。既に三十年ばかりの昔なり。おのれいと若くて侍けるとき。公のことにつきて難波に
 参りてさむらひけるに。公のことはてず。春秋を滞りはべりし間。住吉の少婦といふ遊女に馴て侍りしに。多くの

財寶を失ひ。人を欺き世の掟を背きてさむらひけるにより。ある夜竊に其少婦と心を合せ盗み出たるに。この事世に漏れ聞えん事を恐れ。浦人をかたらひ下部をかたらひ。豊成難波の海に舟を浮て。酒たうべて侍りけるが。誤まちて海にいりぬと申ながし。さて其少婦を將て。暫しのうちは滋賀の里の領所に匿れ。其後爲方なくなり降たるによりて。此山の獵夫となりしが。何時となくかくなりあがりて候に。その少婦も不相離。今は一人の娘をさへ設けて候につきては。天下もし騒がしくならば。再び蘇生たるおもひにて。君をたすけ奉り。民を恵みつかふまつりて。伏せたる面を世にあげんずとおもひて。さる心得ある人と見れば。野伏山伏のものを召入て。應分召使ひて候に。今は我を王と稱してかしづき聞ゆる人千人にこえぬ。さてかく山守の老父にははべれど。兵器は尤も多く貯へ持り。又鷹栲にこそあれ。かく縫ひ仕立させて。昔の姿を粉し侍らず。さるをかく思ひかけず。太子のおはしましたる。ならびに汝が参りたるも。遠つ神祖の捨給はぬなりとて。天に仰ぎ地に伏して悦ぶ事更にやまず。娘は此ほど煩ひて候に。髪も束ねざれば恐れあり。妻の老女は御目賜はるべしとて是へと聞ゆるに。装束ども禮儀正しく揃給して出ぬ。王始終り聞召して。いと珍らかなり。我舍人豊丸角丸二人は。兄皇子鹽燒王ならびに我道祖の名を告て。骸を残して欺きしかば。我又暫し世を匿れすまはむ。今より豊成を頼みきこえむとのたまひければ。豊成畏まりを申。さて此老夫が豊成の名は深く匿して候に。是を知りたるは唯妻と娘のみなり。君にも又白猪老夫と呼びくだし給ふべし。さて御饗應仕らんにもかゝる山住なり。只獵夫どもが捕りもて來つる鳥獸のみなりとて。自から高架の上をしきをすえて王に奉る。さて押勝には足つきたる折敷をすへ次なるは皆低くして置並たり。御土器のうちには。山鳥山鳩雉子兎貉山羊やうの肉をもり。菜は百合筍葛薯などをもりたり。御酒は清酒と濁酒にて。酒肴は乾鳥澤蟹防風を虎杖の酢にひたしなどし。山桃毛桃覆盆子をも怪しき土器にもりて出せり。王をはじめ奉りて。押勝より軍兵等にいたるまで。飲終食おはりて日も高くさし登るに。昨夜は夜通にいねまさて。かゝる荒山をのぼりたまふにいと疲れ給はん。王をばしばし静まらさせ奉らん。押勝も軍兵等も先うちなびきたまへと。とりて其構をなんしける。

本朝水滸傳卷之四

第七條

豊成が娘狹霧姫を道祖王に奉る押勝印を授けて
七人の物部を國々に出し自東國に下る

最疲勞れ給ふによく睡りたまひて。夕暮がたに御目覺めたり。軍兵等もいたく疲れて暮るゝも知らず寐つ。押勝は暫し寐て只珍らしき心地するに又も寐難にしければ。起出て兄の翁が闇に入りて來し方の物語す。白猪翁問ひて曰。汝劫稚かりしとき。粟田朝臣眞人が娘を。家の妻に喚ぶべき契約しけるがいかにかにありける。押勝答へてさればなむ婚て候に。子まで生みてはべりしが。二年以前母も子もなく成たるに。その後妻をよばず。さるはこの度の軍にも心がかかりあらず。舅の家は我騒動によりていかにかはべりつらん。されど朝臣は亡せ給ひて家の子なかりしかば。他の子貰ひて家を譲りたるに。罪はすこし輕かるべし。その外は心がかかりなきさまに事を取り治めて後。三尾が崎には籠りて候と申に。老父はひとつ聞得て。そは能くしたまひつるかなとて安堵。押勝兄の老父に向ひて。我兄の老父に言のうはべなく問ひ奉りたき旨あり。老父のかく住せたまふ御有様は。邸を圍らし藏町を構へ。人多く集めおかせ牛多く飼はせ給ふ。眞に此山の王のみならず。大國を領する王なり。いかに獵夫を召抱へおき給ひて。鳥獸を市に賣らせ給ふとも。夫はいかばかりならん。何の御徳にか。かく富榮えましけると問ふに。老父微笑みて其不審よしあるかな。承る如く山の獵何計りの事ならむ。此伊吹山は黄金出る山にて。彼の陸奥山に黄金花咲くと詠める所には勝りたれど。昔より人知らずはべるに。此山に獵をして遠近さまよひありきしとき。不意其金の氣を知りて。一人二人の人の使ひて彼黄金を掘り出せしに。只泉の湧出る如く。かき拂ふ草の生ひ出る如く。取れども穿れども絶えざるによりて。先三年ばかりは黄金を取り貯へ。其無らせつる人をば。事よく云ひ聞せて。まちかき家人とし。其所の聲りつる所は他しるまじく跡を隠し。扱その威勢をもて多くの人を召抱へ。城もかく繞らして候。かゝる事を知りつるものは僅に十人餘りの人に過ず。その外は只獵の業をさせて。是を役に申附て候に。人皆我を獵の王と稱し候。此上に何計りの金も今にも掘得べき構へしおけり。元來かゝる山邊に住む山人なれば心いと直く侍るに。我かく冠裝束して侍るを見て。只何となく恐れて候ほどに。都あたりに出出てこれを訴へむとするものもなく。元來恩深く加へおきて候へば。かく王の忍まさんにも山の嵐の吹通う外は。何方に洩れ出ん恐も侍らずと語れば。押勝さるにてぞ訝しきは解ぬといふ。さて刀自も出て是彼の都邊の形狀を問ひ出て涙落しなどす。娘は。今朝より作色のけなども意たりつるに。湯など浴せ髪など梳かへし裝束いとよくして。刀自が押勝に引合せたるに見れば。年の程は二十なりと云ふには幼稚なびて。眉の様より始めて面もち云ん方なく調ひて。髪は長く引たるまでも。大宮の内にときめける。夫人妃など申にも。かゝる容貌はおはさずと覺ゆ。姫はかゝる山懐に生ひ立て。都の手振は見習ふ可くもあらねど。父母能く教へて生育ぬるに。萬事不束ならず何心なくてうちらふなども。かへりて馴たる方にはたち勝りて見ゆるに。押勝名は何とかのたまうといへば。妻の刀自うちえまひて。山の名を伊吹と申になぞらへて。えにしあらば都にもはひ出で。神寶うませよなど祝ひはべるにつけて。天津狹霧と呼て候といらへば。翁もにこやかにて。今朝なん假初に聞えし如く。事あらば都へもと思ひ立て候に。かゝる荒山中には誰を推し頼む人もはべらず。よし斯て老ひくだちね。事に附ては打まぎらして。都にも出し由緒ある方をも頼み奉らん。かゝる山住を苦しとなおぼしぞ。さる間は命の限り狭き袖にも。養育立んと此母にも申聞かせおきつ。扱不意王おはしまして。かくなから年月をおはすべきに。山川の神もよりにて仕へまつるときなり。此老父喜ひの餘り歌仕りたり。押勝啓し玉へとて硯取り出させてしるす。

先三年ばかりは黄金を取り貯へ。其無らせつる人をば。事よく云ひ聞せて。まちかき家人とし。其所の聲りつる所は他しるまじく跡を隠し。扱その威勢をもて多くの人を召抱へ。城もかく繞らして候。かゝる事を知りつるものは僅に十人餘りの人に過ず。その外は只獵の業をさせて。是を役に申附て候に。人皆我を獵の王と稱し候。此上に何計りの金も今にも掘得べき構へしおけり。元來かゝる山邊に住む山人なれば心いと直く侍るに。我かく冠裝束して侍るを見て。只何となく恐れて候ほどに。都あたりに出出てこれを訴へむとするものもなく。元來恩深く加へおきて候へば。かく王の忍まさんにも山の嵐の吹通う外は。何方に洩れ出ん恐も侍らずと語れば。押勝さるにてぞ訝しきは解ぬといふ。さて刀自も出て是彼の都邊の形狀を問ひ出て涙落しなどす。娘は。今朝より作色のけなども意たりつるに。湯など浴せ髪など梳かへし裝束いとよくして。刀自が押勝に引合せたるに見れば。年の程は二十なりと云ふには幼稚なびて。眉の様より始めて面もち云ん方なく調ひて。髪は長く引たるまでも。大宮の内にときめける。夫人妃など申にも。かゝる容貌はおはさずと覺ゆ。姫はかゝる山懐に生ひ立て。都の手振は見習ふ可くもあらねど。父母能く教へて生育ぬるに。萬事不束ならず何心なくてうちらふなども。かへりて馴たる方にはたち勝りて見ゆるに。押勝名は何とかのたまうといへば。妻の刀自うちえまひて。山の名を伊吹と申になぞらへて。えにしあらば都にもはひ出で。神寶うませよなど祝ひはべるにつけて。天津狹霧と呼て候といらへば。翁もにこやかにて。今朝なん假初に聞えし如く。事あらば都へもと思ひ立て候に。かゝる荒山中には誰を推し頼む人もはべらず。よし斯て老ひくだちね。事に附ては打まぎらして。都にも出し由緒ある方をも頼み奉らん。かゝる山住を苦しとなおぼしぞ。さる間は命の限り狭き袖にも。養育立んと此母にも申聞かせおきつ。扱不意王おはしまして。かくなから年月をおはすべきに。山川の神もよりにて仕へまつるときなり。此老父喜ひの餘り歌仕りたり。押勝啓し玉へとて硯取り出させてしるす。

岩根ふみ來し君なればつぬさはふ岩が根まくらゆるしてんやは
 といとめでたく書つたり。押勝うち喜びて君もかく頼み聞え給ふに。雲霧のよそにかいまぎるゝ御憑もおはさねば。これさへ神の引合せ玉ふならんと愛で。御目の覺めおはすにかいおこし奉り。御頭洗など奉り終りて。今こそは我姪にて候狭霧姫なるが。御側仕ふまつらせたく主人の老人共が打嘆きて侍るを。委細に承はりはて候に。兄の老父歌つかふまつりたり。御けしき侍る御答へを給はりて候はゞ。主人等も日比思ふことのかずく。通ひ侍らん心持すべく思ひ給へらるゝとて。即ち歌奉りければいと珍らかなりと宣ひて何事もえにしにこそ。頼に答えて主人の老人等を慰め侍らんとて。御視めされて。

岩が根をまくだにあるをぬばたまの黒髪しかば我うまいせん

といと貴くかいつけて給はるに。押勝二人の老人にいたゞかせければ。今は思ひあまれる事もはべらず。姫も歌は好みて折々いひ出ぬれど。聞く人とは己れ等只二人にて。花にも月にもいひかはして候なり。さる筋も物の御紛れにはなどいらへて。やがて姫に御土器取らせてつかふまつらせける。扱御夕食など奉り終り。兵どもたうべおはりければ。今朝より老父が觸れきこへて侍るにぞ。山をはひ登りて集り来る兵ども五百人許り。庭にも木間にもむれあける。押勝いとたのもしく思ひて王にもかくと申す。老父押勝相併びて左右に床几をさしならべたるに。老父床几を押勝に譲りて曰。汝は弟なれど既に位は一位をたまはり官は大納言に任せられたり。おのれは大納言にも進まであまさへ官位を奉り還したれば。兄と雖ども左に居らんや。今より汝をして大將とし我は副將軍たらんといひ。禮を厚くし我徒にもかく聞え並。扱入りて押勝と謀りて曰既に斯くの如しいと心安くおほせ。召し連れたまへる兵のうち九人をば爰に止め。七人の兵を撰みて徒印を興へて國々に廻らし給へ。さは明白ならず名を更へ姿をやつして。道鏡を討たんずる心はべらん人をば。誰にもあれかたらひきこえよと。云ひ聞かせ給へなどさだして。彼は擧出

るに押勝がいはいく。獵夫にこそあれ昨夜御知邊使ふまつりたる男は其の始めある者といはん。彼何處にかはべる名は何とかといへば。老父聞て彼は東國の夷なりよて直に胡をもて名とし。即胡丸とよびて候。彼れ日頃物語する事あり。召出して問んとて。胡丸やまゐりてあると呼べいとだみたる大音にて。これにねまりて候とて出づ。扱日頃聞えつる胡の棟梁カムイボンデントビカラはいかにと問ふに。胡丸答へて曰。されば其トビカラは。夷の王なり。印たまはりてめさば。喜びて御軍に使ふまつらん。押勝聞て夷の常の形勢は何なるものぞや。胡丸かたりて曰。抑も胡と申すは男女交り居て父母の分別なく。冬となれば穴に住み夏となれば木末に住み寒ければ。毛をしき皮衣を着。暑ければ肌を附ず。山に登る事は飛鳥の如く草に隠るゝ事は走る獸の如し。恩を受けては能く報ひ怨を蒙りては悪く報ふ。矢は頭鬢に納め。刀は衣の内佩き。あるは同族を集めて堺を侵し。或は従弟を將て業を掠め。打てば草に蔭れ。追へば山に入る。去るは古へ倭建尊。陸奥に天降ませしとき。御徳には平伏奉れど。時代経て候に。今は貢仕る民にはべらず。然れども良き大將を向けられてはべらば。倭建尊の御例も候なりと申す。老父聞て古より東壯士はかへりみせずと歌にも謠つれ。胡能教へて侍らば。軍の先鋒仕まつらせんは此夷等に過ず。老父斯て仕まつれば。御背安からんに。これは押勝兵一人二人を將て。胡丸を案内とし。自まゐり給はんやと聞ゆるに。押勝承引きて己さらば。自向はんと定め。又軍兵の中より七人の兵を召して。七所に遣はすべき評議す。先書直知徳は日本異國の學びに富て。歌は詩も作出はべるに。面を變へ才を秘して。都あたり忍ばせ置きて。都の有様を窺ひとらせん。道首口足は物よく云ひとりて。言は漢語をさへ辨へたり。元來人心の薄き厚き直なる曲れる。只一度見て曉しるものなり。彼は伊勢紀伊の國に忍ばせん。又高橋朝臣手力は威勢他に勝りて欺ぎを容す。彼は武蔵毛の國にさむらはせん。又和示部眞太刀は太刀撃の術にすぐれ。我と思ひあがらをば打伐り。又其氣いと早くて。心の裏を直に見取る物なれば。北國にさむらはせん。必ず高ぶる人をば押へ。巧み構へん人も知べし。三田皆奇丸は種々の術を知

りて。燃る火を取りて。袋に入れ。山をも。面前打腫かせなどするに。さる術もて人をいれんは。常陸陸奥總の國ぞよ
 からん。又布勢臣古丸は。心はなやがず打沈めて始終をしめ知るべき物なり。これは筑紫の國に忍ばせん。又神麻
 舎人は神言よく辨へて。人の憤みを教ゆべきものなり。是は吉備出雲の方に遣はさん。又忌部宿禰海道は。よく汐合
 の事をしり。天地の氣をも考へ馴たり。彼は阿波土佐の濱邊に居らせん。さて我は三人の兵を伴ひ容を深くやつし。
 胡丸を將てあすなん東國に下るべしと定めて。とりくりに云ひ計らひける。曉方になりて夜霧未だ梢に残り月も入方
 にはべる頃。押勝を始め兵ども彼の粉したる旅裝束するに。王押勝に御土器をたまひて。

岩木なす夷なりとも言とひてことむけすべき男とぞおもふ

早く歸りこねと宣はし。御衣たまはり併に御冠をたばひ。夷もし叛かば。汝我に代りて。神御代の教へせよと宣は
 するに。押勝かしこみ奉りて。答へ奉る歌にいはいく。

さしのぼるひつきの皇子の御衣にしもふれん民草なびかざらめや

とつかふまつり終り。七人の兵をも大まへに召し出で。慇懃に御目を給はらせ。さて押勝ふところの印を紙七枚に
 おして。一人一人に與へ。掎よくいひ教へ。用意すべき金などは。老父いと多く取出で與へけるに。押勝老父にも刀
 自にも娘にも慇懃にきこへ置て。十人餘りの人うちつれて罷り出るに。麓まではと。人々送りす。そのかへたる名。
 粉したる姿は。後の物語に聞えわかん。

第八條

和氣真人清麻呂勅をうけて。宇佐八幡大神宮に詣づ。

大宰府の阿曾麻呂奏してはいはい。此程宇佐の御宮居鳴どよめき。風雨つねならづはべるまゝに。神祭せさせて神の

御心を伺ひ奉りけるに。忌部の千騎に神懸りて示教たまはく。太子大炊王は。おひたませ給ふときに及びて。天皇
 に背かされたまふ御氣なん出来べし。御位は唯弓削道鏡に譲りおはしまさん。正に此神の御意なりと奏し奉りをは
 るに。天皇かしこみ聞し召て。道鏡はすでに法皇なり。天下の政は任まらすといへども。天位のことには私なら
 ず。されど大神の教へ給ふことを。いかで承引奉らざらん。ともかくにも使を奉りて。直に神の教をかうふり
 奉らん。然るうへは何ぞ私のはからひを加へんと告なめて。すなはち和氣真人清麻呂を召れて。宇佐の御使仕ふ
 まつるべきよしを詔まひくだす。清麻呂勅をかしこまり奉り退出んとするを道鏡側差招き人を退けて申けるは。
 御使の旨はかしこまりたりな。さて御使つかふまつりして。歸り登りて奏さんときは。汝が心をもて奏し奉るべし。
 ときに我天位を受け嗣なば。汝をば大臣となして國の政をとらせん。さなくばいと重き罪に落すべし。清麻呂よく
 聞得たりやとて。いきざしあらくうち白眼けるに。清麻呂たゞうずくまりて退く。御使とあるにそれつかふまつる諸
 司うけ給はりつきて。前を拂ひ後を守り。直に南の御門より出で。日没國をさしてまかん出ける。その事その粧ひと
 もに至りては。品殊におほからめど。爰にかいつけんはくだくしかるべし。清麻呂最長き御使をかふふり。たゞ心
 を明し身を清くし。妻を思はず子を懐はず。家をおもひ國民をおもひ。偏に御神の大御心に任せたまつりて。海を
 ば船よりゆき川をば橋よりゆき。山をば馬よりゆき野をば車よりゆき。往きと行くに十九日といふを経て。八月十五
 日の曉宇佐につく。清麻呂身漕をつかふまつり終り。冠を改め裝束をあらため辰のときに御宮居にのぼりて。御使
 のむねを大神宮に告り奉り。みづから太諱辭を告奉り。神祭はじめてより。更に大神のおまへを退かず一心に靈
 験を祈り奉りけるに。その夜丑ばかりに風雨さわぎ出で。神鳴どよめき。雲霧たち亂て。御燈はひとつもあらず
 吹消され。火常闇の夜となりてはべるに。奥門神殿鳴響きて。黒き雲のうちに光を放ち。いかれる龍のかたち廿丈あ
 まり。五百筒岩のごとく。渦巻あがり。栲繩のごとく巻はごれて。口よりかをり満る狹霧を吐出して。神告にのりて



のたまはく。阿曾麻呂あらぬ事を奏せり。それ天つ日嗣は神實猶うけつがせたまふ。私の事にあらざ。いかに泥や餅な
 きものをや。汝道鏡をかします。告のまに告りきこえ申せとのたまふとおもふに。雲霧吹拂ひ神鳴やみて。
 月又廣前のうへに照りしきぬ。清麻呂神勅をうけて賽し。直に十六日の曉。此度は海路を歸らんといひて。豊前の
 海を渡り石見の海をすぎ。阿波の海路をとほらんとするとき。浪風いと高くなるに。横さまにおひとほりて。辛苦し
 て紀伊の浦につく。日はたゞ七日を経たり。さて紀伊の山を越へ。巨勢の里に旅の御館を設けさせてやどる。清麻呂
 我家人を招きて窃に申けるは。此さと巨勢の金麻呂微にして隠れ住むべし。我直に逢ひて語らふべきむねあり。汝
 いきてまづ宿を訪ひ得て歸るべしといふに。私用あるさまに他にはいひて。その御館を出て訪ひもとむるに。巨勢金
 麻呂が住所を訪ひあてぬれば。門のさまなどよく見おきて。御館に歸りて窃にかくと申に。清麻呂打喜びて人知るま
 じき裏の門邊より出て。その家人一人を伴ひ。金麻呂が宿を訪ひつ。まづその門方をみれば。幾年かき掃はざりけ
 ん。門邊とも見へず秋の草高く生ひてはべるに。虫いろくに鳴きつくして。霧深くおきみだれたるに。月の影のみ
 そ訪ひよる心あり。家人先に立て標ゆひつる地錦蓍を搔のけ。草葉の露打拂ひなどして。門はひらくともなく。高垣
 の崩れたりしを踏分て入れば老婆の聲にて。誰や盗人にやあらん。住わびたる家には古き毛氈だもなし。心遣に入り
 ても見よかしといふに。是はさる怪しきものならず。宇佐大御使にまかりくだりてはべるなへに。窃に訪ひ奉るな
 る。かく聞え奉るは。和氣清麻呂なりと申せば。老婆聞てこはおもひかけぬ。我老父起たまへとて打驚してかく
 といへば。いとく珍らかなり。此方へといふさへ奥床もあらず。人二人とならび居るべき席もなければ。清麻呂家
 人に向ひて。道の案内よくしりぬ。この翁と物語らひはべらんには時も移りぬべし。汝は旅館に歸りて裏の門を開き
 おきて待べし。我一人歸りいなんとて歸しぬ。さて外床にうちあがりて。臥具などうち疊むあひだ。とばかり庭の邊
 を見出たるに。門邊よりみ入れたるは中々にうちまさりたり。松のあるはいと高くなり。萩の生ひたるは軒をかくし。

黒木の庇の落かゝりたるには。何をか忘れはてんとて。その草のみ生ひ亂れたれば。清麻呂心に。
萱草垣もしみゝに生ふときぞ世のこぢたきはわすらへぬめり

となん思ひ居たり。老父差向ひて。これは夢のごともあるかな。妹もかく老婆になりて候。やつがれ圖書寮に候ひける頃は。眞人もいと若く御在けるに。四十年の歲月には。互に雪霜の置渡りてさふらふなり。さてやつがれ眼瞶ぬべしと奏したて。官位を返し奉りてよりこのかた硯を見ず筆を執らず元より世の渡らひも侍らぬ上に。心ざし又時の人に遇ず。微に残りて侍るものなどは。人に譲り米にかへなどして。かゝる八重葎の露けき中に。朝の鳥夕の虫を友として。生活なく住み詫びさふらふに。一人の子貰けて名をば金石と呼びさふらふ。本年二十まりにて荒けたる男にて候が。繪の事は自から敏し得て。よくつかまつりさむらへども。我家より世に繪出すなど聞えありては。上の御恐れ侍るまゝ。米など盡きていと悲しく侍るときは。我家ならぬ繪などを。それとなくして他國に持出て。微かに賣候。今日なん賣にいきて候が。暫時御在さる間に歸るべし。又彼が姉の侍りしは。親を思ふあまりに身を住吉にはふらかして候に。折々心ばかりのものを贈り候ひしが。其後何地ともなく人に附て。参り失せぬるよしなり。又やつかれも遠近に所を移して候まゝに。たとへ問ひかへりぬとも。尋ね詫ぬべし。今又この里に住めば。人皆巨勢の老夫と呼びて候。さて眞人は宇佐の御使とありて。唯今下り給ふにや。宇佐へは。紀伊の道を通り給ふべきにもあらず。又かく寔し給へるは如何にと問ふに。清麻呂答へて。誠にかく隠れおはして。人と交らひ給はぬには。何事もしろしめざじ。道鏡が騒ぎ押勝が亂は開給ひつらんといへば。さることは天下に隠れなし。されど委しきよしは洩れきこゆべき筋にもあらねど。人みな流言をこそ申せ。確にかかくとは聞渡らず。審かに語らせ給へといふに。清麻呂涙を拭ひて。誠に世の降にこそ候へ。始めより語ればかくの如し。終より聞ゆれば去様なりとて。落もなく語り聞せ。さて眞み参らせたま旨は。やつがれこれより内裏に歸り登り。神の御答を明白に聞えあげ奉るべきなり。さるべきは

道鏡正に我を落さん命は民草の爲に奉れば。更に悔ひ思ふ所なし。只家亡びて妻子の感ひ御徳なんは。人として御しまざらんや。おのれ勅を受て。直に内裏を退出しかば。かくいみじき御使なりといふことは。妻子夢にも知らず侍る。是より又罪に下らんも。かゝる故といふ事を知る人なければ。如何なる筋とも辨ず。いと果敢く思ひ詫ぶらん。かゝること世の誦ひある人には洩しがたし。よて宇佐よりまかり歸らんとしける時。神々を祈り船を紀伊の浦に附し程に。巨勢の邑を宿りにせよと申付て。かく訪ひ参りけるは。今差當りて思へるにあらず。神を祈り得て候事にぞと語れば。老夫涙を落し。承はる如く世の降にこそ候へ。さては畏き御使を蒙り給ふものかな。定めて歸り奏させ給はゞ。道鏡怒りて。御命に及ぶべき筋なきにしも侍らず。何にもあれかく老かゝまりては侍れど。我子金石は丈夫にてさむらへば。如何ばかりも計ひて。御心安からん様には仕らん。是は御湯も奉らずなど語ふはしに。金石米を負て立歸るに。よき時にこそとて先紹介せられたれば。清麻呂禮儀正しくきこへて。なほくゝに頼み奉るよしを申す。老父清麻呂に向ひ。彼見給へよき正男にて候。糧盡たるに繪二三枚。仕りて。住吉の方に賣に参りて候か。俵一つに致し負ひて歸りにきとて含笑。清麻呂懐中より金五十枚を出し。又さばかりの金を包みたるをも出し。御物堅くおはしますはよく知りて候へども。金は世の寶にて候へば。人を助ける事とき。志を通らさんも是なり。此五十枚は米の代りに奉る。又包みたるはおのれが妻子惑ひ歩き侍らんととき。助け給るべき用意になんあとゝへ奉るといへば。老父聞ておのれ見給ふ如く。親子の筆はすなはちこれ我所領なり。住居こそかく詫て候へ。命を保んばかりの事は。いと安く覺えて候に。不時の御備へと侍らんは承引べし。外に五十枚の金を。賜ひおかん筋は侍らずとて返へせば。さる事には侍れど。世の申いと騒がし。おのれは金を天地に捧へて貯ふとも。命極まりたればよしなし。只偏らに承引き給ひ置ば。如何なる世の御爲にもといひて。わりなく参らせ置つゝ。夜もいたく更たるに。懇ろに頼み置て。清麻呂は歸りにけり。

本朝水滸傳卷之四終

本朝水滸傳卷之五

第九條

清麻呂神の教を奏すによりて道鏡に罪せらる。巨勢金
石清麻呂をたすく。井に金麻呂親子清麻呂も共に死す

和氣清麻呂。宇佐の御使はて歸りまうづと奏するにより。天皇高御坐を下りさせたまひ。神の御教を聞しめさる。道鏡なほ法皇の牀にありてとも聞居たり。清麻呂奏して曰。御使もて宇佐の大神に詣て。八月十五日の辰のとき大神に告奉りてはべるに。その夜。已ばかり風雨あらく。雲霧立まどひて。いと闇き中より。神の御形廿丈ばかりの龍と現まして。神告にのりてのたまはく。阿曾丸あらぬ事を奏せり。天津日嗣は神代より神胤なほうけつがせ玉ふ。私の事にあらず。いかに況や筋なき者をや。汝此告のまに々奏しあげよと。告終りたまふと覺えはべりしに。雲霧はれ渡りて候。神の御教如此じかのよしなりと奏せば。天皇も御心の外にておぼしわび玉ふ様なり。道鏡は身を震はし眼を赤くし。面を青くし齒を喫鳴らし。大音に匄りていはく。しか奏すは神の御教にあらじ。阿曾丸豈偽を奏さんや。汝が心をもて巧み構へて神の御心を穢すなり。只今より汝が名を穢麻呂と變へんと匄りくだして。刑部省なる乙熊を招き。此奴脚の筋を切斷て。大隅に流しつかはすべし。此まゝに冠を落しひこづり出せなど。氣色あしくいひ懲し。又刑部省にさむらふ。坂戸牛養石部大井戸二人をもさしまねき。耳に告て差遣はしける事あり。さて牛養大井戸清麻呂が冠を落し裝束を脱せ。穢麻呂と呼びくだして。解部さまの者立ふるまひ。袴をぬがせ齒をまきて。ふたつの脚を引はり。脚の屈める筋をきりはなせば。皮はつき破られて血いたくながれ。脚は蹙て立ことあたはず。清麻呂はもとより思ひ定て。命をありとせざりしかば。只なすがまゝに任てすこしも動かす。さて清麻呂をばあやし

き興に昇乗て。守部の官人打ち躰みて。穢麻呂と札に書い現し。坂戸牛養石部大井戸前方便方をまもりて。大隅をさして下るに。その日龍田山越えんとしけるととき。山風うちさはぎ。雷鳴りはためきて。日も闇くなりしかば。山の麓に驛にはあらで。家群のはべるに走せつき。今夜はまづこゝにとて宿所を定む。清麻呂をば興より昇出し。いとちいさげなる一間の。人居をはなれてはべる所にやすませ。牛養大井戸の二人は。中の一間の離家に入り。守部どもは下屋の方につかはして伏させける。雨いたく降りつりて神鳴やまず。夜も漸々更渡るに。清麻呂は只心をひとつにして。宇佐の大神を祈り奉り居たり。さてすこし寢付たりとおもふに。簀子をきり破る音し。やおら立入る者はべるに。これは道鏡がいひ付て。我を竊に殺すめり。さるにても脚は蹙たり太刀は佩す。此まゝに命を失ふより外はなしとおもひて。動きもせであるを。枕をかきさぐりなどし。さて耳にさしよりて。我は巨勢の金石なり。父の金麻呂申付て。直に御跡を追ひて都に出て候に。かゝる御ありさまを見奉りかく忍びよりて候。なほ盗み出し奉らん。御脚かなふべからず。我負ひまゐらせて立退かんといふに。是只大神のしたまふなりと思ひ。かゝる御たすけ私ならずと思ふに。御計ひにまかすべしとて。金石におはるべうしけるが。さもあれ牛養大井戸の二人ぞはべる。彼必ず道鏡が詞を承引て。今夜我を殺すべき氣見たり。此儘に立退きたらば。罪人にして掟を犯し逃たりとあらば。却りて罪を設くるに似たり。殊に我を負ひて走りたまふとも。追る來ん守部をいかに防ぎたまはん。咎なき其方をも我類に落し奉らんはいと苦し。さは此儘にて彼等に殺されたらんは。かへりて罪なかるべしといふに。お道理は承りぬれど。守部のもの追ひ來らんかまへは。父の金麻呂よく心得つかふまつりおこしたりとて。何にかあらん立ふるまひて。清麻呂を肩に負ひかけ。戸をやおら引寄せつゝ。裏の方なる柴垣を破りて。巨勢道にかゝりて逃去りにけり。かゝる騒動も雨風の募りにまぎれて。守部ども聞ざりけるに。牛養大井戸靜に起出で。脚を脱ぎ息をとめ。燈をほのかにして清麻呂が臥し居たる形状を見れば。薄衣をうちかけて心よげに熟睡せり。さて打睡きて牛養まづ。彼が首を討

べし。さて後簀子を破りて死骸を此下に埋み。守部どもには彼蹇たりと人に見せて。風雨の紛れに逃走りたりと云はせん。さて首は窃に包みて。討たる證を道鏡に見せ奉らんと謀りて。靜に立寄るに。清麻呂は只躬もならずして臥居たり。牛養太刀をあげて討つに。首は飛び離れて脚躰はうごめき騒ぐを。大井戸しかと押へたるに。血は瀧の如くながれ出て。見るがうちに面がはりぬれば。先づ簀子を切破り衣などを押巻きて。血を拭ひ納め。脚もて骸を踏落して土を取りかけ。石を打重ねなどし。破れたる簀子を繕ひ。首をものに包みて。さて我寐たる一間にかへりて夜の明るを待に。風雨も小止て明け白むに。牛養大井戸早く起て。守部ども穢麻呂を輿にかいのせよと云ふに。守部どもいきて見るに。清麻呂はあらず。驚き騒ぎてかくといへば。牛養大井戸ともに呆れたる顔して立ゆき。彼れあらざるを疑はしくし。蹇め人を欺きて逃たるならん。さなくば守部等心を合せて落したるならん。我々二人はすぐに都に歸りて。此旨法皇に聞え奉らん。汝等は我が疑をはるけんと思はど。いかなる隅よりも穢麻呂を探し出せといひて。二人は馬に打乗りて歸るに。守部ども思ひ疑ひて。及立歸りて清麻呂が臥したる跡を見れども。跡かたもなければ力及ばずさは尋ね覓んより外なしとて。道ををちこちにさしていきわかれぬ。さて牛養大井戸の二人は。清麻呂が首を抱きもちて。道鏡に申入れれば。側にてあはんと。人を避けて昨夜の有様を聞。よくしたりなど稱め衣裳の袖より金多に取出てあたふ。牛養大井戸いたく恭ひ如斯仕終せたる證なければ。穢麻呂が首はかくもちてさむらふ。穢らひの恐みあれど。我々が心やりに候をいへば。穢らひ何かあらん。いで見んといふに。包みを解きほどきたるに首はなし。是如何只今これまで携へて参りつるに。大井戸いかにしたまふといへば。大井戸怒りて。汝一人の譽にせんとて。穢麻呂が首は討ちたるならずや。さてこそ汝が物に包みて持て來たれ。我は手もふれずといへば。彼包める帛打返して見るに。人の面畫きたる紙のうち罅びて出たるに。是は何事ぞとてさばげば。道鏡大にいかり。汝等我を欺きて。穢麻呂を助け。かゝる紙繪をたくはへもて來て。穢を負りてさめつるはいかにといひさまに。太刀

を執て二人を眼前に役り殺し。人參れ此穢らひ物を穿ひ出せとて。睨みわたして奥深く入りぬ。是は何事のおこなひにかとおもへど。恐み諂らひてとりかたつけぬ。さて守部どもは多くの人を彼方此方にわけて。蹇男遠くはゆくまじとて。大和の山の隈邊かひもとめ。巨勢道をさして行に日暮れぬ。續松打ならせて猶ゆくに。人ありて語を開けば。巨勢金石ぞ蹇を負ひて家に歸りつる。いかなる男にかなといふに。守部どもさてこそあれ。何にまれ金石が隠家を圍みて。金石ごめに召縛れなどいひさはぎて。守部解部三十人あまり。仕丁どもに續松ともさせて。巨勢金石が庵を圍み。金石蹇を負ひて歸りしといふ。其蹇ぞ罪人なり。只今見顯さんとて。柴垣を踏さき蹇をうちはなしで立入るに。人氣更になし。戸をこぼはなちて續松を照らして内を見れば。今はかなひ難く思ひて。清麻呂は上坐に居りて腹かき破りうつむけに臥居たり。金麻呂は妻を刺殺しておなじく腹立破りて。その妻の骸にうちかさなりて死居たり。金石又下坐に居りて。腹を十文字如ちちやぶり。咽をいたく突き破りて死居たり。さて見るに血のかほり庵にたち滿ち。腸こぼれ出て。臭きかをり鼻にとほり眼にしみ口にむせびけるに。守部ども頭をいたくし嘔すべく胸さわぐに。さもあれかく死たれば。これが首をとりてまかり歸り。かくと聞え奉るに何にかあらん。おのれ等が役は終りたりといひて。四の首を四の槽にをさめ。ひとつく礼を立添て。夜通に都道に趣き。明日の日の夕方漸に歸りつき。訴所に出でしかんくのよしを申せば。即首ども見んとあるに。それんの司立添て。槽をひらき見るに首にはあらず。只繪なしたる首の形ぞ入れたれ。司ども大に怒り。汝等は上を欺く罪人なり。かゝる曲事類あらじ。罪は追て御定あるべし。一人々々徹經に括り。彼等残りなく獄屋に繋げよ。嚴しく守りつかまつれ。いと辛く責れとなん言りあへり。

第十條

金麻呂親子清麻呂を將て紀伊の温泉に忍ぶ鼻彦軍書を講く

金麻呂繪妙術をもつて多く守部を欺き。さしあたる危さを遭れて。隠れ居たる所を這ひ出て。さてもかくては隠れまゐらせ難し。又御脚かなはではいかでおはしはてなん。紀伊の温泉に將てまゐりて。夜など人見まじきときは。をりく湯につけて養ひたまはゞ。大神の惠も愈加はりはべらん。又温泉のさむらふ所は賑ひてあれば。かへりて人に紛れては隠れ得べき所なり。此夜のうちにもとりまかなひて。巨勢山を越えて山道をさして行くべし。又道の序なれば巨勢山の彼方に日頃此老夫に繪を習ひて。これもかすかにてさむらふもの二人まではべり。志いと雄しければ。此うち一人を伴ひ。又ひとりをは我子金石に添へて。朝臣の御消息をもたせ。金をも蓄はへさせて都に遣はし。御家の有様。御妻子の御上を伺はせ侍らん。いざやとて急がしたて。金石問屋にいきて脚弱き旅人の馬からんと申なりといはせ。肥馬の脚疾きを引せ。清麻呂を中に乗せ。老父と二人は左右に乗り。金石は筆硯やうの物かい捨てたき具どもをば。荷の緒に堅く縮て。打荷ひて跡につきて出行く。夜は丑三つばかりにて秋の風打さやくに。星は耀ら耀らと照りて。山の端を見れば月いと細く落かゝりて。鶉いと高く鳴く。芒花雀麥を分行道あり。谷水にそひて行く道あり。木むらを左右に執て立まとう道あり。岡を過ぎ尾の上を越ゆるに。巨勢の高山を遶りいきて。家の十ばかり住並たる所の侍るに。金麻呂清麻呂に語りて曰く。昔し大寶の頃太上天皇 持統紀伊の國へ行幸のとき御供せる坂門の足が

巨勢山の別々椿つら／＼にみつゝ思ふな巨勢の春野を

と詠めりけるより。此處をば椿原と呼つゝ終に所の名とはなせり。彼方にさしならびて。黒木もて葺る家の。山近くて二つ侍るは。即ち我繪の學び仕まつる男なり。先此處に休息はせ參らせて。此事彼事しおかんとて。馬をばその門に繋がせ。清麻呂と老刀自をかき下させ。我はひ下て。また曉なれば主人は睡りてあるに。門打叩く間に。金石も追つきぬ。金石荷ひを下し聲を高くして。獵野やおはする。金石親を將て参りぬとて起せば。をいと答へ

て帯など引結びながら御差上げ戸の鍵明などするに。人みな立入れば。是は思ひかけぬ。門邊にだも立出給はぬ我大人の。刀自君さて將て在したるは何ぞやと問ふに。金麻呂聞て。是は脚毀なひ給へる人の。昔しの友なるが紀伊の温泉に在したく覺すに。一人にて甲斐なく御覺せば。おのれ等伴ひ參らせし。物語などは静かに聞えん。さて此處ゆ牛をかり得て乘參らせんに。馬をば返すべしとて。馬の借代よみてければ。馬飼が見て。今朝は荒き山を越へ。又寒き朝川渡りたるに。酒代取掛け給へといふに。金石袋より取出てやりければ。馬飼が見て。今朝は荒き山を越へ。又りや。此邊の酒屋はよき酒もたらぬ上に。錢多く欲す。賜はりし酒代にては。一杯にも満たず。老父その袋の重げに侍るに。今一杯の代を賜へと笑かけたるに。金麻呂その錢を遣て早行せといへば。金石これはいと過たり。巨勢方の酒屋ならば十杯も呑にとてやる。馬飼頭にあけて押戴き。よき若子なり。老父眞幸くて歸らせ。刀自子無恙歸らせ。旅人よく牛に召せよなどいひて謠うたひかけてゆく。老父馬飼が歸り行を見いで。内に入りて清麻呂を上座に昇き据へさせ。さて獵野を呼びて。此男は昨夜物語參ひらせし。我繪の學び仕まつる徒なり。名をば巨勢の獵野と申す心深き男なり。これに御消息を賜ひ。金石を添へて御妻子の有様を問ひ參らせ。逢ひ奉らば直に紀伊の温泉に伴はせ奉らん。又此家の隣は。これも徒にて志又厚し。彼が名は巨勢長勢と申す。彼をば我々將て温泉に伴はん。金石参りて申せといへば。金石行て將て参るに。二人を紹介せて。二人にはしか／＼のよし始終を聞え。さて朝食などは粟の飯をたきてあるじす。清麻呂文を委しく書て獵野に與へ。金麻呂は袋より金取出して金石に授け。さて牛三つを借りて。三人は乗りて紀伊の温泉に急ぐに。道を山間に執りて眞熊野をさして行。此處ゆ夜に臥し日に歩みて行と行くほどに。遙かに思ひつる温泉に着く。さて長瀬よく案内したるに。奥まりたる家の静かなる所を借て宿りと定む。曉夕暮の程。夜は暫々にしければ。清麻呂温泉に打漬るに隨ひ。大神の御惠や加はりけん。三日ばかり過るに。筋は延らかにいき遠りて。脚よく歩み出たり。いと忝けなく畏く覺え。此上はしば／＼も出ず。深く其家に隠

れ居りて。金石獵野が都より歸り來ん便りを待ける。さてその家の隣に引移る人の侍るを。いかなるものと思へば。夜毎に人を集め軍書を解きて。錢をとりて。世の渡らひとする人なり。是はいと淋しきときに壁の此方に聞居らんは。よき慰なりなどいひをるに。その夜になれば表に燈を出し。その燈の覆に張りたる紙には。鼻彦と書付け。又傍に伊波禮毗古命白眉津の軍の條。並に五瀬の命痛矢申を負ひ給ふ條と記したり。入來る人その記しを見て。是は面白き所ぞなどいひては入る。又來る人もしかいひては入る。又その鼻彦なるや聲可笑う打揚て。いづれも召せたる香をよくとり入れ給へ。外の方にな脱置き給ひぞ。昨夜も小盗人の取り行し。さて僕もさいつ頃まで居りつる所は。溝河など渡りて。通ひ來給ふに便悪く候へば。此處は少し奥まりては候へど。御在さん道平に待れば。此處に移りて候。變らて御在し集ひぬるぞ忝けなき。さて今夜申條は。伊波禮彦命これは知し召ごとく。神武天皇にてお在ます。浪速の渡りを経て。青雲の白眉の津に御船泊給ふ。さて此津はうちよする浪の速きに。浪速のやを署きて今はなにはと申にてさむらふ。そも那賀須泥彦は五百萬の軍を引き。前は堺の海邊。後は河内の大野にかけて。雲の如く霞の如く。旗指物をはためかして。官軍を今かくと待ときに。寄人の大將は伊波禮彦の御兄五瀬命なり。その日の御裝束は。唐金の御甲に鹿の皮の御下着に。上の御冑は牛の皮をなめしになめし。鉄よりも堅くしたるに。銅を延て三所四所ひきしめ。白珠青玉を黄土染の緒にくくり垂れて御飾としたり。御手纏には韓珠を飾り。御脚結には鈴をかけ。御執の梓の弓に。鳶の羽たかくかりて作たる征箭を持添へ給へり。此方は旅ながらの御戦なれば。吉備の軍兵未だ御船に追ひつかず。軍兵僅かに萬にすぎず。されど御勢強くおはすに。那賀須泥彦が五百萬の軍を。後さまに追ひ返し給ふ。ときに登美彦といふもの。槻弓のいと強きに。雁の羽を作たる矢をはげて。擲投たりけるが。その矢流れ行きて五瀬命の御臂に中る。御血のいたく流れたるに。暫時立しぞかせて洗はせ給ふ。さてぞ血沼の海といふはその故にてさむらふ。かゝる賤きものも射ける箭。御身に立つべき様はあらねど。これは正に西の方に御軍をたて。東に向

ひて挑ませ給ふにより。日に向ひ給ふ御罪なりと覺し。しばらく軍兵をひかせて。備へ返たまはん謀應をし給ふ。さて是に次て申所は。五瀬命遂に崩れ給ふ條なり。いと哀れにて面白く候へば。此間に先世業仕らんといひて。小さき籠を人の鼻の方にさし出すに。人皆袋をときて錢一ツ二ツ三ツ四ツと差入るに。からりと振鳴して其處へは手の伸がたきに。投起し給へなどいふ。さてある間に。向ひの家打騒ぎて人叫び立てり。何ぞとて聞けば。蒸釜に火つきて壁に移つり。軒の端に燃上るとて騒くなり。集まる人あわて惑て。袋も縮あへず。錢の覆れ落るも顧みず。沓もはかて逃げ去りぬ。さてあるに火は事にもならで消ぬ。かく騒ぎたるままに。表に燈せる火も吹消し。内に入りて物食べなどし。落覆れたる錢ども掻集めなどして寐つ。さて隣には打ち静まりて。隣の大人はいと利口かな。都の人なめりといひて。昔の軍の例どもを聞くによりて。世の中いと騒がしく。民の歎き彷徨を。如何にして助け侍らん。又道鏡を討つべき手計などにつけては。清麻呂の名を呼び。惠美押勝など。祖王の御上など物語出るに。鼻彦壁に耳をよせ。明白に聞き居て。隣なるはいと床しき人々なり。殊に清麻呂と聞えつる名の侍べりしぞ怪やしと思ひて。夜すがらその有様を窺ひ居れり。鼻彦はこれ何等の人ぞ。後の物語を待得て知るべし。

本朝水滸傳卷之六

第十一條

守部が輩罪を許されて清麻呂金麻呂が跡を

追ふ清麻呂が妻子金石獵野に逢ひて紀伊國に行く

清麻呂跡を暗まして逃去りしより罪いと重くなり。その家を壊たれ。妻子をば追放たれぬ。又刑部省には。彼獄屋に繋ぎ置し守部どもを。訟の場に曳出させて。猶責問て曰。汝等繪ける首の形を持って歸りて。訟の官人を盲にしたる。類ひなき罪人ぞや。歸りて金麻呂に賄賂せられ。清麻呂を救ひたるか。事を明白に申せ。さなくば獄屋の棟にさかさまに繋ぎ。爪を振き髪を抜き。刑罪は列木の宮の御時にたくへん。武烈天皇は長谷のと懲せば。守部等色は草よりも青くし。身は飛立ばかりに顛ひ上り。咽をつまらして暫らくえいはず。早く申せとて責れば。唾を呑込み鼻を吹鳴らし。漸々によつがれらは欺き奉らずと申す。欺かざるものがしかすべきや。さるはさる事なり。さあるも一人二人の落にも候はず。何れも太刀は佩けり火はともしたり。申々に狐ならばとく見顯し侍らん。是は只さる迷ひにも侍らず。多くの人の眼に掛て侍る上に。血もいたく薫り。腸なども汚穢に引ちらし。是を見るものは嘔すべく侍りしには違はず。此上は御使を金麻呂が家に遣され察せ給は。時の間に人來りてさる汚穢なるあとをかき拂はんと覺えず。又従弟なども疎かるべきに。彼等が死骸をとりかくしも。仕まじ。さるは察たるうへに死骸もし残りてはべらば。首の紙繪に化たりしは覺えず。彼等正に腹たち破りて死たるにはたがはず。もしまたあらぬ事に侍らば。我々どもは狐に惑されて侍るなり。さる上は御刑罰のことは如何様に蒙り奉るとも。一言も申す旨は侍らじと申す。誠にさる事なりとて。一時に千里をも往復るべき馬に。騎部眞龍といふものを乗せ。只一時にいきかへり。金麻呂が家の有様を。明白に申

せと聞ゆるに。眞龍承はりを申し。鞭を打鳴して走せ參りしが。二時あまりして地徒烟を踏み起し。騎り返して申さく。直に金麻呂が家に參りたるに。門は鍵もさ。戸は引よせて候に。入て見れば家には一人もなく。元より死骸もあらず血などの覆れたる跡もなくいと不審しく思ひて。家の隅々かい捜し候に。引破りたる紙繪の。風に吹散りてあるを。一枚二枚ひろひ得てかへりぬ。其外なにも侍らずと申に。訟の官人眉を集め。怪しの事やとて。その紙繪を開きて見るに。腹立破りて俯伏しに伏したる姿もあり。又老婆を挿殺たる所を書るもあり。これを見るにおの／＼首はあらず。さてこそと首をかきたる紙に引合て見れば。人の形連なりぬるに。人々手を打鳴し。是は正に巨勢金麻呂が晝たるならん。金麻呂圖書寮にさむらひしとき。御壁の廻りに放駒を晝せ給ひけるに。その後此駒夜毎に出て。御園の萩を嚙あらしめてさむらひける事あり。是必ず彼が筆の神に至れる所なり。此度又斯の如き事あれば。これ私に承り置べきにあらず。奏し立て見んとて奏し奉りけるに。道鏡御傍に頭をかきて。我早ぶりに牛養大井戸の二人を伐殺したるは。これも金麻呂が筆に欺かれたるなりし。よし／＼金麻呂をとらへ來れ。清麻呂を縛り來れ。憎き奴かなと怒りに怒りていへば。天皇開召して。清麻呂に捉を犯して逃げ去りたるなり。金麻呂は眼盲ぬべしとて官を返し。私に繪かきささび。剩へ罪人と共に。公を欺きたるその罪咎國つ罪に超たり。草を刈拂ひてもその隠れ家を求めよ。山を枯してもその住家を知れなど。天の御氣色いと荒きに。百官これを畏み。御道理を聞え上げ奉りて。則ち官人に勅下し。守部が輩の罪を許さむ。さる上は命に懸けて金麻呂清麻呂を召捕り來れとて。訴の場を退出させける。守部等畏まりを申し退出けるを。今暫しと呼返して。もし金麻呂を捕へたらば。先づその躰に水を灌ぎ掛けよ。しか檢したらば。紙繪の人か眞の人なるか。その分別は立所に侍らん。急げ守部。心得て侍るかなどいひ聞せて遣はず。守部等辛き目に遇て。金麻呂を追ひ求めんには。桶と柄杓を持歩かん。兵具これに過すと。口々にいひ別れぬ。さて清麻呂が妻は。娘なる少女が十まり七になりて侍る。小松の乙女と申けるが手を

路を彷徨出

て。親屬をも離れたれば寄べき所もなく。明日香の渡りに聊かの知方あるを心ざして行く。ちて眼も見えぬに。道を歩みかねて。かゆきかく行佇み給ふを。金石獵野不意行掛りて。いかさま常ならぬ君と思ひしかば。金石近くより。見奉る御有様は。世にさすらひ給ひつる人ならん。もしは清麻呂郷の御由縁にかはと問ふに。暫し答へかねておはすを。さな包み給ひそ。卿の御文これにはべりとて出せば。親子の君欣ばせ給ひ讀果て。或は嬉しみ或は打なきて。月日は我爲には照し給はぬと思ひ詫びて侍るに。神亦捨て給はざりき。さは在さん所に今の間にもと聞え給ふを。さることにこそ。ことに父の金麻呂が繪をもて欺しこと顯はれて。是さへ甚く追ひ止め給ふと。街の言に承りぬ。これは又俄の事なり。紀伊の山に入りては御轎駕もあらじ。夫が間は御轎まうけて乗せ奉らんとて。かひくしく走せ遶りて。怪しながら轎駕二つを借得て。二人の君を乗せ参らせて。日に夜をつぎて歩み行くに。巨勢獵野が宿にも着けば。爰に夜の明るまでは息らはせ参らせ。次の日になりては。馬牛など借得て。乗せ参らすより外はあらぬ山里なれば。如何にせんと詫ぶるに。さる怖しきものには如何と宣ふに。さらば山のそき岩が根の道は。負ひても仕ふまつらんといひて。杖着せ参らせ笠などもいと深くして。壺折姿にかい繕ひ紛し。金石獵野は長き太刀を佩き。櫛の杖のいと太きをつき。御前方御後方に立ちて。此道は先頃。夫の御君も通らせ給ひけるなど聞えければ母君。

我妹子をいて巨勢の山高々に思ひて獨りけふ越んかも
小松の乙女

あさもよし紀方にありとふ夫の山を我松葉の母と戀つゝ
といひ慰みておはするに。日も西山に遠れば。御徒然を慰め参らせんとて。椎の葉に飯をもち。落の葉には谷水を汲み持ち上りて。旅にしあればなど吟ひ出つゝ奉るに。いと珍らかにおほしたり。いとゞ疲れ給へど。いかて草

薮ふきて。かゝる荒山中には宿らせ奉らん。今二里ばかりを歩み給はゞ。金石よく知りて候もの侍るに。宿りを乞ひて息らはせ奉らん。かく雲霧ひては候へども。日はまだ暮まじきに。我々負ひ奉りても。さる人里へは行たらはし侍らんとて。いと軽らかに負はせば。二人が二君を負ひ参らせて。いと細き道を芒雀麥踏分けて右よ左よなどいひつゝ行に。秋の末なれば山越の風のいと寒きに。猿近く梢に叫び。虫の音などは鳴よわりて。行先とも覺えず夕霧の立隠したるに。いとゞ心細くおぼしたり。荒坂遠山方に掛りて。岩立さかえたる道の邊に暫し下し奉りて。蒸したる苔などかき拂ひ。息らはせ参らせけるに。乙女の胸痛くし給ひぬるに。看病参らすとて。時の移るも知らず。水など汲みて怪しき薬など参らすに。少こし怠り給ふ様なれば。日も暮んずるに。此坂越れば御宿りは近かるべし。いで急がんとて又負ひ奉らんとするに。坂の半ばかりに臣の木のと大きやかに。小鬮く打垂れたるもとより。丈は七尺ばかりなる荒男の。八束の劔を挿し佩き。手に長き杖を着きて。只獨り立ると見しが。又後にいや儼りたる荒男の。是もさる様にて立をれり。

第十二條 山賊清麻呂の妻子を盗み去る明日香大太刀
金石に逢ふ并に紀伊なる人々伊吹山へ行く

君達いと怖しくおぼして打戦き給ふに。金石獵野は丈夫なれども。かゝる御伴の侍るに心おくれ。後めたく覺けれど。後方にも下りがたく。横様にも隠れがたく。暫し佇づめば。荒男等杖を岩が根につき鳴らし。脚は濶く歩み。肩は首より高く差張り。下り曲りて道を遮ぎり。山彦高く吼轟きていはく。小童よ汝等かゝる山道をいと聞きに。女を將て何處へか行く。さこそ物憂からめ。色好き乙女を手をとりて往んといふ。金石獵野早く敏し。弱より強きを討んと心にはかり。是はいと忝けなき。我々は都の従妹が脚を病ひて候に。温泉に参らんといふを。伴ひて侍る。此

坂の彼方に知己のあるが。早程も近し。その故に急ぎでも参らず。さのたまふは何らの人ぞと問へば。さこそあらぬ都の乙女等を感し。加太の浦の遊女につき出して。錢を致す事は。我々が家業なり。さるを我々へ訟もせず。斷りもなく。汝等が致さむとするか。又我々が名を聞んといふや。そも我は昔し磐余彦に魂ぎらせし。大熊の神の子孫にて。熊野山の鶯能又の名は長爪とのる。この男は八咫鳥の神の子孫にて。八鬼山の山鳥又の名は嘴太ともいふ。さはいよく擲みよく喰ひさいなむゆ多なり。小童等その兒等を我々に貢し命を躰に收め歸れ。さらば命をば躰より追出さむ。此熊極の杖を見よ。平群の山より撰出して。飛驒の木工が首を押しながら削とらせたる八角の杖なり。いで小童ども此杖の下に死なんや。又今いひし貢をするや。いで云へて答へよといひて立よるに。君達をば石群の間に隠し参らせ。金石灘野太刀を抜きて。不興言切掛るに。鶯能八角の杖を延て打拂へば。金石いたく兩膝をうたれて地に伏して起事叶はず。獵野是を見て口惜しく思ひて。少し躊躇ふ所を太刀を打落され。肩を打たれなどして眼のくらくらなるを。又打倒して。一人の小童は脚を打折たれば。此處に捨て置いて。狼の牙に掛て喰殺させん。此奴は生々死かかりつるに。よく踏て踏殺せとて。石ごめに踏たらしめて殺しぬ。さてかの貢は彼方の岩間に收め置つるを見つとて。立遶りてさてこそ爰になん。味食参らせん。泣いざち給ふなとて。只兎など打被く様に。肩に二君を打掛けて。小柴高菅階分けつゝ山深く上りぬ。金石眼をいからせ齒を嚙鳴せども起えず。この儘に死なんと思ひて太刀を抜ながら思へらく。我親金麻呂また清麻呂の卿をも。上よりいたく追ひ止め給はんと聞くに。是又早く告げ参らせては。犬自母の道に果敢なく死たるならん。覺り行きても我知己の人に逢ひ。牛にもあれ馬にもあれ乗りて。温泉におはする人々に告終り。その上に如何にもならんと心を定め。手をもて我足を引寄せ。我腰を引延して。一尺二尺つゝ登り行くに。鰻牛の如き歩みなれば。息絶え氣たゆみて行えず。只口惜しく甲斐なく腹立しく。神をさえ祈り得ず。涙のみはふれ落るに。坂を登りくる人の音の。遙かに下方に聞えたるに。いでや人ならん登り來よかし。言を告げ聞え。懐中の金

はありのことゝ如何ばかりにも觸み聞えん。人なれやゝと祈りて待に。木の根を踏ならし。石を踏渡る音などして近くなれば。いと嬉しと思ふに。何かあらん馬に負せて此方様に登りゝ。是たゞ神なりと思ひて待居るに。荒坂の坂の岩波高ければ。重荷をなづみ馬ぞつまづくと。鄙風俗に謠ひてまのあたりと引かけ。さても醒しや。これは魚の臭にもあらず。此山の獵夫が猪射たるならん。血も多く流れてこそなど。獨り言て行き過るを。暫しと呼べ返りみして。人こそあれとてつらく打見。此二人は寒よな。獵夫が痛矢串にや中りたるが此馬借んといふなるべし。さあらば粟重く負はせられたれば。任せ参らせずとて又行を。しか宜ふ聲は我聞しによく似て。候人なり。そこは明日香の太刀ならずや。をいなさのたまふは巨勢のかといひもはせず。馬をば引はなち。此有様はとて驚くに。然々のよしを語れば。しか承りてはおのれがうへにも捨たき旨あり。急ぎ將て参りなん。又獵野が死骸は今とて葬りせん様も侍らねば。稍の雲と鬚鬚ぞよきとて。石などうち圍ひ死骸を收めて。利鎌もて楚押きり草荊添へて。火を燈出して火つけて焼に。山風吹登りて煙のいと高くなるに。我は粟を荷ひ馬には金石を乗せて。足掻を打早めて。行くゝ金石に語りて曰く。おのれ今は紀伊の山邊に住めども。明日香をもて家の名を呼ぶは。和氣の御家の恩を忘れ奉らじとするなり。委しくは知り給ふまじ。我壯年の血氣に乗り。劍術を好み馬に乗り弓をとり。鎗を遣ひ相撲を好むによりて。農業を忘れたるを懲して。御父飛鳥川老我を追放ちて候に。世に似なき國罪を犯し。公に捕へ打れて。獄屋に繋がれて侍りしを。清麻呂の卿我領所の民なり。いかで命を召させんやとて。御なだめ聞え上げ給ふによりて。去々年獄屋を出され。大和の國を追放れて候。されと一度は御赦免を乞ひ奉りて本國に歸り。卿へ御恩謝仕ふまつらんと思ひ候ときなり。我久しく此山に住めば。鶯能山鴉など罵しり侍るものはよく見覺て候に。此道を一時に通り。温泉におはさん人人をば生き忍ばせ奉らん。夫より君達の御行衛求め奉らんと。語るゝ行に。夜と暮れ日と明けて温泉に着く。時は夜半ばかりにあらん。金麻呂が隱家に至り。大太刀金石を昇下し。戸を靜かに叩き

て。金石歸り給ひぬといへば。内にはほとく出まどひて。まづ灯など明かくしていかにと問ふに。金石はいたみたる上を。馬に乗りて山坂を越えたるに。今は氣上りて物もいひ得ず。大太刀は又清麻呂の御有様を見るより。涙を止め兼ねる上を。清麻呂早くそれと見給ひて。こは如何にと宣ふ。さて金石には藥などいふ間に。大太刀行かゝりて計ひたる始終。又聞つる其夜の騒ぎの有様。君達奪はれ行給へること委しく語り。我直に追行て。君達取返し奉らんといふに。清麻呂只世の中の任ざるを歎き。又人の縁しの變異を思ひ遣らし。まづ金石が痛を看病に漸息つき出で。まづ申さん都の追手の事迫れり。如何てか此處に隠れまさん。此夜何方へも忍ばせ奉らん。事はしかくゝに迫れり。此般は父が繪の精力も及がたしと申す。さておのれはかゝる足痿にて御供仕まつりがたし。大太刀又是に候へども。これは君達の御跡を求めん。父は老ひぬ母は老ひぬ。如何にせんくゝとて立ち騒ぐ音の漏れ聞えてや。その御案内こそといふ聲して。壁を踏破りて入來る人は道首口足なり。清麻呂よく面知りてあるに。夢の中の人に。現にはあらじ。三尾が崎の騒ぎに押勝諸共。火の中に紛れ給ひしを焼たゞれたる首とて佐保の川邊に梟けたりといひき。かくては如何に長へ給ふと問へば。されば候三尾が崎の戦は。押勝思ふ旨ありてたやすく退き。太子祖王の御供仕り。伊吹山の麓まで参りしに。則押勝が兄の豊成は。過し頃浪花の海に入りて死ぬと承りしが。今は白猪老人と呼ばれて。伊吹山に隠れて候に。不意遮り逢ひ。是によりて。祖王もそこに忍ばせ奉り。押勝始めおのれ等は。かく太政官の印を懐にし。同志の人をかたらひ。只道鏡を討んことを思ひかけて候。かゝる上は御身の上も。金麻呂の上もいと迫りて侍るに。我御供申して共に伊吹山に隠し参らせん。又金石は面知たる人もあらぬに。おのれが弟にて候といひふらし。我暫し旅ゆきの間。家を守らせ置さふらふと聞えおかば。此處の人何か怪しみ侍らん。さる間に湯にひちて。脚だに立ば御妻子の御跡求め給へ。さて大太刀は刀自君姫君の御行方を求め。行逢ひ参らせしその上には。ひそかに近江路に御伴ありて。伊吹山の麓に胡麻呂といふものゝ家あり。其處に至りて山路を訪ひ。豊成が隠れ家に登り給

へ。かく申はしにも時移りぬ。はや御伴申さんといふに。人々はたゞ夢の心地に。いざやとて出て行くを。金石兩の膝を撫みて。かひなく口惜しく思へど。詮すべなければ。大太刀に向ひ。我少しも脚立んするときにもならば。如何様にもして追ひ着かん。汝まづ加太の浦を差して行くべし。彼荒坂にて騒のとき山賊どもが詞のはしには。加太の浦邊ときこえつる事あり。しか心得給へといふに。飛鳥の大太刀。巨勢の長谷ともに何事も心得つといひて出ぬ。こなたは怪しき旅人の姿に驚し。よろづ金石にはいひ置て出ぬ。

本朝水滸傳卷之七

第十三條

忌部宿禰海道。跡見武雄同じく武荒の兄弟に逢て。清麻呂の妻子を救ふ。井に三人ともに清麻呂の捕れを救ふ

忌部宿禰海道は。押勝に別れ伊吹山を下り。姿を卜者に窺し。和泉の國まで参り着きて。船を乞ひて渡らんとしけるに。汐占を考へたれば。爰ゆ渡らば事あらんと見ゆるに。何處より渡らんと又潮占をみければ。紀伊國に行きて。荒坂の津より渡らば幸あらんと顯れたるを。只占に任せて荒坂の津に向ひて行くに。その日も暮しかば船屋を問ひ。土佐の國に渡らん船やある。我も乗りて下らんといへば。船屋のあるじどもが。この風暫しあらば下りにや吹らん。今は横様にて追ひかたし。暫し爰に待せよ。又飯など参るべくは。此處にはさるものはあらず。是より一町ばかり南の海邊に。はなれたる家の侍るは。さる物を旅人に賣る家なり。其處に住きて物喰ひて待せよ。風直らば迎ひ参らせんといふに。さはそこに行て待べし。よき時にならば告おこし給まへとて。包などうちかたげ南を指して行ば。いひしあたりに家の侍る。家はいと大きくして門には馬など繋ぎて。旅人めくものいと多く入り居たる様なり。扱軒には燈をかけ燈のおほひには一膳飯あり。温飧蕎麥あり。酒あり種々の魚ありと書き。又ひとつには熊野屋とふ三の文字を太く書たるを。これも火を燈して軒にかけたり。宿禰笠を提げ包を負ひ。物喰んとて入れば。竈の煙立ち滿て。誰ありとも見分かず。馬奴にやあらん水子どもにやあらん。いと多くおり居て物食ふに。許し給へくとて通れば。主人めく男。旅人が此方おはせ。そこは烟籠ていふせからん。便船を待たまは。程も待らん。此方一間に入りて暫し休み給へといふに。草鞋をぬぎて簀子の下に押入れ。裳を少し下して行くを。つらく打まもりて見る人あり。宿禰

は心なければ。願もせず。一間に入て火桶に炭火なども來るに。差向ひてうちあぐみ。いと寒き夜を温飧たまへ。たゞ暖かに盛りて出せといひて居るに。うち並びたる一間の。怪しく圍みたる中に。旅人にやあらん入居たり。さて静めて聞けば。女の聲にていと哀れげにひそめき泣を。何かと思ひて聞るに。端々打聞えなどす。都の女なめり。遠き旅寐を苦しうして泣ならんと思へば。いと高く泣出で娘などの聲にや。自から一人おくれ奉らんや。如何なる海の底にも母君の御供。仕つらんといふなども聞ゆるに。愈床しくなりて和ら差寄つ。耳を直向にむけて聞ば。清麻呂の卿の御上など聞えたるに。さてこそと思ひ。小便に立さまにしなし。火をともしてつと行かゝり見れば。よく見覺え奉る御方なり。此方をも怪しとばかり見おこし給ふに。なほ正目に見れば我主押勝の御從妹にて。粟田朝臣の御娘にておはすと思ふに。其後清麻呂の卿の御妻となり給へるよしを思ひ出しかば。近く参りてこは如何にしてかゝる御有様なりける。君まだ若くおはしませしける頃。田村の館業なりにもおはし給ひしが。やつがれ御まのあたりに見奉りき。その後和氣の御家に入り給ひて後も。我主の殿にはおはしませしける。やつがれは惠美押勝が家人にて。忌部宿禰海道にて候へ。御有様委しく語らせ給へ。随分々々御仕へ奉らんと窃やかに申せば。泣そぼち給ひて。如何にもよく其方の面は見覺えて侍り。さこそ聞給はめ。我夫の君宇佐の御使の後。種々善らぬ事に苦しみ給ひて。剩へ御行衛知れず侍るに。不意金石獵野が情にて。御跡を覓て参りしに。荒きみ坂を越るとき。おどろろしき人に逢ひて。我を案内せし若人二人はその鬼に殺され。頼む方なくて隠れ居しを。これなる姫と我をその鬼等が肩に負ひて。山を行き谷に下ると覺しが。此家に連來り此一間に入れ置て。おのれらは何處へか行つるに。如何に淺猿しくてはふれ侍らんより。此所は海邊なれば。我は海に入りて死なん。此姫は老先も侍れば。世に堪へ忍びて長へ給へ。天には神在り。地には又父在り。命だにあらば逢ひ給はん。又父君に逢ひ給はば。母は荒磯の巖を枕にと。聞え奉れと申聞せて候ときなり。其方は又如何にして。怪しき卜者の姿と成て此所には如何にしてと問ひ給ふに。身の上語り奉ら

んには時も移りて人恐しむべし。かく逢ひ奉りける上は御後安かれ。御夫の君にも逢せ奉らんなど諫め聞え奉りて。さてその鬼と宣ふものどもは何處へ参りてと。いふが後ろに疊をひしりと踏み鳴らして入來。親子の君は此宿禰をも喰ひ殺さんと覺して消入り給ふに。二人の荒雄等禮儀正しくして忌部宿禰に向ひて曰。かゝる髪かゝる衣かゝる姿を見給はゞ。俄には思ひ出給はじ。おのれは粟田朝臣真人が家人跡見人成が二人の子になん。やつがれは兄にてすなはち跡見武雄なり。これは又弟にて跡見武荒にて候が。天性剛力にて候まゝに。武士の道を忘れ。只山に入て熊をうち。里に出て人をあやまち。年頃慾につかまつるを。父の人成思ひ捨て。上に訴へ我々を逐やらひけるに。かへりてそれをよき事と思ひ。世の業も侍らねば。あらぬ名にかへて熊野の山に隠れ住み。往來の旅人を驚ろかし財寶を奪ひ。衣裳を剥て其を酒にかへ米にかへて。道なき命を繼ぎ侍るに。不忘荒坂にて過し夜此君達の通り給ふを。我故主の御君達とは夢思ひかけず。痛く驚ろかし奉り。又御供の若人も二人ながら打倒して候に。一人は痛く振舞たるに御命も侍らじ。一人は脚を打折たるまゝに捨て候ひしが。如何になり給ひけん。さて君達の深く歎き給ふを痛く慙し奉り。此處まで負ひ参らせて侍るに。さいつ方逃出給はんなど立騒ぎ給ふとて。御懷中より落たる文の侍るに。讀て見しかば。清麻呂卿の御手にて。細かにかいつけ給へるを。始め終りを讀み果て。兄弟共に大に驚きては候へど。今更かゝる身の上なりと申詫んも。此姿にてはよも誠とは承引たまはじ。梳らん家に行て先づ髪を結び。衣裳などもかい改ため容姿を正し言をあらため。よく聞とりおはしませさん様に聞え奉るべしと思ひて。彼處に行て兄弟申合せ侍りける時。その入來り給ひつるをよく見知りて候ほどに躊躇しが。そこには願す過ぎ給ひ。先刻このひと間に立ち忍び。姫君達とひそめき給ふを。明白に立聞ぬれば。いよ、我も落居て。いな、今此姿にてま見え奉るとも。宿禰かくておはせば。御執成し聞えたまはらんと。かく出て身の上を聞え奉るなり。君達罪許させ給へとて詫れば。さは鬼にてはあらざりし。思ひかけぬ事ぞ。此上は卿の在します方へ。負ひて参れとのたまはす

るに宿禰も久しく絶たりしを語り出で。かゝる上は御仕への忠誠を盡したまへ我も外ならぬ君達に在せば。如何ばかりも御仕への事は承らん。さは夜の紛れにも御輿をものし。温泉におはしつけ奉らん。山の案内は頼み参らせんなど。いと頼母しく聞ゆるに。愈々君達の落居給ふに。三人の者も勇み立て。先食物など勧め奉り。御輿の事物し歩くに。何かあらん只今公けの罪人参り來とて。人立ち騒ぎ先には鐵杖を引鳴らし。松繼立て大道を照らし。多くの守部左右を圍みて。今夜は此津に罪人を伏させ。明なば山道を指して都の方へと聞ゆるに。誰にかと聞けば。和氣清麻呂を紀伊温泉に捕へて。都には將て参るなりといふに。君達は。たま、朝露にきほひ出し初花の。忽ち照れる日に萎る如く。こは如何にとからぶれ給ふに。跡見の兄弟諫め奉りて。君此處に宿らせ給ふぞ御縁しの盡さる祥なり。我々兄弟に宿禰を加へてあらば。たとへ敵は岩にて候はゞ手握り持て打碎き。敵又鐵にて候はゞ。脚にかけて踏たたらかし。清麻呂の卿をばいと安く奪ひ返し奉らん。後安く覺してよ。只今逢せ奉らんを待せ給へといひをはり。兄弟立ありきて罪人宿らせたる家を見置き。夜の更るを待ほどに。君達心許ながらせ給ふに。宿禰一人御見扱ひに聞え置き。兄弟身を堅固しめて太刀をわきばさみ。八角の杖を横たへ持ちて。その家の裏方至り。高垣を跨がり越て世學言戸を押破り。板敷をどと踏に。守部とも目を覺して。盗人ぞあれいで起よ。罪人を願みよなどいひて。太刀を取て立合ふをば。柄だにも取せず。手を打折脚を打をり。腰をくちかし肩をひづませ。頭を裂き胸を打破つて。見るがうちに三十人ばかりを殺せば。主どもは皆逃出で。守部ども、生き残りたるは垣を破り溝を潜りて。罪人の輿は捨おき。暗に紛れて走り失せぬ。兄弟辭かによりて。今は誰をか憚らん。彼處は人集ひて喧しきに。汝行て君達と宿禰をあともひ奉りて爰に來れ。さて参り給はゞ。君達はいと少さく在しますに。此御輿へこそり乗せ奉り。我々して昇き参せて。まつ眞熊野の山道に入らん。急げしかせよといへば。弟なる武荒脚とくしてかしこの家に馳行き。兄弟思ふ儘に仕りおほせ。清麻呂卿をいと安く奪ひ返し。即ち其處に置奉る。又守部どもをば皆殺しに殺して

候に。今は追ひ來る人も侍らず。靜かに眞熊野の方に御供仕つらんといふに。宿禰も兄弟が勢ひを稱へ。君達の御手を取り、急ぎて在しませ。さて輿の鍵どもを押切り。清麻呂を出し奉れば。君達にしましぬるか。いひて。巨勢金石が踊り出たるに。君達も呆れ在して物も得宜まはず。金石二人の荒男を見て。汝は荒坂の盗人よ。よき時に出合ひぬとてかい／＼しく裾を卷あげ。君達を後に在させ。眼を睨らしまくり手にして立ば。君達彼等は鬼と思ひけるに。自には故あるものにて。その後はそこばくの心を加へて給はりぬ。又これなるは押勝の君の御家人にて。是又他人にては在さず。さて御身のかゝる様は如何なる故ぞ。夫の御君は如何に父君は何處へぞと問せ給ふに。金石しか／＼のよしを語り。卿いと平らけく道首口足御供仕り。伊吹山に在しませ。さてやつかれ一人温泉に残りて。見しる人もあらねば。うち膝行て二度三度温泉に濕て候に。もとより深き病氣にもあらず。忽ち愈りて。脚は元の如くなりしに。今は姫君の御跡を覓め奉らんと思ひて。先きの夜一人寐て候ひしに何人にかあらん。表裏を圍み。繼松いと明くして。先づ案内せる男と覺えて。我家の軒に立そひ。此山にて脚なへの男を捜し給ふことあらば。只此男一人にて候。如何にも都方の男にて侍るがいと脚なへて候へば。脚の筋がな抜れたる人ならんなど申し。先これまでは御案内申たりといふ聲するに。又守部が聲と聞えて。さる上は清麻呂に極まりぬ。何にもあれ家を打ち破り。込み入りて捕んと聞ゆるに。下官思ひ繞らして候は。卿山道にかゝりて落させ給ふに。追人參らんは後ろめたし。さは我此處にして彼等に捕られれば。さる騒に時移らん。しかは御道在し給ふにも障りなけん。愈々愈深く引被き。頭をも物に包みて蹲まり居しに。守部ども戸を打放ち。壁をうがち入り込み清麻呂を召捕れとのりて。我を引立しを。脚を覺へ腰も立ざる様に振舞ひしかば。いよ／＼清麻呂なりなどいひ騒ぎて。そのまゝ輿に打入れ。嚴しく守りする様に見えて。爰までは連來りぬ。さて人々の御物語は山道に休らいて承はらん。先づ急ぎて熊野道へといへば。宿禰柄みじかき筆をとり出で。懐紙に書つけて。金石に興へていはく。確かなる御後見の侍るに。今は心安し。おの

れは天下の御爲に。公役を承はり居れば。これより直に土佐の國へ罷り下らん。兄弟二人に金石を加て。君達の御供を申さすよしを此文にかい認めぬ。これを懐にして伊吹山を指して急ぎ給へ。まさきくあらば逢ひ奉らんと。互ひに袖を振りあひて分れんとする時。明日香大太刀巨勢長谷。山の小道をたどり來るに金石行き逢ひて。事はよしゆく／＼語らん。いざ山道にとあともひ入りぬ。

第十四條 海邊鯉劍術を教ふ。並に奈良麻呂を立て大將とし。徒を集へて白山に登る

越の國白山の麓劍の里に。劍術を教へて海邊鯉と稱らるゝ先生あり。其徒學びせんと入集ひてあるに。先生其場に立て。教ていはく。太刀はそれ人を伐る物にあらず。身を守り敵を防ぐべき物なり。たとへ黙止がたく人を斬るも。只だ其本を伐て末を伐らず。本を斬るときはその人を生捕て。事を正し命を助けて。我死を免かる。是その身を守るに當るなり。さる心を得るが教なり。その業を得るは習はしなり。その本末を辨ふるが傳なり。爰をよく學び得給へとて。先生自ら木太刀をとり。頭より高く振あげていはく。是此太刀は人を斬太刀なり。身を守る太刀にあらず。徒よく習ひ得よといひ終り。又太刀を直にさしのべ身をひとへにし。脚を集めて立ていはく。是はこれ身を守る太刀なり。かく差し延べたる太刀の名を青岩といふ。たとへば青岩の堅固を前に支へて立が如し。人これを窺ひ難く。又碎きがたし。爰を以てしか名付たり。扱又その本を斬りてその末を斬らざれとかや。本は何ぞ凡太刀を握りての上は。只是五つの指ぞ本なる。仍而その指を伐り落す。これをその本を斬るといふ。又その指を伐り落すも。一度に五つの指を切落すとな覺ぞ。五度太刀を振りて。五度にその五つの指をきり落すなり。又十太刀振らは十の指をなん切落すと覺せといひ終はり。又長き太刀を左右に打振り。電光の如く閃かし。飄の如くに振かへし。雨の如くに打掛け。雲の如

くに遮らし。風の如くに打鳴して曰く。是は又守りを破り敵を追ひ。備を崩し前後を防ぎ左右を防ぐ。天下獨往といふ術の上の極みなり。是等を習し得て。始て太刀は斬るべきものにあらず身を守るべきものなりといふ事を覺すといひ終り。汗をうち拭ひ扇をひらめかし。袴の前を撮み出し。上坐に着て開き居たり。徒開終り習はしをはりて。禮を正し烈を整へわが先生に謂ていはく。やつがれ等先生に向ひていと畏こけれど。願ひ奉る旨ありて。一條の願文を書認め。各懐に仕つりて参れりと。先小松藤見松任足日などが。恭しくも出て出づるにつきて。その徒五百人ばかり。各懐に願文を差入れて。出ては先生の前に差置き。出ては又差並ぶる程に。その文眼前に堆高くなりぬ。先生眉を揚げ眸を揚げ。面を靜に繞らして徒に向ひていはく。これは何事とも覺えず。されどかく一時に物したもふからは。事は同じ旨ならんなどいへば。徒一時に蹲りて。先生の宣ふごとく。願ひの旨別異にあらず。各申あはせて候といふ。先生聞得てさらば徒の頭たるにより。まづ藤見が文を讀て。その次も皆その故を知るべしとて。その文を開らくその文にいはく。

やつがれ 小松藤見 恐惶謹て申す。先生の恩の山ゆ高く海ゆ深き。今爰にあらためて申さんや。やつがれ承はらく。白山の西の山邊に。醜の盗人さはに住居て。往來の人を切殺し。財寶を奪ひ衣裳を剥ぎ。又然らざれば連行きて。おのれが徒黨に加へて召仕ふといへり。又その盗人の張本ありて。劍術人に優れ。是に逢ひて立合ふもの勝事更に叶ずといへり。やつがれ等先生の教を蒙りてより。身に鉄の櫛を並べ。心を坐磐の窟に置き。夜行くも晝行くが如く。晝行くは猶虎に乗るが如く。かゝる心を備へ。かゝの身の術をもて。さる曲者が控にするを。耳に聞流してんや。先生許し給はじ。僕参りて打殺し。往來の人を安くし。その邊りの村里を穩めまくほりす。其御許しを願ひ奉る旨は是なり。

と書とむ。先生讀終り。又その次なる松任足日が願文を讀むも又同じ。先生徒第に向ひ。面を赤くし眉も眸も

なほ高く擡げて。腕を張り出し。臂を張り起し。手は腕の上に乗らるべ。身を築だて一塵に打見や。いたく驚て曰く。徒多くの月日を此場にあひ通ひ。我教を受け。習を傳へ術を習はし。氣を練り手を馴し。我はと思ひ揚り給ふべきが。徒の頭たる小松藤見松任足日といへども。未だ我に勝こと能はず。その次なるは猶此二人に勝事あたはず。さて愚者の事は我先早く聞けり。彼が人を切殺したる。その數我が耳に入だも三百ばかりの人なり。かく教ふる我といへども。未だ生人は一人たもはなち打ず。まかば愚者はよく生る人を斬りて。その危き境ひを馴したり。我は今徒に申ごとく。只木太刀をもて。さる心を馴したるのみなれば。いかで彼に勝ん。いはんや徒の人々におけるをや。かゝる願は自ら手脚を縛りて。猛虎を打殺さんといへるにひとしく。石を抱て深き淵の薄氷を渡り行かんといへるに同じ。危きかな危きかもさるにても。思ひ得ずは。彼愚物に立抗ひて。二つなき命を失はんより。今夜大野に行きて此願申出づる。徒を集め。真劍をもて太刀撃せん。我もし徒に打れたらば。いとかひなき先生なり。果敢なき先生なり。何ぞ先生といはん。これまで年月を上坐に居て。人々の敬禮に偶ひつるは。是又欺けるなり。徒また五百人にもあれ。残りなく我に斬殺されば望たりなん。如何にとなれば。兎も角も彼盗人に奉れる生命なれば。我手に死なんはたりなんといふなり。いて今夜白山の麓に出て。大野の原に我詣べし。人々來りて立合ひ給へ。もしさらずば此願は本心ならず。濫りに申出せるなり。又さる濫りなる事にあらば。何ぞ徒とせん。かく申し放ちて候うへは。思ひ返して何ぞ許せん。今より人々まかん出て。私によく馴らして出合ひ給へ。我行きて彼處に待んといひてつと立ち。長き太刀を抜き。人々にも太刀を抜きはなち給へといひて。一人々々に向ひその鎧をうちあて。打鳴し終りていつて曰く。是はこれ誓約なり。昔天照大神武須左能雄尊に逢ひたまひて。劍と珠とをもて誓約給ふは我御國の例なり。心得給へるやといひ終りて入りぬ。徒大きに思ふに遠へど。かゝるからは我々も武士なり。習ひ得たる先生の恩を仇をもて酬ひ奉らんは。かへりてこれ我先生の御心ならん。いて此夜その所に立出ごんといひて各々退出けるに。その夜酉は

かり薄雲ふりをやみて。月のいと寒くさし出たるに。先生身には鐵衣を着。頭に甲の鉢を皮もて包める頭巾を着。手に手纏を隠したる布の手結し。脚絆をもしかして。皮の沓をはき太刀を懸佩き短かき太刀をば帯に挿し加へて。いひつる大野に立出つ。山風吹き當る大葉樞の森の。東の陰に立添ひつゝ居れば。藤見足日の二人を始めて。心々に装ひ。思ひくゝの太刀を佩て此方さまに立向ひ來。さて先生は何處にか立出で在すらんと。思ひ窺ひてとみにも進まず。暫し躊躇て歩み來るに。後ろの山の邊より小道を下りくる人の。面を塗り黒き裝束して。長き太刀を懸佩たる男の出來。聲を低して。我先生こそ待給はめといふ。先生願て今宵は如何にして遅く侍りし。今日なん我徒かゝる願を申たてしを。時こそ來たれと思ひて。豫て思ふ様に申し聞せつ。かの軍兵どもは參り集へるかといへば。今來つる男答へて。後ろの森の蔭に皆參り居れりといふ。よしさらば打ち合はん。志し弱ものは眼前に斬り殺すべし。又其術はいたらずとも。志しいたり心猛きものは。かの軍兵に縛り捕らせん。いざとて先生太刀を提て行くに。物の蔭より小松藤見候と名乗て。一番に進みて打かゝるを。心得つといひて暫し打合ひつるが。太刀をすり落されて立惑ふ所を。伏たる軍兵一人三人馳せ來り。捕へ縛り口をふさぎて連れ行きぬ。次に足日と名乗りて駈け向ふも。またさの如くして連れ行きぬ。さて駈向ふものは一人も疵つけず捕縛り取り繋ぎ。先生疲れたる時は。後ろの男立かはりてふかするほどに。三百餘人は捕へ得つと思ふに。纒に切り殺したるは三人四人に過ぎず。さて残れる徒は道がに退ぞかず。皆太刀を投捨て頭をうなだれ。手をつき尻を高くして。我先生々々大に誤りを聞え奉るとわぶ。時に後の軍兵を呼び出て。皆その太刀をこひ取らせ。捕縛りたる人を引出させ。まづ左にあぐらをかゝせ。後の男を据まらせ。我はかたへにさむらひて徒にいづて曰く。各志しいたりいと頼母しきかな。さて左のあぐらに据まらせつる人を。誰とも知らじ。我徒に告分きて申べし。これは左大臣橋諸兄公の御嫡子には御はす。御名は橋朝臣奈良麻呂卿にておはせり。父君賢す旨ありて一首の歌を殘し。此北國の山陰に陰れ在し。

今の御名は井出の諸兄。名の御名は根齋麻呂と稱へ奉る。父君は君臣の禮を盡し。君道鏡を愛て給ふは。是君の御心なり。臣老ずあらばいかさまにも。時を待て奏し聞え奉る旨も侍れど。顯身の息の中には。大御心を窺ひ奉りがたし。さはとて官位に侍りて。かゝる横様ことを黙止しあらんやと。只何となく山に隠れ。今はたゞ雲霞にまじりて。薬をおとり食ひ。水を飲て。人の世の中を背向にして。菴にだにもおはしませず。是はこれ御父の御心なり。又是なる奈良麻呂卿は。我は是正男なり。如何様にも道鏡を退けて。天下の民を撫んとたまひ。御身をいたく寔し。此白山の山の邊にかぐるはし。唯よき正男を得てんことを覺す。我さる御人ともしらず不意行合ひ奉りて。互ひに深き心を明し則ち此劍の里に栖を定め。月頃心を碎きて千人に及ぶ徒を得たり。さて我名は海邊鯉はかりそめに呼べる名なり。誠は惠美押勝が家人和示部眞太刀なるぞ。晝は徒に劍術を教へ。夜は此山の邊にかぐるひて。姿をかへ面を扮し。此卿と心を合せ奉り。多くの軍兵をなづけ得て侍り。さて汝達はかく召捕たれば。命はこれなきものにあらずや。さらば今ゆ身を無ものとして。我願ひを助くべきや。我願ひ私にあらず。唯天下の民を思ふなり。又さらば眼前に首をとりて。此君の御軍を祝ひ奉らん。我徒答へせよと勢ひに乗りていへば。徒唯涙を落して。おのれ等いと賤しといへど。天下の百性なり。民を覺ぐるは君としも思はず。民を撫て給ふは我君なり。道鏡政をとりて民をありとせず。その恨み何處にか酬ひん。今日より君の軍兵なりといひ終るに。奈良麻呂大に欣び給ひ。眞太刀も恥み知たる者共なりと稱へ。かゝる上は軍兵を將て此君籠り在す所あり直に參れとて。奈良麻呂眞太刀馬に乗つて先に歩み。軍兵等後ろに立ち。ともから又相加はり白山の麓ゆ遶り登る。

本朝水滸傳卷之八

第十五條

二人の大將軍軍兵と徒を將て白山の窟に籠る。井泰澄法師兵糧の事を謀る

神奈月十日ばかりなりける。山の麓にすらあるに。半あまり遶り登れば。林の木葉のこりなく降落て。谷の八十隈はいたく氷こり。岡の彌千峰は雪高く敷て。夜嵐寒くふきおろすに。梢は枯れて鳥やとらず。松はたれて溜いはひ臥ぬ。行々岩根を踏つて馬つまづけば。大將橋奈良麻呂馬より下り給ふに。和示部の眞太刀も同じく下りて。高坂に息つきなづみ。横山に佇立み息ひて。後方を遙かに見下せば。軍兵五百人あまりに又さる勢を加へたれば。只大空にはひ登る龍の。雲の彌重むらにうごめくにして。左に遶り右に連なり。山道の雪を踏みさけつ。捧る鉢はしもと原の如く。うちあへく息は朝霧の如くて。漸々と登りいたるに。洞を家としたるを。巖もて閉せる門方に着く。軍兵多く出て禮儀をなして。大將を迎へ奉るに。かくばかりの人の居べきくまもあらじと思ひて。追ていたるものは門方に立ば。皆此方へとあるにつきて入りぬ。さるは今此上に百千人を加ふるとも。こぞり居べしとも覺へざる洞の中なり。又洞の外の方には。大なる釜百口を備へて。粥を煮て人々に向へたり。夜明もて行に此上なる岩屋の中より。としては七十歳ばかりに見えて鬚髮雪なすをしたれ。面は節木なす枯びたるが。身には佛の衣を着。手には銅の鈴をふり。脚には黒きうけ沓をはきて。下り來りて二人の大將に告りて曰く。軍兵すてに千人に越ぬ。軍はそれ天を頼まず。地を頼まず。人を頼まず我を不頼といへり。汝達千萬の軍兵を集むるは何ぞや。千人もし一人の心ならばよけん。千人もし千人の心ならばもとなやと聞ゆるに。二人の大將聞得てよく試みてさむらへば。此上の勢は唯加はるに任すべし。しひて覺べからずと申合せて憚りと申さす。老人聞て。かゝる山籠りにおはすれば。糧のことをしもいと難くし給ふべきに。おのれ只今より越中國に參り。國の守大伴家持に逢ひてその糧の事を物せんと思ふなり。早からば五日ばかり。久ならば十日ばかりのうちに。必ずその糧は送り參らんと聞えて。靜かに山を下りておはしけるを。今參りの徒見起しつゝ軍兵に向ひ。彼はなぞの老人ぞといへば。彼は則此岩屋をひらける泰澄法師にて在せりといふ。さては泰澄なりける。此法師ぞ太子の御祈の師と承りて侍るが。天下の氣を考へ。必ずよからぬ人いて來なん事をさとし。暫く此白山の岩屋をひらきて。籠り在すとあるは。風の音の微かにぞ聞きつる。いと貴き異人やなどいひあへり。さて岩屋の中は。弓を削り。箭を作り。太刀を磨鋒を磨きて。さるべきをぞ待居ける。

第十六條

大伴家持泰澄に逢ふ。井家持が放てる鷹を諸兄すえもちて返し給ひ。糧を白山に送らしむ

守大伴宿禰家持卿は。大君の御言畏こみ。深雪降る越と名におへる中つ國をなん任られけるに。國の政務に暇あるときは。布施の海邊に立あさり。あるは立山の方に獸を獵。あるは麻都太要の濱に鷹を放ち。又其暇は歌にかゝりて風流に心をなごし給へり。比美の入江も水草枯て濱風寒くなるまゝに。水鴨いとさはに集りと聞き給ひて。守ますらをの伴を誘なひ。今日は比美の江に鳥狩せばやと。手放れよく。馴て遠もやすき。八形尾の大黒とふ鷹に。尾鈴とりつけてかいつろろひ。鷹飼の太波禮麻呂ぞ。馬に立添ひてとりすゑたり。さて多古の島邊にかゝりて。芦鴨集きて侍るを見つゝ。太波禮麻呂芦陰に立しぬびて。尾鈴玲瓏に放ちやれば。水鴨は羽きりて飛あがるに。群たる羽風にうち驚きてや。鷹は横様に飄へり。風に向ひて空にあがり。二上山を飛越ると見しが。雲かくりつゝ翹り失せぬ。守馬を馳せて呼び返し給へども歸らず。太波禮麻呂は天にあふぎて打招きても詮方なければ。守は御心に火さへ燃て。思ひ

戀のみ給ひけれども。たどきを知らねば息つきあまり。今は物をさへ宣はて。馬を引返し給ふはしに。麻都太要の濱方ゆ。此方に向ひて怪しき法師の立來つゝ。暫し待せ給へといふに。御供仕ふまつりける人とりくに出で。守御機嫌あしき時なり。怪し様にて立來り給はど。必ず御怒りを蒙り給はん。いかなる世捨人ぞ名を告れと聞ゆるに。法師たちろかず近くいよりて。守は今大鷹を放ち給ひ。さこそ口惜しく覺せるならめ。我その鷹の止まりて侍る處を知れり。守もしそを得まく覺さば。我詞につきて尋ね行かせ。必ずその鷹に逢ひ給はん。かく申すは白山の道をひらける泰澄法師にてあるなりと聞うるに。守馬より下りて禮儀正しくして。是は大鷹にてますか。かくまのあたりに逢ひ奉りて。大徳なる事を知らざりしは。是正に眼ありて白山を見ざるといはんに均し。彼鷹は我命にて候へ。止め得ば何の幸か是に過なん。大徳早くその在所を教へ給へと聞ゆるに。然らば申へしその鷹は二上山を越え。後ろの山方の松枝に止りしを。その山の仙人手にすえて鷹の主を待にてさむらへ。是を得て歸らんと覺さば。御供は此わたりに止め給ひ。守一人鷹飼の太波禮麻呂を伴ひて。御馬を馳せて參り給へ。我能知る旨ありてかゝりとは申せ。さておはす道は松並植し木陰の道は平かに侍れど程遠し。此比美の江の浅瀬を渡り。岸に上りて田道を傳ひ。山にかゝらば小道のあらんに。馬を馳せ登せて參り給へ。さてその仙人に逢ひ給はど。仙人必ず頼み參らする旨あらん。守必ずなもだし給ひそ。畏しけれど天下の蒼生の上なり。我袖はいとせまし。守の御袖におほひたまはど。必ず蒼生は安からん。何にまれ急ぎ給へと教へて。鈴を西さまに振鳴して過ぬ。守いと驚しく覺して。泥障を巻手綱をゆるめ。比美の入り江をうち渡し。岸に上り田道を過ぎ。山にかゝりて小道を登るに。蹶り登る道のくまを行きつくして。峯のへを越れば。彼いひ教へつる向峰の侍るに。雲の浮橋もがなと思ひなれど。谷深ければ詮方なく。又下り又登れば岩垣うち重なる道のあるに。今は馬より下りて枯れたる葛のかづらをとり。伏したる小笹の枝にすがりて。太波禮麻呂に後方をおさせて。辛苦して這ひ登り給へば。かの泰澄の教へたるにやあらん。一株の松のこたれたる陰に。ひとつの亭の侍るに。

ち。身には木の葉をうち重ね着て。さすがに鷹は右手にすゑて。左の手に杖花を持てり。さて深くよりて見れば。頭は打ち顯したるに。髪は白金を打延て。たゞりにかけて組垂たる如く。眉髯は面を隠し眼の光りは肩を照わきて。金の如く輝よひたるに。守おもほえず頓首翁のすゑおはせるは下官が鷹なり。尾は八形にて名は大黒と呼べり。此鷹巢よりもりおろして手馴らしぬ。今まで政務の暇あるときは。朝鷹にすゑ夕鷹にすゑ。暫しも手より放ざりしに。けふなん不意比美の浦に鳥獵して。是なる太波禮麻呂が手よりあやまてるなり。さて如何にせんと思ひ詫て侍る所に。白山なる泰澄來り給ひ。かうく尋ね參れと教へけるまゝに。供をも召し連す參れるにて候へ。翁その鷹を我に賜へと申すに。翁うなづき給ひて。如何にも守の參りおはさん侍てり。さて安々此鷹を返し參らすべきが。翁が頼み聞えまゐらす事を。守承引給ふべきや。まづ一言の御契約を承り。さてその上に如何にも返し參らすべしとあれば。守は言さばに告らず。かく參りたるが直々に誓約なりと申せば。しかあらば申べし。翁かく深く隠れ居れるをさとし。白山の泰澄此鷹き此處に來り。我に告ていはく。今日なんかまへてかゝる事の出來べし。此國の守必ず此亭に在さん。さるとき守に頼み參らすべきは。天下の民の上なり。米を千疋の馬に負はせ。鹽を十頭の牛に負せ。豆を百人の人に負せ。早く白山の岩屋に送り給へ。如何にとなれば。天下の祈の爲に。千人の法師を集はせたり。そはこれその供養する糧なりと申きこえ。守もし承引給はずば。鷹をな返しそ。そのまゝに放ちやれと聞え置きて。何處ともなく罷ん出られしが。我泰澄が詞を忘れず。守に此事を傳へ參らす。此處ゆ御館に歸らせば。必ずしかし給へと聞ゆるに。守はいと安く諾ないて。鷹を左りにすゑかへしたれば。雲霧高く立ち登るに。翁いと輕げにうち乗りつゝ。天下の事は我いはじ。翁は橘諸兄にてあるぞ。忌。人にな洩らし給ひそと告りて。彌百重の尾上を踏わたり。南をさしてゆくに見しに。家持くしき思ひをなして。馬を打早めて歸り給へり。

第十七條

守大伴宿禰家持糧を白山に贈る并和示部眞太刀家持の館に來る

泰澄法師の教へに任せて。諸兄の翁に鷹を得給ひ。御館に歸りて思ひ遶らすに。怪しき人の有様なりける。何にもあれ誓約する旨は違へじと覺し。俄に使を立て召すに。椽大伴宿禰池主。大目秦忌寸八十島。裝束を整へて頼に來たるに。守大伴宿禰家持出居に迎へて告て曰く。けふなんしかくの旨あり。白山の泰澄はこれ太子の御祈の師なりしが。京師を退きて白山に籠るといへども。天下の民の爲には御祈仕つる旨あれど。狭き袖をば天下の蒼生に覆ひがたしと聞え。それんくの事を我に頼みつるよしを。不意諸兄の翁に逢ひて。法師の望を詳しくきぬ。さて諸兄の翁は今仙となりおはし。木の葉を衣とし。草をあぢはへ。雲を道とし山を家とす。さて我に別れ給はんとする時。天下の事は我はいはじと宣ひ聞え。みそらを渡りて去り給ひぬ。さはこの一言ぞ心あらん。又泰澄が諸兄の翁をもて頼み聞えつる旨は。百人の人に豆を負はせ。千疋の馬に米を負はせ。十頭の牛に鹽を負はせ。白山の窟に贈りやらへ。そをもて千人の人に供養て民種の上を祈らんとなり。我是をうけひかずは。放てる鷹を返さじとのたまふ。我爰にして思へらく。鷹はよし思ひ捨べき物なり。しひては是を得まくせねど。民くさの御祈とあれば。我承引ざらんやと誓約て。その所をまかんでしなり。此事故に似て私なり。私にして黙止もならず。汝達の御旨は如何にとあるに。池主八千島共に聞ていへるは。こはいかて黙止もあらん。たとへ重ねて公の御答めありとも。下官ら承引奉らんといいひて。御藏をひらかせ米を出し。豆を出し鹽を出し。すなはち秦忌寸八十島に察せ。人に負せ馬に負せ。牛に負せて贈り

やらふに。日に行き夜にいきたらはして。二日二夜の曉にいたりて。白山の麓に着ぬ。岩屋とおぼしきあたりは。野人に問ひ聞えて。八千島まづ馬を馳せ登せて行けば。山半ばかり行き至らざるに。多くの民ども迎へ來り。そが中には二人三人袴に布肩衣をうちかけて。太刀佩けるも迎へ出て。岩屋の道はいと峻しく。雪深く降積みて侍るに。御送の人を煩し侍らんが無禮ことに候へば。我々爰にて承はりはたし。御贈の品を受取り奉り。是の民どもに負はせかへ侍らんといいひて。千人ばかりの民を出し。米を負せかへ。豆を負せかへ鹽を負せかへて。釜を具へ湯を沸し。酒を暖めてもりをはり。かの太刀佩るが。懐より筆を取出て。一枚の證文を認む。その文に曰く。

泰澄法師天下の御祈仕ふまつるにつきて。千人を供養すべき糧とし侍る。米の俵二千丸。豆の俵二百丸。鹽の俵十九丸。白山の下にして是を負かへて受取り奉る。ていれば御祈の事足りぬ。即ち泰澄が家人小松藤見。松任足日。承引き奉る旨ゆめく違はず。よつて印をしるしてしかいふ

天平勝寶元年十月廿日

白山 泰澄

秦忌寸八十島主へ

とかいとめて出すに。八千島讀み終りて禮をなし。文を懐ろにしいるゝにいたりて。藤見八千島にいつて曰く。今度の御禮使を立て酬ひ奉らんと。守大伴卿へ聞え上させ給へと申すに。八千島承りをはりて。役の民に馬牛を曳せて歸りぬ。さて今般は四日ばかりを経て御館に歸り。守へしかくのよしを申しぬ。さて二日三日過るに。何方ゆともなく。馬に乗り銚を持せ。先を拂へる供人後をおさへたる供人。五十人ばかりを將て。身には裝束し冠したる武士の。守の御館の門邊に詣て來て。馬より下り案内を請ひて。禮正しく謂て曰く。我白山の岩屋より來れり。此程の禮を聞え奉らん。守御目を賜はるべしとあるに。御館の家人承りを申し。先此方へと聞えて。廣間の上座にとり迎へ。供人らは長屋に息はせて。さて入りて守に申すに。守又裝束し冠し出居に迎へて相見ゆ。武士禮正しくし

座をはひ下り。うなづきて申して曰く。下官は白山の岩屋に侍る。和示部眞太刀と申すものにて侍る。此度泰澄の御祈につきて。供養すべき糧を多贈り給ふ。難有まで忝けなき。下官御祈に仕ふまつる役の者なれば。頼に参りてその禮を聞え奉ると申すに。守きこして是は御禮に過ぎたり。天下の事と侍るを承りては。かく官にさむらふ我々。いかで抛には仕ふまつらん。殊更我愛し鷹を泰澄の教へによりて。容易く得て候へば。その禮又なからざらんや。いと遠き所をかく参り給ふに。御あるじつかふまつらんと聞えて。杯は酒杯より始めて。八百杯にいたり物は飯より始めて千盛に及びぬ。さて互に裝束をやつし。くさくさの物語ども聞ゆるに及びて。眞太刀硯を乞ひて此守を稱へる歌をよむ。その歌に曰く。

橋の下照庭に殿たて、酒みづきます是れの君はも

いとおろかに侍りとて出す。守いと嬉しがり聞えて。おのれ生れながら歌を好み。政務の暇は是にかゝれり。いで御答へ奉らんとして

酒みづく君によりてぞ 橋の下照庭にけふはなりぬる。

と詠ひあひて。互に心を和しあひけるときに。眞太刀守にいひて曰く。つきなき事には開たまはんが。世のちいと騒がし。守はまづ道鏡の法皇をば如何にか覺せる。守暫しみて答へたまはく。我にしてはいひ難し。眞太刀又問ひて曰く。太宰府阿曾麻呂は守如何に覺せる。守頼に答て曰くいと詔へり。眞太刀又問ひて曰く。左大臣橋の諸兄公は如何に。守こたへていはく。是は只だ時と老を知れり。眞太刀又問ひて曰く。和氣眞人清麻呂はいかに。守こたへていはくいと忠誠なり。眞太刀聞おはり。いと畏けれど鹽焼王は。不破内親王を伴ひ給ひ。祖王は内舍人を將て。何處ともなく隠くれ給ふ。此二王はいかにと申さん。守聞てこたへたまはく。いと深くして思ひがたし。思ひ得るも又云ひがたし。眞太刀又問ひて曰く。藤原惠美押勝は如何なる人ぞ。家持うちうなづきていはく。押勝は天下を思へる人なり。懽むべし。此歌ぞ天皇に奏しきこえ給ふ歌に

兒輩よたわゝざなせそ 天地のかためし國ぞやまと島根は

ときこえあけ奉りて後。近江の高島に退ぞきしとは聞しが。天地の時いたらず侍るに。二王も隠れ給ひ。押勝も首を佐保川に梟られたりと聞て。いとかないく口惜かりしといひて。覺えず涙を拭ひ給ふに。眞太刀近く寄て。暫し聞え奉りたき旨あり。御側の人を退け給へと申すに。守きこし得て目を以て示し給へば。侍る人々皆退きぬ。守とき眞太刀を寄せて久しくさゝやき聞え給ふことあり。その事は側に聞居ねば。何事にか知らず。さて御饗おはるに。眞太刀退出んとすれば。守暫しと留め。金三百枚をとり出させ。此度の御祈に具へ奉るとあるに。眞太刀少しもいなまで。その金を箱に收めさせ。供人をつとはせ。あるじぶりの禮を聞え終り。廣間をはひくだり。家人に禮をきこえ。馬に打乗りて白山をさして退出ぬ。

第十八條 清麻呂金麻呂手節の崎にて妻子に逢ひて。共に將て伊吹山に登る

吹山に登る

紀伊の温泉には。清麻呂金麻呂を怪しき輿に乗せ参らせて。道首口足雄々しくその後方に立ち。大道を往けば人しるべしと思ひ。道を眞熊野の奥にさし。志摩に出て伊勢道にかゝり。鈴麻の川を右に渡り。能保野を過ぎ焉野を過ぎ。玉倉部を越へて行んと。口足旅行をはかりけるにより。先づ眞熊野をも事なく過て。志摩國英虞の郡手節の崎に行たらはしぬ。爰は人しるまじき邊なれば。暫し息らはせ参らせんとて。一日二日ととまりをるに。清麻呂金麻呂が夢のうち。天照皇大神あらはれたまひて。汝等今一日此處に息らはば。二人ながら妻子に逢ふべしと聞えたまひ。又口足が夢には。汝此南の濱邊に出て待べし。明日の夕汐に泊むずる船をよくもとめ得てよしと。神告に告つき給ふと

思ひて覺ぬ。三人は一時に頭をあげて。天に仰ぎ地に伏して。御祥をたふとみ奉り。日既に今日と明けゆくに。三人身を淨くし心を清くし。御宮の方をたちをかみ伏し拜みて。口足とく南の濱方に出て。さるべき船や泊んと待に。時津風吹起りて唯此陸をさして浪の來よるに。神祥こゝに靈驗ありと思ひ。南の海邊に向ひて立に。帆はいと小さく。て篷深くふきたる船の。釣船ともあらぬが直に追ひ來りて磯回による。その外は船もあらぬに。いと嬉しく奇く思ひて。とみに馳せより楫取の翁に向ひて。此船に人やおはすと問へは。老父聞て人は一人もおはさず。荒坂の津より乾魚を積みて遠江の海に下るなるが。汐風心に任せず。爰によりて侍るといふ。口足近くよりて。老夫な隠し給ひぞ。我敵すべきものにあらず。老夫の乗せ參らせし人々を。救ひ奉るものなりといひさま。つとよりて篷をあげて船のうちを見れば。まづ金石ぞ乗りみたる。大太刀も乗居たるに。これは口足にておはすかとて。先づ船よりあがり。唯よき夢を見つるとのみなり。金石大太刀あらましを語り。武雄武荒の兄弟を呼び出て。彼方は押勝君の御家人にて。假に鼻彦とは名告り給へど。御名は道首口足にて在せり。さは清麻呂の卿親なる金麻呂も將て在さんなどいふに。口足昨日の夜の神祥を語り。さて清麻呂卿の御妻子はと問へは。船の中にてとく聞給ふに。いと嬉しみとはひ出たまひ。はや／＼逢ひ奉らんとあるに。口足唯神祥のあやしきを恐み。人々も濱邊にうちたふれて。神宮の方を拜み奉るに。楫取の老父はことを知らねば。此老夫によき虚言を申させ給へるとて呆れ居たり。さて手節の崎なる宿りをさして人々伴ひつゝ行くに。金石がいはいく巨勢長谷は道より御暇を乞ひて荒坂に參り。巨勢獵野がなきあとをかくし。さる事を妻子にも告げて祭りの事どもいたしはてなば。追ひて伊吹山に參り來んと申す。さて眞熊野の道にかゝりて。山道をしのばせ奉らんと思へるに。その日雪いと寒く降來。雪いと深くさへぎりたるに。山道の行方物憂し給はんと。覺えしにより。又荒坂の津のあたりに漁する浦方に行きて。此浦船を頼みかく渡りつきて侍ることを。まさに皇大神の御祥なりけりとて。語りもて行くに。旅の宿り近くなれば。清麻呂金麻呂迎へ出て。泣み笑ひみうちまほひて。そ

の夜はその宿りに越方を語り明かし。夜明けもて行くに。かく憂世を忍ぶ旅行には。誠に船こそよかめれとて。直に手節の崎を乗り出し。船を阿漕が浦に追ふに。風進み汐叶ひて。唯一時に追ひつけば。人々岸に登り興に忍ばせ馬に乗りなどして。五里ばかりの道をとく行く。さて能保野の原に至れば。清麻呂人々に告りて曰く。此野はむかし倭建尊。東の國より歸り登らせ給ふとき。此處にて御病ひの烈しくおはしますに。天下の民くさをおぼし。命またけん人は平群の山の能擲が葉を誓華にさせよと讀せ給へり。此平群の山といふは。大和の國なれども。此御歌によりてや。此尊崩御の後。おのづから陵のへに能擲にはかに生ひ出て。百枝忽に差し廣りしと昔よりいひ傳へし。さればぞその擲の葉は。彼の平群の山なるにかはらずと聞くに。人々小枝の抄を折とり誓華にさす。清麻呂の卿又いはく。此尊は明の宮の天皇の祖父の御神にておはしませば。是といひ彼といひ。直に御前をわたらんや。我此陵に手向して。願ひ思ふ事を祈り奉らん。人々も祈り給へとておの／＼陵にまうで。旅の事なれば大野の原の松が枝を折て。とりあへぬ幣奉りて。手にまける珠松が枝の手向ぐさ幾代までにか年の經ぬらん。また妻の刀自は。はしきやし我家の方ゆ雲の立來もと。國しぬびませる御歌を思ひ出て。此處にして家やもいづこ白雲の棚引山を越て來にけり。人々の手向の歌。又道行ぶりによみ出るもおほかめれと爰にのせず。さて夜にもなれば。むかし御墓づかへとて此處に殿造りて侍りし。波多の金森の子孫の。今は祝部にて。此處にさだかに住居しけるがもとに。宿りを乞ひてその夜を明かし。鴨又歸りまうして菰野をすぎ。それより美濃の國玉倉部にいたり。此尊御脚ひたしたまひつる清水の。今も猶いと清くてあるを。殊更思ひ出る事のあるに。蘆芽のあしなへし我ぞむかししぬばゆ

と讀みて。涙を拭ひ。遙かに宇佐の御方をさへ伏拜みつゝ。日も高くさし登るに。口足先きに立ちて。近き方はいと騒しけれど。早く伴なひ参らせたく思ふとて。しもとおしわくる道を行きて。伊吹山に登るに。此所もぞ雪寒く降りけり。武雄兄弟君達を負ひ。大太刀清麻呂を助け奉り。金石父を負ひ参らせ。口足はこの山道の御案内して霜降月の中の一日。白猪の老夫の大城に着く。口足先に参りてかくと申せば。祖王も聞きしめして。いとくめてたくおほしめされ。白猪も妻も出て迎ひたるに。金麻呂日頃思ひ戀し娘の。さながら老なみたれ。と白猪が妻はそれなりけるに。こはそぞろなり。ゆくりなしなどいひて。物語まづ他事なし。白猪もいと怪しきまで。その縁しを思ひつゞけて。事おほくいひ出べく思へど。まづ清麻呂のおはしますに。とりなし禮厚く聞え奉り。人々をも迎へ入れぬ。これらの物語はいふさへもあまり。かいつけんはなほそこばくならんに事そぎぬ。祖王清麻呂に御目を賜はり。彼が忠誠なる志を感愛給ひ。なほ金麻呂親子が志を稱へたまひ。并に大太刀武雄武荒も大まへに召し出させて。そのころざしの直なるをめでおぼし。又勳功の武きを稱へたまふに。巨勢獵野ともしらず過りて殺したるを。武雄兄弟悔ひて申す。祖王つらくに聞おはらせ給ひ。まづ暫しの息ひを許したまひ。白猪の老夫計ひきこえ。清麻呂妻子。并に金麻呂は爰にあらして。おほきみの御慰みを申させたまへ。武雄兄弟金石大太刀の輩は。尾張三河遠江駿河甲斐伊豆のわたりにさむらはせて。人の志を合せたまへとて。その月十まり七日。各印を賜はりて山を下りぬ。さても冬枯し奥山に。さむらはす人は姫のみなりしを。今はかく都人の入り集ませるに。祖王もうちにぎびておぼしめしける。

本朝水滸傳卷之九終

本朝水滸傳卷之十

第十九條 人置の眞鮪韓白の犬神金を分つ。並に弓屋の俊雄隱妻を迎ふ

武藏國豊島郡。大江戸なる神田のあたりに。弓を削りて業とするものあり。名を弓屋の俊雄といふ。さるはその削る弓工どもをいと多く召し抱へて。大なる長屋に住ませ。年には千萬の弓を造りて。國々の守に賣あがなふほどに。家は富榮て類ひなき長なりける。さるほどにおのれは業の事はしらず。唯人とまじらひて。酒のみし歌をうたひ。月花を愛で。遊び居事のみを事としけり。妻はいと嫉妬深くて。妻さまのものと見れば。いたく憎むすほどに。顔よき女は。此家に参りて使はるべしと思ふはなし。さるより邊りをたち振舞する女どもは。唯醜女のみを撰集てげり。かゝる事は彼嫉妬深き妻のしわざなりと。人みないひながしけるほどに。奉公人肝煎ものども。俊雄が家に仕はすほどの新参は。世の中の男に打飽れたる女のみを撰立て。さる時となればその家のみ押立て使しける。正月も過て二月の二日といふには。是等の國は召仕どもをさしかへ侍るに。さる醜女ども。兎角に妻の嫉妬におちて是等さへ差替らんといふにそのわたり奉公人肝煎屋の侍るが。その名を入置の眞鮪といふ。よく肥たる男なるが。家の表には札をかけて。給仕人承引所入置の眞鮪としたり。時にもなり侍るに。彼方を此方へ差替るも侍り。又奉公の年季終りて。親里に歸るも侍り。新参とてまうで來るも侍りて。二月二日三日になれば眞鮪が家は只だ女嶋とふ嶋の様に女ども入り込で。おのがじしいひさわざ。あるじが妻子は所狭く侍るに。籠のまへに下り居て。彼方此方へと物し騒ぐに。彼弓屋へつかはさん醜女どもをえりたつるに。いと可笑しくも騒がしくもあるかな。さて今参りとて來りし一人は。かしらいと細く。髪は短じかく。咽はふくらかにて。胸のいと高くさしはりたるに。腹はうちこけて。尻のかた

にさし出たれば。後は腰の上に棚をひき渡したる姿なり。裾も亦短じかくて脚はいと赤きが。先をば内のかたに踏ま
 げて。沓などぬぎおきたるは。八文字を見るばかりなるに。眞鮪打見て。よき女こそあれ。よく調ひて侍るは。何處
 よりはひ出たるぞと問へば。口をばいと細ひさくあきて。聲は唯咽の底より響き出で。我なみは此國にて。鳩が谷と
 申す里より参りつといふ。あるじ聞てよし。新参に参り給ふ所あり。入添て参らせんといふ。又次に來るは眉は
 へ文字にはへ埋れて。額の隈いとすくなく。鼻はおしたれてうちひらみ。頤はいと長く尖りたるに。姿はあまりな
 ればいはず。あるじうち見て是も又調ひつ。弓屋の内君はいかに愛たまはん。何處の人をと問へば。毛野の國駒田に
 て侍ると申す。さてその次に來つるは。色のいと白きに鼻の右左は紅粉引たらんさまなるに。腰は立白の圍みあるを。
 道がに見せじとて。帯いと廣くうち廣げて。結び居りたり。あるじみて是は少し調はざる所あり。色の白きが白珠の疵
 なりとして受ず。又次に來るは歳の程十七八と見えて。眉いと細く。眼皮艶やかにうち重なりて。鼻のかゝり清く。唇
 の紅なる。髪の毛いと黒く長き。面の白くきら／＼しきより。手脚の細やぎて艶深きに。姿の前後ろ調ひたるを白き
 赤き下重ねて。上には藤の花色に染たるから衣。唐織の錦の帯を房に結びたれて。歩み入るに。唯あたりなる女ど
 もは。雪のうへの山鴉よりもいと黒く。初花にならるる積穀のはりよりもいと怖ろし。主人打見て。かほどの今参り
 多き中に。かばかり調はざる女もあらじ。髪のためたき顔の美しき。姿の細やかなる詞の艶かなる。世の中にしては
 下照姫なり。弓屋にしては岩長姫なり。さて又そのもの宣ふを聞に都の人な。かゝる東國へは何しに下り給へる。さ
 るさまの人は。何處の守たちもほしがり給ふに。何方へも参らせん。さて名は何とかとへば。花木と申しさむらふ。
 さて歳はと問へば。今年十八にてといふ。京はいづこの人ぞ。都は狙澤の池の南に。年久しく住てさむらふが。さる
 事の侍りて。わなみの伯母なる人に連れて。遙けき道をくれ／＼と下りさむらふ。承り及つる長のおはすに。弓屋
 の何とやらん承りたる方へ。今参りにまゐりたく。人に問ひて侍れば。さる望ならば人置の眞鮪と尋ねて。頼み給へ

と申すに参れりといふに。亭主頭を搔て。俊雄たゞ一目見たまはゞ。いかばかりの祿なりとも。かゝる新参りはこの
 たまふべけれど。これ見たまへ爰の頬赤の腰白さへ。すこし顔色の白きに。調ひかねしと思ひて侍るに。そこをまゐ
 らせば。唯一時に内君の手にかけて。髪をひきむしられ。顔はかき裂れ。手脚はうちなやされ給はん。されどさる都の
 人の思ひかけ給ふ事なり。又俊雄にも垣間見に見させて。千年の命を引延て参らせんとも思ふに。先づ爰に入りおは
 せといへば。いつかばかりにも頼み参らすとて。奥の方に入り居たり。さてあるに韓白の犬神つと入來て。亭主おはせ
 るかといひてさしのぞき。是は花木もこゝにかといへば。さいつ頃より参りてといふに。犬神亭主に向ひて。此少女
 はおのれ都に侍りし時より。よく知れる人なり。いひもて行ばいとこのはしにもさむらふが。これの伯母子と連れて。
 此程下りて侍るに。何方へも御奉公と申す。おのれ知り給ふごとく。日毎に弓屋に入り居て多くの米をふめば。折々
 は主の出おはして。都の物語など申す程に。韓白とものたまはて。犬神／＼とのたまひ喚ひて。我をばうるはしき友
 と覺せり。今朝なん白屋に米踏て侍るを。俊雄おはして。我妹が嫉妬には爲方なし。かく富て侍るに。物の足はぬ事
 はあらねど。唯是ひとつの禍ひにかゝりて。朝夕醜女どもに立ふるまはれ。穢き色を見。臭き香をふるは。貧き
 人の。よき少女をほしきまゝに得給ふには。はるかに劣りたりと詫び給ふを聞て。おのれいと安く承引ぬ。さる内君
 の嫉妬たまふに。いかで御家のうちには仕ふまつらん。近からぬわたりに家を求め。此花木に伯母をつけて。隠妻と
 したまひおかに誰か知らん。その御計ひは。人置の眞鮪と申合せて聞え参らせん。さるにても少女をかいま見給はて
 はといへば。俊雄きかして。たとひその女の粧ひは。百いふ事を唯一つにして聞得んも。我あたり立ふるまふ女には
 優りぬべし。ことに都の少女ときけば。かいま見もせじ窺ひもせじ。はやさる筋を眞鮪と計らへ。金はいかばかりをも
 取出て。此事とみにはたすべし。けふは確屋に居な。はやく行けなどのたまふに参れり。おのれも近きころ京より下
 りてあれば。さる家もとめむ術も侍らず。又處の掟などはゆめもしらず。眞鮪よくものしたまへとてうち踞み居たり。

眞鮪これを聞てうち喜び。是はいとよし。近からぬ所といはゞいづべかよけん。葛飾の眞間のわたりはいと遠し。玉河の邊も亦遠し。さらば此わたりにせんいかになれば。よき家の侍り。かゝる事は近きもよからず。遠きも亦よからぬものを。よきほどのあたりなるに。庭は水せきいれて高樓めく所などもうちはれてはへるに。爰に定め侍らん間。其方には今一度弓屋におはせ。さて家は求めつ。何くれと調へたつべき物も侍るに。金をまづ百枚ばかり。此犬神に越し給へといふよしを。短く書付て出せば。犬神懐ろにして弓屋にいき。小娘の。事辨へぬがあるに。窃にとて俊雄が許へつかわし。我は碓屋に入て待ば。俊雄は園のべの花など見る様にしなして。庭の荒石をめぐりて碓屋に來たり。いとよし。その家に定めよ。その少女をも据え置き。伯母をも附置け。おのれは今宵参らんとて。金百枚まりを取て。是もて参れ。その外にも調へ立ん器物どもは。何にまれ密かにいへとて入る。さて人置のもとに歸りて。しかし調ひたり。今ゆそこと其家に行きて。塵擻はらひ。疊ども敷かまへんといへば。眞鮪うち笑ひて。その家はな明搔拂んにも塵ひとつだも侍らず。漸々昨日かおとつ日か。富人の立退たる家なり。その住める人は。文石の何蜘蛛かいひつるやうに覺えし。いと忌々しく賑ひて。人などもあまた召仕ひ。此わたりの守も及び給はぬ住居なりしが。俄に事もなく立退き給ひ。家は我にあとらへおきていかなる人をも住せ。と申し置て出たまひし。双六にがないたく打負給ひつらん。さるほどに家のいみじき道具のきらくしき。疊の新しき。庭の様の面白き。たとしへなき家の様なり。さて此金はさる家求めたり。さる器具もとめたり。さる庭の草木もとめて植つ。石などもとめて据つと欺き。家は我家なれば。まづ此金は百枚を我いたさん。のこれる十枚あまりは。汝が使ひしたる褒美にやらんといひつ取分つ。犬神なまゝに聞取りて。十枚の金はとりつ。さて花木に向ひ。かゝる幸侍り。伯母子も爰へといはん。所は何邊ぞ。人を遣んといへば。花木聞て。さは願へるまゝにて侍る。今暫し爰にて待つ人の侍り。又伯母刀自も。その人と伴ひて。爰を教え置きて侍るに來り給はん。先づ先に参り給へといふに。さらばその人に逢ひて事は

ば。下女どもに案出させて。伯母子も共にその家へ移り給へ。物荷はする事などのあらば。下男もそこにさむらふになどいひちらし。さて忘れつ。弓屋の内君は今参りをや待給はん。それ先に來給ひし鳩が谷の鳩女と毛の國の駒女と。此二人は内君の思ひ人なり。はや参り給へ。飯代は錢二百置きていかせ。そこにおはす頬赤腰白もつきて御目見申させなど。落なくいひおきて。犬神をあともひて立出ぬ。暫しあるに笠深く着たるわかうどの。いと高貴なるが。袴もきず。面ざしより始めて品様のいとたかきに。装束は立おくれたるのみか。世の中いと馴れぬ人の。彼伯母刀自が。年のほど四十歳ばかりにて。是もいと高貴なるが伴ひて。人置の眞鮪とふ人はこれにて侍るかといひて。太刀も抜おかずつと入れば。花木走り出て待参らせしにといらへて。手を取りてしるべし上坐に誘なひ。伯母の刀自でも打いらへなどして。彼今参りどもがたちみちたるに。いひたげなる事も侍るめれど。とみかうみて道かにえいはず。今暫しの程。御徒然に堪させ給へ。何事も申聞え奉り置ぬる通なり。さてみづから参る所は。何處なるかはしらねど。此あたりと承りぬるに。伯母の刀自ももて窃に聞え奉らん。さは歸らせ給へ。今まで暫しの御隔も仕ふまつらざりしに。今夜いかに淋しくおはさんといひつ泣く様を見て。頭は笠ながら打傾きて。鼻などうちかみ。何事もよく心得てあるぞと聞えをはり。伯母をば其處に置きて。しほゝに泣亂れて歸り給ふ様を。花木はつらくと見送り参らせ。伯母がまぐはせ袖引などするに。是も鼻うちかみて。さて待居し人にも逢ぬ。申事も果たれば。今はその家に参らんと聞ゆるに。下女は先に立てしるべしける。

第二十條 弓屋の俊雄人置の眞鮪訟す。並に高橋手力二王を救ふ。

人置の眞鮪韓白の犬神。先に参りて侍るに。案内の下女花木に伴ひて参りつるに。よくこそとて。石たてくはへたる荒磯につくり出せる殿の侍るに据を置て見れば。先に我家の怪しきに据をて逢ひつるよりは。いや増りに優りて。面さ

しのいと貴く。あてなるものいひ。立振舞るまでもいかなる大宮の皇女と申さんにも。又此上はおはさじと見るに。彼伯母といへるも。なみくの人にあらず。貴く生れ出たる様の侍るに。さるかたにはよく馴れたる人置なれば。犬神を一間に招きて。此少女平人にはあらず。そこには都より知りつる人ぞ。しかも従妹のはしなりといひしが。そこもうす踏みてあらん人も覺えねど。今此御人さまの位をもていはゞ。彼少女は神の御末なり。腹悪くなし給ひそ。伯母子と其方はその御仕人の類ならん。ていれればさいふべくもあるかな。さて此所の神は神田部止伎與と申給ふが。物がたくをはするにより。我々が業の上にも。人の身の程又生れし所聞に聞つくして。さて奉公人の爲に我も印を押し。事あしは承はらんといふ事を認むるなり。彼少女は今日なんすゞろにおはしたるに。誰をか頼み所とせん其方も都の人にて。少女が家も知り給ふとあるに。證文一通認めて出し給へ。おのれ又その上に印を加へんといふ。犬神聞いていと安き事には侍れど。我は文字を知らず。唯今とて書き認めん事はえせじ。よし／＼此伯母子はよく男手書き給ふに。爰に頼みて書い認めて。先おちいる事は落居ん。人置の先生視おこし給へといへば。をいと應へて玉を磨出したる箱の。墨いと薫りて細やかなるを。荒けく摺り延て。伯母子爰へと招きて。奉公人の證文を書き給へ。是は世のつねあるべき様の事にて侍れば。文言は我より申さん。夫にて書き給へとて。陸奥紙のいと白きを以て出で。さて申べしとて。何々一條一つに此妾の事といひ出せば。伯母筆をとめて。彼子は御仕人にこそとは申たれ。妾と申す御契約は。仕らずといふに。さはとてかゝる家を求め。多くの道具を調へしは。隠妻とあるによりての設けなり。妾にあらでは我々事の行ひたらはざるにて。俊雄の怒りに逢ひ侍る事なり。なに／＼もあれ妾と書き給へといふ。伯母の刀自開てさらば彼子もさる心にも侍らず。自からも亦さる事にてはさし添ひ難し。その上にも妾とあらば。かくては差置きがたし。さらば花木よ。爰を退出んと立に。眞鮪呆れて。さは我れ計ひ足す。是なる犬神も御怒を受て。重ては米も踏せ給ふまじきに。よき業の門を失なひたらん苦しかるべし。犬神何故にもいはぬぞ。おのれ

が俊雄を喰かし奉りたるにあらずや。今となりてなど黙然ぞといへば。犬神聞て。我は唯都少女の色好事をこそ申たれ。妾などの事は契約申さず。又此家等の事につきては。汝多くの金をいたしたるならずや。さるよき事したれば。其方こそはいかばかりにも計ひ給ふべき事なれとて。更にも立合すあるに。人置頭を掻き。眉を集めて。さるにても今夜俊雄の來れとの給ひこしつるに。さる事終てはことわりも聞え難し。いかにせん／＼。よし／＼まづ證文の上は御仕人と書せ給へ。その上の事はいかばかりにも計ひ侍らんといふに。伯母の刀自さらばそこより申給へとて。いふがまに／＼書いつけたる證文に曰く。

- 一ツに此仕人花木の事は。大和國添下郡奈良の都のものなり。此度御家に仕人となりて。御見扱仕ふまつりぬ。
- 二ツに御家の風は。承はる如く何事も背き奉らじ。
- 三ツに天が下の御掟にたがひ侍らずよく守らせ奉るべし。
- 四ツに譬へ如何様の横事出て來ぬとも。我々出て主を苦め奉らじ。
- 五ツに一年に賜ふ料とて金三枚賜はるうちを此度金二角受取奉る此年のさきも御縁し侍りて召仕はればすなはち此定を以て賜ふべきなり此後の事あらん時の爲に此證文條のごとし。

天平勝寶二年二月二日

韓白の犬神
人置の眞鮪

弓屋俊雄どのへ

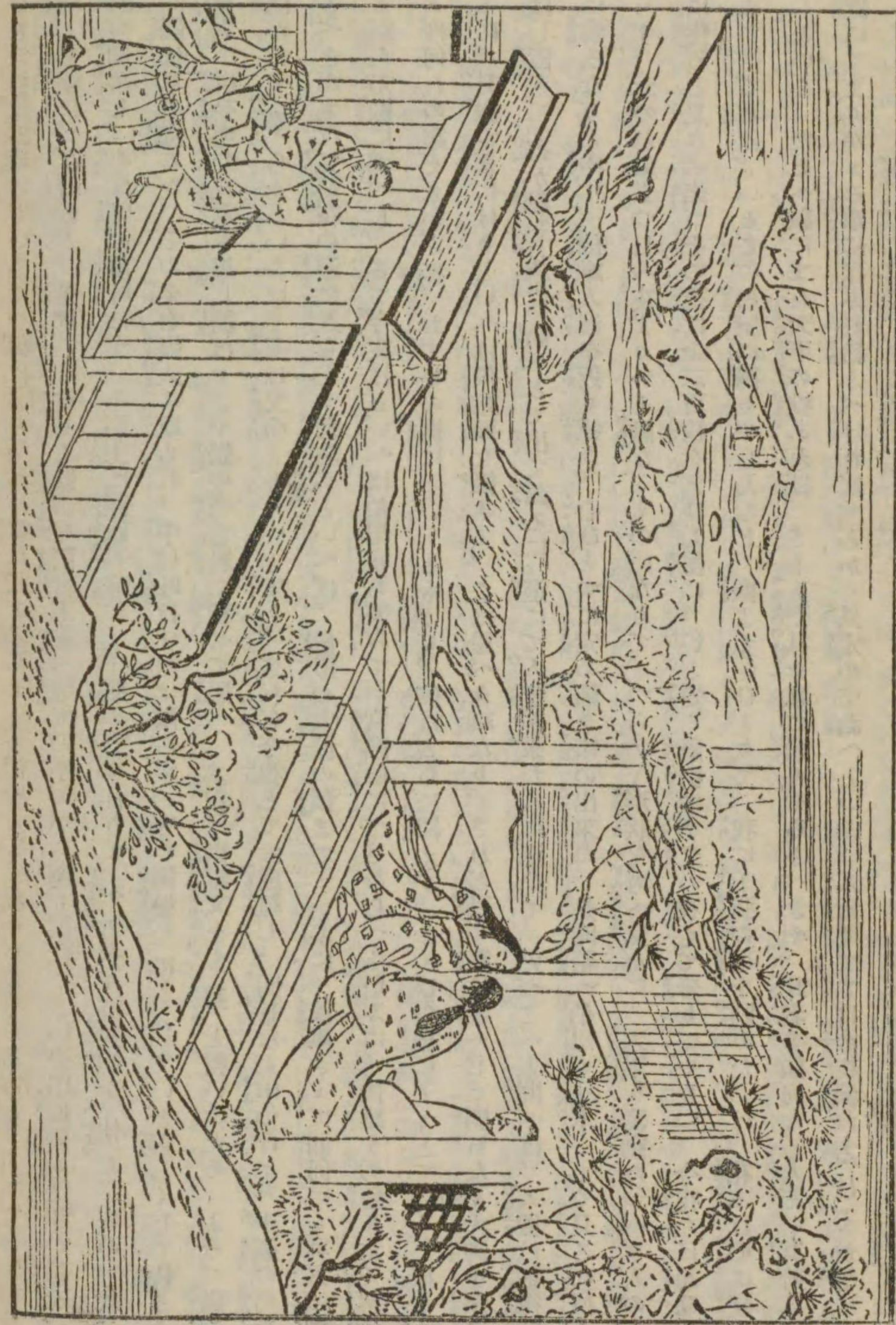
と少しも女びず。男手を墨黒くかいつけて出せば。人置讀終り。是は男の物書などいふは。いかばかりか劣る。此手もて女子集て。手習の大人を業とし給へなどいひ稱へ。懐の袋より印ひとつ取出て押せば。犬神はさるものも持たらずといふに。こはある事とて。手の大指に墨をぬりて押せ。さてその事もはつるに。まづ食の設けせんとして。眞魚屋

には魚をもとめ。菜屋には菜をもとめ。酒屋には酒をもとめ。宋人を呼びたて。夕食いと清らにとり調へて。まづ少女だちに參らせつゝ。おのれらは酒うち飲。日の暮るを待に。人置の下女に案内させて。俊雄入來るに。長君長君いと遅しといひ立れば。けそふ人は夜に紛れてなどいひにほやきて。はや參りてかといふに。先より參り給ひて。待詫びたまへりと聞ゆるに。少し覗んやとて。物の隠れによりてつくぐと見居りて。ひそくと歩み歸り。二人を招きて。是は人にはあらじ。唯物の化たるなりとぞ思ふ。かゝりと知らば我よく化粧し。衣なども薰りこめて參らんに。彼の山の神の何處へとていたくあれ給ふに。拔足をして内を出てつれば。唯かゝる様なり。櫛やもたらぬか。元結の亂れたる。洗頭槽やなき。顔のいと黒みたるをとて。俄にかい繕へど。元より此男の様は面いと短じかく。頭打ひらき。眼のしりうちたれたるに。鼻の上はいとひきく。二ツのあなはそらさまにあきて。口は髭にうち埋れ。髪は古草の如く打枯れて。白髪おひ雜り。丈は四尺あまりなるに。耳のみいと長く押たれて。唯狗の犬なせり。さは如何に化粧するとも。花木何に艶ひそめんや。大神輿に行きてうちさゝやくに。伯母も花木も出來て。殿のおはしたるに思ひ知らて。御迎にも出ず禮なき事などいへば。俊雄は頭を席にひしとつけてうなづき。先づ彼方へおはせよ。是はいと畏し。先づ彼方へといふを。人置をかしがりて。是は何故ぞ。何仕人にて候。唯今證文も書定てさむらふにといへども。唯ほとくとして。いと黒き顔の上を。丹塗にうちはきたるばかりに打頼め。あるは光り出などするに。汗はひたなぎに搔なぎ。二人が手をとり誘ふをば。命のきはみと苦ししたり。さて正目には向ひ居難ければいざりいで。池の上に造りかけたる寶の子の侍るに。庭なる山に向ひ居て。梅こそ盛なれ。いとよき花とぞ稱へ居りける。伯母近くより。今參りのものは年まだ若く。何事もうひくしく侍るに。東國の風俗も知らざれば。御心隔てず打懲して仕給はれかしといふに。をいなくと應へて少しも見向ず。人置は頭を搔きあがきて。酒ひとつとて盛渡せども。俊雄は手を顔はせて幾度か打覆し。漸々口にさしやすれども。口ごめに顛ひあがりて。齒はごちくと鳴合ふに。酒

は願に飲覆してあるを。花木は懷紙を出してのごはんとすれば。おかしませといひつゝ。我着たる袖などにてかきはらひ。唯水をもて來。湯をもて來。いとく喉の乾くになどいひをれり。小夜更る風のいと寒く。春霜や置渡らん。端居はよからずとて。戸など差込めて。人置も韓白も次に立ば。や何處へ行くぞ。爰に居れといひて放たず。さるにても目を加せて二人ながら次に行きて居れば。鬼住む島に我一人捨られたる思ひにて。唯俯向きてあるを。伯母の刀自近く寄りて。背をかいたてなどし。花木は御心に止り侍らば。此伯母が兎も角も計ひ參らせん。そがかはりには此方の望をもといへば。俊雄恐ろしげにふりあげて。伯母君いと忝けなし。此翁がかゝる様をも許し給はゞ。如何ばかりの御望をもといふに。世の財寶は様々に侍れど。金に越えたる財寶は侍らじ。我々かく遠き國に下りて。御見扱も仕ふまつらんと申すも。負しければ望み叶はず。何事につけても世のこぢたきのみなり。今夜は先づかくて歸らせよ。明日の夜おはしまさば。金三百枚ばかりを袋に入れて。持て來たまへと云へば。俊雄は打頼きて。いと安しと云ふ。さてあるに主は何處へかおはしたるとて。松燈させて内君のいたく尋ねさせ給ふと。人屋の下女が來りて告るに。いでや痛めにあはん。明日の暮に待せよと。香をは逆さまにふみて。これは他香ならん。脚も入らず。はかて往んなどいひて走り歸りぬ。人置は跡とり繕ひて。かく多きやかなる家に。女のみをいかでおはさせん。犬神もりておはせよ。火はよく埋らせよ。門はよく締めてよなどいひて出ぬ。犬神打見送りて。門をば鎖固め立ち歸りて。妹よ我妹よと呼ぶに。君はいと可笑しがりつると宣はすれば。犬神夫婦のもの立退き。君を上坐に据え奉り。いと畏こくも侍るかな。今夜は大君の如何に打詫はおはしますらん。我弟なるものにはよく聞え置きて候へば。御後ろ安く思さるべし。我妹よくたぶらかして候へば。明日の夜は。必ず金持て參るべし。さこそはかなき財寶を貪るなと思すべきが。かゝる世の中に人の心を見出で。志を合せ。徒を結び候はんには。彼なん乏しくては如何にせん。又弓の事は大君御軍あらんとき。弓なくては如何にせん。かゝる序にと豫て我妹と申し合せさむらふ。やつが

れ伊勢の大淀の濱に志を合せたるもの侍るに。弓屋をよく誑らせて。此濱まで船にて送らせ侍らんと思ふなり。君か
 くて如何で長くおはしません。今夜より十日ばかりは。かく御姿を窺されて。暫くの御隔りを思したへ給へ。やがて
 よき時を見て此處を出し奉り。よき所を設けて忍ばせ奉らんと。越方行末を聞え奉るに。君は只夫婦の人を頼
 み開ゆるなりと宣ふに。夜も更けぬれば静まらせ奉り。妹は差添ひ奉りて臥しぬ。犬神は外の方を守りて寢つ。
 夜明もて行くに。人置も早く出て来て。いかに昨夜は鼠どもの騒ぎつらんな。皿杯など破りつやなどいひて。唯妾と
 書認めざるを今日も亦後ろめたくいふを。犬神聞て伯母が如何様にも計ふべしと。いひ消して居りつ。その日の夕暮に
 なれば此度は衣などいと新しく。金はいひし敷を袋に入れて持て来。これ伯母君よそれ参らす。能く頼み奉るな
 どいひて。今夜は金やりつと思ふ誇りにや。少し主人めきてさのみも恐れず。花木近くまわれとさながらに逃もせて
 あるに。いたく地震てひし／＼となり。どよ／＼とこよめくに。我山の神はいたく怖り給ふに定めて尋ねもとめん。あな
 醜の地震や我戀の敵よなどいひて。うちよろめきながら。明日の夜又といひて歸るに。先づ一方の望は得つとて落居
 ぬ。さる騒ぎに人置も歸りたれば人もあらず。今夜は君の殊に戀しがりたまふに。妹が犬神に向ひて。今の騒ぎなど
 に殊更に思し出で給ふ御事にさむらへば。窃に迎へ入れ奉らばやといふに。犬神聞て。御ことわりには侍れど。天
 下の民を思されて。皇太子の御後見も聞えおはさんと侍る君の。かゝる筋に輕々しくおはしましては。俊雄は早や参
 るまじきがいと近ければ人置ゆくりなく立入らば。君を如何に立忍ばせ奉らん。昨夜も聞え奉る如く。君のかゝる
 淺猿しき御姿に窺させ給ふも。唯天が民種を思す故なり。さらば暫しの御慕ひ心をやといへば。君よく聞しめしとり
 て。犬神如何にかひなく口惜しき女と思すらんが優しくこそとて。眞袖を御顔に押あて給ふに。最愛くは見奉れど。
 心強くもてなし聞え奉るに。その夜も明て又の夜になれば。弓屋はいとよく化粧して。今夜はと思ひつるに。人をも
 召連ず手づから松燈して入来りぬ。伯母出迎ひて。今夜はよくやはしおきてさむらふ。花木も侍に侍参らせしが。又

ひとつ伯母が望のといふに。何にまれいへ。直に任せ参らせんと聞ゆるに。我々が従弟の都に候が。これも御主と
 同じ弓屋にては侍れど。是はいと貧しく候。弓削者も抱へ兼て。手づから削り候に。さいつ頃眞匏もて手の指を三つ
 四つ切落し。今は業の事叶はず。そが上に西國の守に。千張の弓を作りて奉るべき御契約を仕り。その弓代は先
 に賜はりて侍るを。その金を盗人に取られ。手は叶はず弓は削らず。守の御咎めにあひていと苦しうして侍るとき
 なり。御亭主此花木を思し給はゞ。千張の弓を船に積せて賜へ。さらば御證文をも。妾と書い改ため。よろづ御心に
 隨がはせ奉らんといふに。是は又金よりもいと安し。されど今夜とては成難し。明日なん申つけて。千張の弓を贈
 るべきがさは又浪花の浦に送らんや何處へといへば。伊勢の大淀の濱までといふに。俊雄きゝて如何にも其方の御使
 よからん様にすべし。さて今夜はといへば伯母うち笑みて。宮醋姫にてさむらへといふに。俊雄うち驚きて。宮醋姫
 とは何れの事ぞといふに。おすひの裾にといへともん。俊雄さらに聞えず。おすひの裾に／＼とていくたびも考
 るに。月経つきにけりといへは俊雄頭を掻きて。こは忌べき事なり。されど弓の事は違へじ。明日なん犬神を濱に遣
 はし置きて。否か然を見定め給へとて出て歸るに。道にて人置が來たるに逢ひて。いづこへと問へば。人置は彼御隠家
 に参るなりと申す。俊雄人置を近く招き。心ひとつに定め難き事の出来ぬ。是聞給へ伯母も花木もよく見るに直人な
 らず。おのれおとつ日の夜よりいと愚なるものになりて。つらく形状を考へ見るに。天下を騒動たつべき人の徒
 に侍ると見き。先づその夜は金三百枚を乞ひし儘に。いと安く承引て。又の夜もて参りてやりつ。今夜なほ思ひとが
 めて侍る旨は。いとこの弓屋に贈りやらんなど。様よくいひとりて。我に千張の弓を贈りたらば。花木は心に任すべ
 しといふ。たとへ誠にまれ天下の掟あれば。さる兵具を私に贈りやらふべきや。此者等如何なる人ぞ。其許には人
 置にてよくかゝる事にはふれ給ふべければ。とかく見定めて給へといふ。人置聞てさは今夜参れるはそれ等の事に
 ぞ。さきの日御隠家をもとめて。女達を移し侍らんとしけるとき。おのれはおらざりしが。下部どもの見定めて侍り



けるは。笠深く着て。世を忍ぶ様の人來りて。何にかあらん花木とうちさゝやきなどし。深くいひちぎらふさまなどのはし／＼聞えて。たがひに涙を拭ひて別れつと申し。その事は漸々さいつがた。下部どもの申し聞せて候により。是は心得ずと思ひ。女どもの有様どもをためし。又犬神が勇みたる有様を考ふるに。その弓など金などいひかけてさむらふ。始終の様も不審しく侍るに。何にもあれ明日にもならば。御心を定て訟の御場に出て。頼に委細を聞えあげ給へ。おのれも立添ひて。よく聞とり給はん様に訟へ奉らんといふにぞ。俊雄もさる事ぞと打うなづき。さらば明日なんといひて別れぬ。又の日の夕つがたになれば。春の淡雪はたれにふりて。いと淋しげなるに。花木は御上の事のみを思ひつゞけて。いと悲しく打うらぶれて。心もやましくて臥し居たり。伯母の刀自近く寄りて慰めつゝ。今夜は雪も降るに。弓屋の主人もおはさじ。人静まるころにならば。物がたき我夫の心をいひなごして。御上を竊かに迎へ入れ奉らんといへば。いと喜しく物頼母しく思ほして。火などもともしたるに。漸々おき出て湯漬など参れり。雪はいと白く降り重なりて。風寒く吹くに。門邊は人も通らず。戌の三ばかりになれども。弓屋のぬしも見えず。人置はまして來ねば。今夜こそあれと思ひて。犬神が寐て侍りしを打起さんとて立に。門邊に面白く笛を吹ながらして。行過もせず吹入るゝ聲の聞も違ざれば。御上こそ忍びましつれ出て見んとて。犬神が目覺してさしとゞめんとおぼすに。やをら戸を引あげ。伯母と二人して門の金戸をもこじ明けなどしてみれば。犬神が弟を唯一人伴ひ給ひ。御笠はいと深くして。笛を吹て佇み給へり。是はいとをしとして。御手をとりに引入れ奉るに。いと冷ておはしますを。懷ろにかい入れて暖め参らすれば。伯母は眞袖もて。御衣の雪をかきはらひなどして。門をばさしよせ。靜に犬神が寐たる枕方を通りて。奥床に入れ参らせ。一日二日の御隔りを千年の如くも思ひ過ぬとて。先づうちならびて伏せ給ふ。犬神は寐たる様にして。心には御道理なり。我起出ばやさしみたまはん。弟もせんすべなからんと思ひ。わざと軒をうちならしてあるに。何にかあらん丸矢なす鳴ひゞきて。我寐つる上四尺ばかりを鳴とほりて。柱にあたり

て枕方におちたり。犬神あはやと起あひて見れば。白鳥の羽にてはぎたる矢を。表の方より射入れたるなり。いで事こそあれと。燈を明かくして見れば。矢には書簡をさしくりて侍るに。とりて見れば。表には藤原惠美押勝家人。高橋手力これを贈るとかいしるしたり。いと怪しと思て頼に開き見るに。その文に曰く

事迫りぬれば何事もしるさず。此家には鹽燒王。ならびに不破内親王。立忍ばせ給ふならん。今朝なん弓屋の俊雄。人置の眞縮が訟の場にかくと告げ來りぬ。やつがれ思ふ旨ありて。此神田部の訟所に。解部となりてあるが故に。早く御有様を知れるなり。今夜子の時を過ば。神田部の守部等に。此家を圍ませ。君達を捕へ奉らん。今唯今いづこへも立忍ばせ奉り。明なば陸奥をさして下り給へ。みちのくの方には我友三田奇麻呂參り。又蝦夷の國には。すなはち我主惠美押勝參りて候に。尋ね逢ひて御上を頼み聞えよ。あなかしこ

二月五日

高橋乃手力

内舍人泰忌寸勝虎主

同 勝行主

と書い止たり。犬神その文をおし戴き。さてもよく知れたりな。いと頼母しき人に逢ひつるかな。いで忍ばせ奉らんと。まづ我妹を呼び出て。しかくなり。今一時ばかりの間に立忍ばせ奉らん。いざ旅の御粧ひを如何様にもかき繕ひ參らせよ。我もものせんとて。かねて隠しおける草苞のうちより。太刀二振を取出てわきばさみ。たすきをうなかけ脚結をゆひ。弟の勝行をも呼び出て。彼伯母がたばかりとれる三百枚の金を。袋に入れ懐ろに收め。君達には下部の簀笠をうち着せ參らせ。我はおほきみの御手を取り。妻は内親王をたすけまゐらせ。勝行に御先をはらはせて。葛飾の方をさして出ぬ。さて子の時を過るに。神田部の解部守部。所の刀禰等を先にたて。繼松をふり烈を調へ。此家を五百重に圍み。門を開き戸をこじて。立入て見れども人とはあらねば。こは如何にぞとて。弓屋人置の二人を

招きて。物のくまびをもとめさするに。人は更にもあらねば。心得もなき事を申して。訴所を騒し奉るよ。先おのれらを縛りて。ことの分別を申開せんなど。解部のともがらひひこらして。彼二人をいたく縛り。神田部の館をさして歸りぬ。

竺志船物語

本誌本誌本誌本誌

竺志船物語序

予少與平士觀友善。士觀長於予二十歲矣。因稱忘年交焉。每相會。講論經史。育量詩文。時或及治道得失。人物臧否。未嘗知其精國學也。後聞論者之言。其於國學。傳賀茂真淵之說。博洽精確。有青藍之譽焉。予悅吾友有此博雅之人矣。既而又聞之。其於和歌。豐饒高妙。不愧古之作者。與橘千蔭。唱大雅於關東。風靡一時。聲名藉甚。後進之士。仰如山斗。予又悅吾友有此俊逸之人矣。既而又聞之。其於和文。爾雅巧麗。獨步于詞林之間。先無古人。後無來者。蓋今古一人也。予又大悅吾友有此一代之偉人矣。唯恨予於國學。毫無知解。則予稱士觀。同于矮人觀場。隨人喝采耳。雖然。毛嬙西施。天下知其為姣麗之人矣。蘇秦張儀。天下知其為雄辯之士矣。莊周左史。天下知其為能文之人矣。顏淵曾子。天下知其為德行之士矣。與天下之人。同其見。同其言。謂之公論。又謂之正義。然則予之稱士觀。謂之公正。亦可矣。若夫惡人之所好。人之所惡。佛人禍身者。古人所戒。予亦不敢也。士觀沒數年。其門人高田文儒刻其師所著竺志船物語者。問序於予。予閱之。是世所謂物語者。而彼傳奇小說之類耳。是豈足罄士觀之蘊乎。雖然。古人有言。嘗鼎一臠。全豈可不知也。此編雖區區。亦足以窺文豪之錦心繡腸。發為藥花嚼麝之談矣。天下之人。自有眼識。又何假予之贊乎。文儒敏俊好學。務尚該博。瀏覽不倦。能奉其師說。又一時之才人也。嗚呼。士觀逝矣。人琴俱亡。韓公有言。思李元賓而不見。元賓之所與者。則猶如元賓焉。予之於文儒亦然。

文化甲戌仲春甲子友人吉田儒員加賀大田元貞才佐父撰

星池秦其馨書

天下有瓊奇之才。能收瓊奇之事。著爲瓊奇之文。讀之可駭可哭可笑可恨。至使人扼腕噴飯咄々不止。作者之心非有七竅。目則橫而鼻則豎矣。忽出此神通力。抑亦可畏也。史記以跌宕之筆。簸弄今古。自是絕世伎倆。但因事生文。事猶在彼。至水滸則一片腔子捏出無限瓊奇之事來。文之與事。併兩屬我。縱橫變幻。鞭馳造化。雖正稗不同。工夫將倍古之人矣。我邦古不乏麗藻。而構虛之文別出新裁。才實足抗衡水滸者。唯源氏物語一書爲然。其文波瀾蕩漾。雲騰山崩。華底無復毫髮遺恨也。水滸以後稗史小說殆將充棟。吾讀深厭之。源氏以後物語草紙不下數家。吾亦不肯觀。近與高田文儒通交。文儒持竺志船物語者來示曰。是平春海翁之遺文也。請一覽見序。余破格讀之。恍然自失。敷藻之絢。此豈在源氏之下乎。翁之在世。里居相接。然翁蒲柳善病。余亦衣走食奔。相見太罕矣。翁之於國學和歌。一時推爲翹楚。吾亦不意其行文之妙至於如斯也。翁龍鍾一禿。對客如怯。而胸中所貯。奇々怪々。殆不可端倪。人之可畏。果然如此。初謂源氏以後。我邦無奇書者。余之固執也。使余之固執立解者。文儒之賜也。今已拜賜。謹以奉還。甲戌暮春之初五山池桐孫題。

池 永 觀 之書

比とせにしこりのやにつとひていせ物かたりのこうせちき、計るをりになにくれのふみどものうちよりたるか中にこのつくし舟の名の有けるをみていか那るものにかとひたりしに師の翁ほゝゑみてのた方へらくこはかりそめ心やりになむものしたりしをかならず人のめよろこはせむとのすさひならねはしかこそことえりもせさりしかさはいへこもまた物かたりの數にはも禮しをとてやをらとりかくさむとし給ひしを比たふるにこひえて見しに人のくにのふることをやかてこゝに有りつるさ方にと李なされしはかのかたりの於やといふなる竹とりの翁のたくひともいふへきをたゝ詞のあやにうるはしきはかくや姫にもほひまされりとやいはましさるを那からにして筆さしおかれたるこそ安かぬわさなれ花の山路にて日くれたらむは翁にはいかにおほすにかなと聞えしを思へは十とせあまりのむかしのことになむ有けるこたひ松のやのあるした世子のとしにはかりて板にゑりなむとすあはれ師の翁よにいまそかりせはしひことしてたにいままきををもへさせましとおもほゆるあまりにくさ／＼のことをさへしのひいてつゝそゝろにさしくまれぬるかひなしやさはれこれを機ものになすらへみむにはつかにおりいてしあやめもてその一むらのあらましはおしてもしらすゝわさなれはいさゝめなるさいてといふともにしこりのやのうまこりのよにもたへなる手わさをは見もしつへくめ傳もしつへきものにやはあらぬ

文化十あまりひとせ三月

源 光 彪

歌と文とのふたつの道。巧なるとつたなかるとは。よみかく人のぎえによるわざなめれど。そが中にうたのみちにすぐれし人は。吳竹の世々に絶せず。濱のまさごの數あまたなむきこえたる。しかはあれどと理がなく吾妻のくに、撫立そめて。雲かすみなすをしへ子あともひつゝ。いとたかき名を得られたるわが織錦の大人と。芳宜園の翁の歌まには。をさ／＼あたなふ人もあらざりしに。なほみそぢあまり六人の仙の美かは。六家の君さへかみるおはすれば。その左に出たまへりとしもいふべきやは。たと文かく道にくしびにたへに。世人のえも企及ぶまじきふしを書出られしは。いにし彥今に大人ひとりなるかも。そも／＼文のこと婆は千早振神代よりつたはれるにもあらず。ことさへぐ漢文にまねびてこゝのことばにつくりなせしものなるを。近世になりてふること學などいひのゝしる輩も。なほおもひわかずして。手示遠波かなもじづかひのさだにおもひを激／＼。あるはこと婆つかひにこゝろをくだきぬれど。すがたのわいだめをしもさとらざるは。あさましきわざならずや。先にし彥の宣命祝詞には。あまたの體そなはりて。かしこの詔。勅。聖書。制。誥。册。御札。赦文。諭祭文。國書。令。教。符。檄。露布。公移。判。祭文。祝文。などにかなへるもこもりた理。上書。表。牋。奏疏。書記。論。說。原。議。辨。解。釋。問對。序。小序。題。跋。書。讀。雜著。規。戒。評。碑文。記。志。記事。題名。行狀。墓誌銘。墓碑文。墓碣文。傳。誄。吊文などはいふもさら也。古事記世繼物語などは。左氏史漢のさまによれかしなり。竹取うつば伊勢源氏狹衣などは。けだしや莊周にもとづきけむ。後の演義小説はたひとしかりけり。今昔宇治拾遺などは。戰國策説苑のたぐひともいふべし。その外何くれと書出づる文體。からくにゝもとづかさるはたえてぞなかり計る。されば文書むにはすがたを漢國にかり。こゝろを今にまうけ。詞をいにし彥に採りてものすべきなるを。おのれおもひしり顔にかまへたる人たちも。此境をばえさとらてありへしに。ひとりとのむねを得て。にしご理のめてたくあやなしおり出られしは。よにたぐひこそな

かりけれ。かゝればをしへ子たちはいふべくもあらず。門布美ならしてきたりしたしめるともだちさへに。その光そひて。今は武藏野のをばなさかりに。向が岡の草しげく。ふびと競おこれるも。大人の朝日影によれりしなれば。此道にては往昔のひじりにも。むしろをゆづりたまふまじうなんあり計る。大人ひと世の文こゝらありける中に。このつくし布年の物語はすゞろへなる筆のすさびに。竹とり源氏のすがたにより。かの演義小説のさまにものせられしに。はつかに一の巻書さして捨てられしかど。さすがにこがねに玉にあたひなき寶を。塵にうづみはてなんはいとしも本意なれば。余ひろひとりてよ美かうがへつゝ。かたへにことわりの詞をさへくはへて。ゑり巻にはせしなりけ理。

文化十一年二月

高田 興 清 序

凡例

此書はもと大井三位物語と名づけられしにて。つくし舟といへるは一の巻のみの名なれど。はつかにひと巻書さして捨られしものなれば。やがてその巻の名もてうはぶみにはとりなせし也。巻のすゑにそは次の巻にこそと書れしは。からくにの傳奇小説の書例に。且聽下回分解とあるによられしになんありける。

はじめ巻ノ端に。竺志船物語。東都平春海士觀遺稿。源與清文儒旁註と書つるを。いにしへより竹取。宇津保。伊勢。源氏。などすべての物語書に例なき事なれば。世人の議論もいとかしかましかりなん。さては與清がひがわざのみかは。師の名をもけがすに似たりとて。いひきしらふ人ありければ。せんすべなくてはぶきたり。されど書つくり出るは。もと西蕃にならへるわざなれば。今かれにまなびたりともなてふことかあらん。からくにのむかしも。巻首に作者の名しるせし例なき事なれど。や、後ノ世になりて名をかくせしはまたたえてなし。中國にもいとはやき世はさもこそあらめ。今になりては作者の名をうづみはてんこと。いとほいなしといふべし。もししかふるきさまによらんには。序跋などはふるはいふもさら也。ゑりまきにするもえうななれば。さながらうつしまきのまゝにてつたふべきをや。また東都といへるをこれかれとがめつる人あり。げに一わたりはいぶかしみ思ふもうべなれど。こは物部某などが書たる例を引るにはあらず。いにしへ太宰府を西都といひ。鎌倉を東都といひし例あるがうへに。國府の事をひなの都ともいふめれば。これかれの證に據し也。京都を西都とは書まじけれど。江戸を東都と書んにくるしき事かある。其くはしきよしは。まろが著せし俳諧歌論十の巻に論じたれば。こゝにはいはず。余が旁註せし後に。なほ事たらぬさまなれば。標註をもくはへてんやなどいひそよのかせし人ありしかど。いとふるき世の書にもあらず。まのあたり師のふでずさびなるものを。いとことしくしげに標註までやはとてやみぬ。旁註だ

にもえうなきわざに似たれど。そはうひまなびのともがらなど。よみひがめてんもはかりがたければものせし也。書中んとはぬる字をくはへもし。刪もせしは。世人のいぶかしみおもふふしあるべし。たとへばあん也よかん也といふ語はある也よかる也の音便なれば。るもじにかへてかならずんもじを添たり。やごとなしといふ語は無止事とも。また無惱ともいへる舊説うけがたければ。余が考もて無上事の義とさだめつ。さてはいやごとなしの略なれば。んもじえうなきをもてはぶきたり。清水氏は不得已の義也ともいひたれどしばらくまるが説もて書たり。またおもしろき事をかといへる語は。面向の心なれば。奥のおもじ書べきよし。本居氏はいひしかといま端のをもじ用しは。蜻蛉日記の。みちのくのちかのしまにて見ましかばいかにつゝじのをかしからましといふ哥に。丘によみかけたるをもて證とせられし師説によれる也。

源 與 清 識

つくし船

氏は藤原にて。大井の三位といふ人いまそかりけり。身の才いと賢う。よろづに劣禮たるかた無。物したまひければ。年まだ三十にはたらぬほどなるに。兵衛のかみにて。宰相にさへおはす禮ば。世のおぼえ上事無。ゆくすゑいたのもしう。人もこゝろよせまら勢しを。たゞひとつ怪しの病ありて。酒をだに見たまへ禮婆。公私の事を。やがてわす禮たまひ。ただ飲にのみて。興じ給ふをりは。現し心もあらずなりて。もの荒かに。たちる間なう。心にもあらぬよしなきことをも。おほく言出けり。さめ給ひて後に。しかなん正無御學止なりけるよなど。聞えしらする人もあれど。さばかりかしこおはしながら。和が過ともおもほさで。あらためたまふべき御心もなきぞ別様あるや。わかき殿上人などは。世に疎ましきことの談種にしつゝ。酒鬼とさへつけていひはやしぬ。またこゝろある人は。此人にしもこの失なからましかばとてをしみあへり。一とせ殿上の淵醉にいたく強られて。例のうつゝごころもなく醉癡たまひて。ありとある上達部の冠打おとし。裾引かなぐりなどし給ひければ。上にきこしめして。無禮もさのみ咎めたまふまじきをりなれど。酔ひに乗たるわざとはいへど。わが身の階をもわす禮て。かくまで物狂しきふるまひやはある。いとやすらかぬことなりとて。やがて職とりはなれたたまひぬ。それよりのちは。世の中無情おぼしなりて。故大納言のときよりつたはりたるみ莊の大井にあるに。もとよりかりそめの殿などあるを。つくりそへさせ給ひて籠居おはすれば。世のまじはりもはかしくしうはし給はず。今はたゞ至實なきたからといふともとのみおぼすべし。北方は王家統にて。やごとなき胤におはすれど。いかなる宿世にか有けん。おなじさまに酒をしもふかくこのみ給ひけり。御子はたゞふたりのみおはす。をのこ兒はまだ最難なる程にて。女ごはことし十五になり給へり。此姫君貌世に勝れて不足所なしよろづに聴うおはして。最無仕出たまふことも。すべて心有意人には異なり。又常の御心遠慮。まめやかに押立たる所ある御本性なれど。うけべはたゞ女しく穩にのみもてつけたまひて。さし過たるかたなどはつゆ見えたまはず。父君のあけくれた酒のふちに洗み入て。泥のごとくにのみおはするを。あさまじう嘆かしきことにおもひつゞけたまひて。かく方でこのませ給ふものを。切にやめたまへとは侍らねど。あまりに打つゞきて絶る間無うおはさば。おもほぬ御病をも引いでさせ給ひぬべし。終日にうち起き給はんことこそかたからめ。せめて時の間に醒給はんをりあらましかばなど。時々諫め給ふをりもあれど。あな然勿言ひそ。人も命のぶる藥なりとこそいひつれ。今は世の中の交も、のうくおぼしなりて。たゞ徒然にのみこもりおはするを。此友だになからましかば。御心ゆくかたもあらで。いと寂々しからまじなど。北方のかたはらよりいひけちたまへば。父君えはきやゝ給はん。さるは朝夕なにくれのことにつけても。いさゝか御こゝろに不背とおぼすめれば。強にうちかへしては戻聞え給ふべくもあらず。かくて年月のゆくまゝに。たゞ糟の丘つくらんことをのみ營給ふ。寢殿の障子には。からやまとの酒に名きこえたる人々をゑがゝせ給ひて。常に立言給ふには。此人々とも居れば。我は友に乏からず。斐の酒喝る時あらずは。わが生涯はかくてたれりとのたまひて。いにしへ人のなかにも大伴の大納言をことにしたひたまへば。その酒を讀る哥をめてたまふあまりに。その心をひろめて。長歌ひとつをぞつくりいでたまふ。

いにしへの かしこき人の くみしりて 此清酒を 聖とは
 宜も號けり これをしも 友としなせば 花を愛て 月を訪にも
 可憐さの 添るのみかは 憂ふしの 繁き時尙 一坏を
 手にとりもてば おのづから 心寛し 又更に 二つき三つき

無泥く	飲ての後は	結るゝ	おもひ解ぬ	塞りし
胸も晴けぬ	うちとけて	十つき七つき	かずしらず	なり行くときは
あめつちも	和れから廣く	月も日も	長閑也けり	きのふといひ
けふといひつゝ	晝夜なく	ゑひにゑひては	みな月の	土さへ裂て
てる日にも	あつさ思はず	霜こほり	あられ亂るゝ	冬の夜も
さむさわすれつ	かくばかり	いともたふとし	聖とも	ひじりといひて
仰がざらめや				

其ころ左の大臣は。年老たまひぬれば。致仕の表奉らんの御ころにて。よろづの政をも凡く申したまはず。たゞ病に託て引こもりてのみおはすれば。今は世の中の事。たゞ右のおとゞの御自由なり。此おとゞいと若うおはしける時には。三位の君とおなじ師をとり給ひて。書などよみ給ふことも。諸共に無關心ものし給ひぬれば。いと好しき御中らひなるを。今は御身の榮ならぶ人なくおはするにつけても。この君のかく世に埋れてのみおはするを。いと勞ほしうおぼしなげきて。事に依ては常に約聞え給ふをりもあ禮ど。年ごろかく身を世になきものになし侍れば。中々に心安きかたに思ひなり侍りて。今は鳥をうらやむころも侍らずなど答へ給ひて。清々しうも御心にしたがひ給はぬを。ことし太宰の帥闕けたれば。いかで此君をとおぼして。御門にはわれよきに奏し侍らん。御としも今さかりなるを。ひたぶるに世をおもひすてたまふらんことは。ゆめくあるまじきこと也とて。たびく説へ聞え給ふ。一たび二たびこそあらめ。むかしをわすれぬ御心より。かく切にのたまひわたるを。人の御ころをもしらず顔に。わがおもふ心のみ立んは。かへりて心淺きわざ也。まして男子世にあらんに。おのれをしる人あらざらんをりこそ。落高が下に空く朽ちも果め。志をも立て。身をも起しつべき時至れるを。いかでいたづらに過すべき事か

は。今はおとゞの御心にそむかじとの給へば。かく世ばなれたる窓のうちに。寂々しくあかしくらさんよりは。花やかなる世をへて。賑はしき月日をおくりむかへんこそ。いふかひあるわざに侍らめとて。北方もよろこびたまひて。うちく其御心まうけなどあるを。姫君はひとり御心ゆかぬやうにぞおはすめる。さるは住なれし都をふりすて。千里の空に浮石んことを心ぼそくおぼすにやとて。さまくいひなぐさめ給へば。こゝろ筑紫の海ははるかなりとも。御あたりはなれず伴はれたてまつらんに。何か憂事の侍らん。また時いたりて。御身の世に出給はんは。たれも願はしきすぢにて。最嬉しきもの乍。たゞひとつやすからずおもひ給へらるることの侍るを。聞えてはえあるまじけれど。いひいでんもさすがにて。心のうちにのみなんおもひつとけ侍るとて涙含給ふ。さはいかなるふしなりとも。なにかつゝみ給ふべき。かゝる事のはじめに。物おもはしげにしたまふこそ忌々しけれとのたまへば。女の身にてかゝる事の端にてもまねび出んは。かたはらいたきわざに侍れど。一わたり聞えまゐらすべし。そもく此度の御職は。おほかたの受領の。品卑く事狭きたぐひとは別に。諸官ぐの上になち給ひてよろづのこと執り總給はんには。おほくの人々。たゞ一所にこそ驅き奉るべきを酒にのみ御心よせ給はゞ。たれも表にはそむきまゐらせずとも。下には將争でか克従ひ奉るべき。しか侍らんには。不意く御身のとがめ負給ふべきふしも。いでまうてこそやは侍るべき。又此とし比は西の海波風しづかならずとかいふなるを。事とあらん時に。例の泥のやうにもおはさばいかゞし給はん。今よりかたく此御淫止めたまはゞこそあらめ。もしとめたまはざらんには。此御職辭し給ふぞうしろやすきわざに侍るべき。畏き波路を凌ぎ給ひて。御心無暇世を過し給はんよりは。春はにし山の雲を帳とし。秋は嵯峨のの錦を茵にて。露を汲霜に酔給はんこそ。御ころゆくかたなれとて。おしたちての給ふを。父君きゝたまひて。いとかしこもの給ひけりな。されどおとゞの御心をも今はそむきがたくなん。又かたへの淫は。わがこゝろにこそあれ。さのみ深くな心おき給ひそとて。思ひとゞまり給ふべくもあらず。秋になりてとくまかれとの宣旨下り

ぬれば。先罷りまうしにて。右のおとゞの御許にまゐり給ふ。おとゞまぢうけたまひて。下り給ひての御心慮な
 ど。懇に聞え給ひて。又むかしのこともかき散しおぼしいで。互に泣み笑み。終夜酒酌交しつゝ御ものがた
 りあり。帥の君は姫君の聞え給ひしことを御心にわすれず。まして畏り置給ふ御こゝろさへあれば。例のやうにも
 醉給はず。おとゞはかねて御こゝろまうけありて。そちの君に名高き帯と。かしこき御馬ふたつ。北方にとて綾百
 疋。姫君の御料にとていと清らかな御衣一くだり。わか君の御れうをさへに細かに心して奉り給ひて。童下人などまで
 に。祿どもあまた纏頭給ふ。あかつきに歸り給ひぬ。大臣年比の本意かなへりとしてよろこび給ひて。昨夜は試見に強
 たりしが。ゑひての後も別様あるさまにもあらぬを。酒鬼とかいひて。世の人のあさましうとりなすこそ。物いひ悪
 きわざなれ。昔はさもこそ別様ありつらめ。今はあらため給ひぬめれば。われこゝろやすしとぞの給ひける。年ごと
 に秋はさが野の花見に出立ちたまへど。ことしは下向給はんの御いそぎにまぎれておぼしもたぬを。またかへり來
 んほどもはるかなれば。この秋だにとて北方の撩し給へば。姫君をもつらねて。ひとつ御車にていで給へり。夕か
 げ可憐ほどにて。さまんゝの花どもの露にうちみだれたる中を。野べにやこよひとて分いりたまふ。御隨身めして。
 萩の花一枝をらせ給ひて。そちの君。
 またも來ん秋は契らじことしだにたもとにほはせ萩が花づま。
 を花の風になびけるを見給ひて。北のかた。
 初を花なに招くらん秋のゝに留り著べきわが身ならめや。
 女郎花のたゞ一本さけるを。姫君。

秋の野の千草がなかのをみなへし耻やかてひとりたつらん。
 ここかしこ虫の聲などたづね給ひて。くれ過ぐるまでおはす。年ごろ北方の願立て給ひぬれば。御佛にもわかれつげ
 奉らんとて。こよひは法輪にまうで、御堂にこもり給ふ。夜なか過ぐるころ。しばしもろともうちまどろみ給へ
 ば。帥の君の御ゆめに。父大納言の物うれはしげなるさまにて見え給へば。などてさはおはするぞと聞え給へど。な
 への御答もなし。御手にもたまへる筆して。御堂のはしらにものかき給ふを。何ならんとて見給へば。
 荒汐にこゝろゆるすな大舟は左右楫ありともないたのむべき。
 とあり。こたびふな路におもむきなんとするを御心そへ給はんとての給ふならんとおぼして。御心やすかれとのたま
 はんとすれば。後夜のかねうちならすおとに不圖御めさめぬ。北方にもかくとつげ給ひて。もろともに御佛をねんじ
 給ふ。あけぬれば。法師等に物など纏頭給ひて。誦經ねんごろにせさせ給へり。八月ついたちの日。山崎まで出た
 給ふ。くるま十ばかりにて。御粧いと厳し。おくりの人々には。皆ものかづけ給ひてなんかへし給ひける。右のお
 とゞよりも御使あり。かりそめの行通路とはおもふ物から。すぎいなん四とせ五とせは。今より待遠こそおもひ給へ
 らるれ。これはわたつみの神にとて。白かねのふねに。さまんゝの錦をつみたるは。幣代にとの御心ばへなるべし。
 はりまがた嶋こぎはなれゆかん日は八重の汐路にたむけよくせよ。
 とまる心もとあり。

つくしの海舟著爲なば先つげんやへの汐路ははるかなりとも。
 惜きものこそとて。猶ゆく末のことどもたのみ聞え給ふことこまやかに。御使に酒など給ひて。きぬかづけ給へ
 り。播磨守はそちの御くだりまちうけて。饗し喰ふこといと甚じ。雨日ごろふりて。舟いだすべくもあらねば。此月
 はこゝにやすらひ給ひて。御心静にこそ下り給はめ。晴ままちつけ給ひて。名たる浦の月をも見給はてやは過させ
 給はんとて。日日になにくれと。海山の味どもとり聚へて。御酒すゝめまゐらす。帥の君は姫君の御諫をわすれ給は
 ず。又むかしに引かへて。今は酔のあやまちし給ふべくもあらずとて。右のおとゞのよろこびのたまひける事をも。

洩き給へれば。かたぐに御心憚ましうて。一日ふつかのほどは。酔癡給ふばかりはのみ給はぬを。連々と雨降して。ながめがちにのみ目をかさね給へば。おのづから御心憚りざまなるに。かしこにくだり給ひてこそ。よろづの公事もはべらめ。旅路のほどには。さのみ憚ましうし給ふべき事かは。しばし御こゝろなくさめ給ふばかりは。なにの妨か侍るべきとて。北方のまづおひ給へば。いつしかと御心憚ひはて。今は日々にこひぢのやうにのみぞおはしける。つくしには新に帥のくだり給ふときとて。たれもく畏まりてまぢきこゆるに。まして右のおとゞの威さへそひ給ひぬれば。人々のおもへることおほかたならず。こたびは舟路よりと聞て。例なき事なれど。監がもとよりごとさらに御むかへの舟まゐらす。かちとり舟人ども。物にこゝろ得たるかぎりをえらみて。ふなやかたなどひろしなし。几帳屏風などまできよらかに調て奉れり。なにはより御おくりまゐれる舟ども。おなじ波瀾に緊ぎて御舟出をぞ侍ける。雨やう／＼はれまれば。此ひまにこそ御舟疾出ださせ給はめ。此月は海のこゝろさだめなう侍れば。猶豫給は。暴風など吹いて侍らんもはかりがたしとて。難波の舟人ども切にまうせば。そちの君き、給ひて。かくていつまで長居し侍るとも。御わかれのをしき事はかぎりも侍らじ。舟人らもいそぎ侍るときけば。今はまかりくだり侍らましとの給へば。秋も今さかりなるを。しばしやすらひ給ひて。清けき浦邊の月をも御覽せられんこそ。興あるわざに侍らめ。ふなでいそぎ侍るは。舟人のつねにて侍れば。さのみ御心勿懷せ給ひそ。かのつくしの舟人こそ。とほく異國にもゆき通し侍れば。雨風の心をもよく候ひなれて侍るべし。かれらがおもふこゝろをも。とひこゝろみ侍らんとて。守筑紫の舟人をよびて。いかゞおもふとへば。げになにはの浦人のいひ侍るごとく。此月は雨風さだめなう侍るめれば。はれまに舟出し給はんは。理なるやうには侍れど。(以上上の巻終)そは一日二日の舟路にも侍らばこそ。さもいそがせ給はめ。つくしまてはあまたの日數をも過さては到りがたう侍れば。今より豫め海の心をさだめいふべき事にも侍らず。御舟出の速遅は。たゞ御こゝろにまかせ給ふべし。たとへ雨風常なくとも。かちとりの心だに賢う侍らば。なにの御こゝろおき給ふ事か侍らんとて。保ばりたる氣色なれば。守よろこびて。つくしの舟人は如此なんまうすといへば。帥の君聞給ひて。さらばその其舟人どものまうす事。面あたりきかんとて。皆お前にめして。お檻まのもとに膝行いで、事の様とひ給ふ。なにはの舟人ら眉うち顰めて。甚恐。よく舟のりするものは。日撰をして時失はざらんやうにするをこそ。長たる舟のりとはいひ侍るなれ。たとへ舟人のこゝろ賢う侍りとも。艫の力はかぎりあり。海の心ははかりがたし。いかでか浪風をば侮り侍らんとて。いと危しとおもへり。筑紫の舟人うちわらひて。心臆したる人等かな。波山を揺し。風巖を飛ばかりに侍りとも。かちとりの心ひとつにて。御舟はたひらかに在すべし。いでこまもろこしは勿論也。天の河までかたらせ給ふとも。われら御ともつかうまつらはんには。なにごとか侍らんとて。いとわれ慢がほなれば。君の御爲に疎ならじとてかくは申なり。心臆したるにはあらずとてなにはのどもの作色を。帥の君せいし給ひて。勿争ひそ。いふこと各各ことわりあり。いづれを疎なりともいひがたし。われ汝等がこゝろに反じとのたまひて。つくしの舟をばみづから乗給はん料に留め給ひて。ことに昵近仕まつれるかぎりをのみのこして。おほくの御とも人は。皆なにはの舟にてまづくだらしめ給ふ。かく猶豫給ふを。守よろこぶ事かぎりなし。月は夜ごとにすみまされば。濱べにいで。四方の景色見やり給ふ。空は塵ばかりの雲も集ば。あはぢ島はたゞ手にとるがやうにて。海のおもては。千里の波はるかに晴て。金の叢敷きたらんやうなり。北のかたの御車は小松ども多かる中にたて。下簾ほかに捲げ給ひ。君は磯間に御馬とゞめ給ひて。軟障引わたして。かりの御座造ひて居給ふ。守まうけ意の物ども荷ひ出で。瓶子とりながら。ふりにし事どもかたりいづ。むかし行平の中納言の蘇鹽垂つと託給ひけるすみかは。かの關のあなたにて。こゝよりはたゞ備ひ渡る斗近きほど也。又小野篁の宰相の。しまがくれゆくとよみ給へるは。やがて此うらに舟とゞめ給へるをりの事になん。今に此ぬしたちのなごりわすれず。海人が語りにも。そのことの葉をばいひつたへて侍る也。されどおほやけの

も。かちとりの心だに賢う侍らば。なにの御こゝろおき給ふ事か侍らんとて。保ばりたる氣色なれば。守よろこびて。つくしの舟人は如此なんまうすといへば。帥の君聞給ひて。さらばその其舟人どものまうす事。面あたりきかんとて。皆お前にめして。お檻まのもとに膝行いで、事の様とひ給ふ。なにはの舟人ら眉うち顰めて。甚恐。よく舟のりするものは。日撰をして時失はざらんやうにするをこそ。長たる舟のりとはいひ侍るなれ。たとへ舟人のこゝろ賢う侍りとも。艫の力はかぎりあり。海の心ははかりがたし。いかでか浪風をば侮り侍らんとて。いと危しとおもへり。筑紫の舟人うちわらひて。心臆したる人等かな。波山を揺し。風巖を飛ばかりに侍りとも。かちとりの心ひとつにて。御舟はたひらかに在すべし。いでこまもろこしは勿論也。天の河までかたらせ給ふとも。われら御ともつかうまつらはんには。なにごとか侍らんとて。いとわれ慢がほなれば。君の御爲に疎ならじとてかくは申なり。心臆したるにはあらずとてなにはのどもの作色を。帥の君せいし給ひて。勿争ひそ。いふこと各各ことわりあり。いづれを疎なりともいひがたし。われ汝等がこゝろに反じとのたまひて。つくしの舟をばみづから乗給はん料に留め給ひて。ことに昵近仕まつれるかぎりをのみのこして。おほくの御とも人は。皆なにはの舟にてまづくだらしめ給ふ。かく猶豫給ふを。守よろこぶ事かぎりなし。月は夜ごとにすみまされば。濱べにいで。四方の景色見やり給ふ。空は塵ばかりの雲も集ば。あはぢ島はたゞ手にとるがやうにて。海のおもては。千里の波はるかに晴て。金の叢敷きたらんやうなり。北のかたの御車は小松ども多かる中にたて。下簾ほかに捲げ給ひ。君は磯間に御馬とゞめ給ひて。軟障引わたして。かりの御座造ひて居給ふ。守まうけ意の物ども荷ひ出で。瓶子とりながら。ふりにし事どもかたりいづ。むかし行平の中納言の蘇鹽垂つと託給ひけるすみかは。かの關のあなたにて。こゝよりはたゞ備ひ渡る斗近きほど也。又小野篁の宰相の。しまがくれゆくとよみ給へるは。やがて此うらに舟とゞめ給へるをりの事になん。今に此ぬしたちのなごりわすれず。海人が語りにも。そのことの葉をばいひつたへて侍る也。されどおほやけの

かしこまりありて。時うしなへる人々なれば。世にさすらへてあはれなるためしにこそいひいで侍れ。それには引かへて。世に出時に逢給ひて。御身のひかりそひ給へるたよりに。かく逗ひ給へば。今よりしては。海人の子も君をこそ此浦の面目にはいひ傳へはべらめといへば。いかでその名高き人々の列には准へ侍らん。一たぶは榮え一たびは衰ふるも。これ春秋なりと聞けば。世の浮沈はいふべくもあらず。たゞ其朽ちやらぬ人々の名こそ猶したはしけれ。こよひかく眞人と我と。此なきさの月に浮岩侍るも。時去り世移りなばおなじむかしがたりとこそなり侍らめ。

あかしがた月を昔の記念とて。たが世に今をしのびいづらん。

との給へば。げに御名残をとゞめん浦わの月をばたが世にかわすれ侍らん。

今宵しも浦わの月も心して光をなみにみかくとぞ見る。

所がらとのみはえこそおぼえ侍らねといふ。御車よりも童しいはせ給ふ。

沖つ舟とるやまかぢの數さへもさやかにみゆる秋のよの月。

もしほやくけぶりもたてずなりゆくは浦邊のあまも月やめずらん。

御車の後なる御等などのもありつらんを。聞もらしたればいはず。更行まゝに月はいよ／＼すみて。さかづきたび／＼めぐれば。君いと興じ給ひて。家園忘却してと打誦て。例の無量飲み給ふ。侍ふ人々は。君の御對なるばかり飲得人もなければ。皆多ひ困じて。松陰岩がくれなどに靠伏るを。君見給ひて。いふがひなきものどもかな。誰やある。此杯たまはらんと給へど御こたへ聞ゆる人もなければ。うちわらひ給ひて。山樵夫海人なりとも。こよひはなにかへだてあらん。酒に健からんものあらば。疾參て來よとの給へば。守もゑひふしたるが。かくの給ふをききて。いかで御心をとらんとて。かしらもたげながらおまへにいひて。こゝにつくしの舟人どもの侍るを。めし

いて。御杯たまはらばいかにといへば。いと好有なりとて召し給ふ。舟人どもはるかなる沙の末にうづくまるを。守まちとりて。此舟人どもはいとめづらかなる守の侍るを。其名負たる事よしきこしめして。御杯たまはらば興有事にこそ侍らめといふ。奇しのことや。いかなる名ぞとの給へば。守千引とよべば。かしこまりておまへにいひて。丈立ち高くて。太かに肥たり。君は雄しのさまよとて見給ふ。これなん力ある事人にすぐれ侍る。千人引之岩をも。石取の石とる計りにとりなし侍れば。然なん人のよび侍るといへば。眼冷しき力かなとて。御杯たまはる。つぎにいひて來るは。瘦ほそりてかたち小かなり。此はたゞ小かなるのみにはあらず。身の骨いと柔かにて。いさゝかなるものゝ間よりもいひて入る事心のまゝなれば。鼯鼠鷹といへり。かゞち目は眼赤く。烏脛ははぎ黒し。むねのさしいてたれば。鳩むねといひ。かしらの尖たるを銚頭といふ。皆次々におまへにいづ。君名つきたるよしを聞給ひて。いとめづらかなるものどもかな。まる往に爾等を見つれども。かく興あるものどももおもひかけざりしとてわらひ給ふ。皆甚しき酒のみにて。唯のみにのめば。君もまけじと競ひ給へど。初夜より御杯の數つもりたる後なれば。えやは堪給はん。いつしかと御聲づかひのあや理もわかれず。起居さへ。御心にまかせずなりて。たゞ蛭の子のやうにぞ見え給ふ。夜もいたく更て。濱風ひややかに吹きいでたり。君はゐながらよりふし給へるを。かゝる所に御との寢らんはいと便なしとて。守は心ぐるしう見奉る。かくゑひふし給ひぬときゝ給ひて御車よりもこなたへとの給へば。さぶらふ人々もおきいで。率とて抱きて搔おこしまらするに。とすればかくさまに轉び給ひ。かくすればとさまにたふれ給ふ。守も手惑をして。いかになしたてまつらんとおもへり。かゝる御ありさまを。千引かたはらより見奉りて。御身にちかう馴れつかうまつらんは。いとかしこかれど。和れら移し奉らんやといふ。守きよて。かゝる時に何かはゞかりあらんといへば。千引手さしのべて。御茵ながら輕らかにさゝげて御車にたてまつる。君はさらにおぼしもさとらず。やがて北方の御膝を枕にて。御足は十文字にさしもどろかし給ひて。御軒のこゑは。御車の音と

共に。高う轟かしてかへり給ひぬ。舟人ども皆歸り臥したるに。千引は御車にたちよりたるまぎれに。をりしもくまなく月さし入りたれば。姫君をほの見奉りて。こゝろのうち。かゝる容貌人も世にはおはしけるよと。身にむばかりおもひければ。たゞおもかげにたち隨心裏して。ひとりいねもやられず。またも見まほしうのみおぼえて。もしかゝる人を得ましかば。いのちをもしまじ。などおもひつゞけたるは。准ひならぬ身の程をもしらぬ。悪きこゝろなりや。日ごろ景色だちたる雲風もしづまりはてて。波のたちも穩しければ。今はとてくだり給ふ。守は舟路の御まうけなるべきものなにくれとこゝろして。大きやかなる壺十あまりによき酒ども盈てまゐらせたり。海のおもてたひらかにて。風さらに出来ねば。御舟いと遅し。六日ばかり経て。やうやく牛窓にいたれり。追風吹いでん日をまぢてこそ御舟はいださめとて。舟人ども錠とりおろしてこゝに休らへり。實に海山ののぞみも。きのふにけふはかりもて行てこそ。心もなくさみ。おのづからまぎるべき曲もあるを。明くれたゞおなじ所なれば。君は御心屈給ひて。琴と歌とはとりも出給はず。たゞ今ひとつの酒をのみかたらひ人とぞなし給ふ。まことやつくしの舟人どもは。もと純友が朝廷傾けんとしけるにこゝろをあはせて。椀のうへの懐かに。年ごろしたがひありけるが。純友擲められて後。氏をかへ名をあらためて。かくれしびたるを。更にしる人もなかりければ。舟人となりて世にあり經なりけり。さるはみな盗人の頓ぶるこゝろもたれど。御威徳厳しくいひのゝしりたる帥の御舟出なれば。はじめには世を蔑たるふるまひなどは思ひかけざりしを。あまたの御とも人はさきだゞせ給ひて。今は御舟にさぶらふ人も數おほからず。君は常に泥のやうにのみおはすれば。おのづから輕視しうおもひなりて。しのびくにあひかたらひけるは。純友志し遂て。關白などいはん世にもあらましかば。わがともがらたとへ品ひくゝとも。受領よりは不可下を。無敵時うしなへればとて。かく艘權とる業に身をしづめはてんこそくちをしけれ。かゝらんよりは。ぬす人とて人にめをそばめらるとも。實だに得ましかば。また心ゆくわざもなどかなからん。皆をひふしたらん時をまちて。物

してんやなどいひ合ひ合ひ合ひの君は此舟人どもの。かく技き心ありとはおぼしもよらぬ事なれば。御心打とけてのみ過し給へり。一日ひねもすのみくらし給ひて。さむらふ人々も。皆いたくをひてよひよりうちふしたる夜有ければ。舟人どもこよひこそといへば。千引くびうちかたぶけて。かれらゑひふしたれども。兵仗おほく具たれば。おきいでん人あらん時。いと危し。しのびいりて。ものせんには。戸口彼方よりさし固たれば。いかゞせんとしてわづらふを。鼯鼠鷹聞て。われするやうありとて。幔の傍にほそき窓あきたるを見おきたれば。はひ入りて。舍人隨身が寝たる方にゆきて。寄立有弓の弦皆きり放ち。太刀ども奪ひとりて。つま戸おしひらきていで來ぬ。かくては心やすし。岸近ければ人もこそしれとて。夜の更るをまちて。いかりとりはなちて。かたへの島陰にこぎよするを。舟身りてしる人なかりけり。千引人々にむかひて。ありとあらん人は皆殺しつべし。不然は後のおそれあらん。さて實はわかちとらんこと。互みに劣優は不可令有。たゞ姫君をばわれに得させよ。忽失ひまゐらせといへば。そは御心まゝなりとて。皆諾きぬ。汐風颯と吹入れれば。年老たる舍人の寢疾覺が。不圖驚るきて。奇怪やつま戸の明きたるはとて立ちいづるを。千引見て。彼奴に音勿立させぞといふ。酸醬目こゝろ得て。太刀ぬきはなちてきれば。仰ぎまに倒れぬ。此おとに皆な目覺して。海賊こそ來たなれとて。寢惚ながら立騒ぎて。矢はなたんとすれば。弓弦皆な中絶たり。太刀はかんとともとむるに。さらにひとつだに。なければ。無所爲て。柵をつたひて逃んとするを。皆斬りにければ。海に墮。御等泣き惑ひて。海賊いり來て御隨身ども皆きられ侍りぬ。上いかにし給はんとてはしりて。かたんおどろきて起出給へば。舟人すてに亂れ入て。御等も皆きられにけり。帥の君太刀ぬき給はんとすれば。烏脛御手を強くとりて。傍に押寄まゐらすを。振放たんと拒ひたまへど。えやは身動かせてまつらん。やがて檻だつものに背手に縛りつけまゐらせて。姫君をも傍につなぎぬ。わか君は恐懼れ給ひて。北方の御袖にかくれ給ふを。鳩むね引き肘繰寄て。御頸をつよく握れば。はやく息は絶え給ふ。北方聲戦かし給ひて。わがもたる實は皆御心に任すべ

し。命ひとつは我に得させ給へ。吾佛吾佛との給へば。鉢頭うち笑ひて。御寶はいふも慙なり。御いのちも不賜乎はとて。太刀うち振ふと見えしが。あなやとの給ふ聲とよもに。御體は兩段になれり。帥の君なみだ涙を浮て。姫君を見おこせ給ひて。さきに父君の夢の御告ありしは。かゝる事の御表示なりしを。余さらにおもひもよらず。又吾兒が諫にも従はずして。かくよこさまなる波風に。家のうち擧りていのちを窮むること。皆わが過り也。またいつの世にか。もろともにさが野の花をば見んと。嘆息給へるさまいと甚みじ。千引はしりよりて。あなやく無くりことよ。疾海神の宮にまうてよとて。櫂より引きはなちて。御衣の領いたくつかみて。沖のかたにとほくなげやれば。波ごぼと鳴りて御すがたはすなはち見えぬ。あはれ常の御ことぐさに。來ん世にはむしにとりにもとの給ひわたりしをそれにはあらで。今の世ながら水底の鱗とこそなり給ひにけれ。姫君はこのありさまを見給ひて。耻き目みざらんさきにとく死なんとおぼして。しひて御身をふりはなち給へば。御袖ほころびて御手寛ろぎぬ。やがて御衣を脱しいで。御袴のみにて身を投げ給はんとするを。千引はやく搔抱きてとゞめまゐらすれば。無禮なり。手勿觸そ。疾われを殺せとて泣給ふ。千引御せなかを搔撫てつ。御心静め給へ。君をばいかで失ひたてまつらん。こゝろありて如此止まらするなりといへば。うたて。心無のぬすびとよ。かくて暫時も掛とゞむべきいのちかはとて。舌くひ給はんとするを。更におし止めまゐらせて。あなかしこ。はやませ給ふまじ。東まにも西まにも。御こゝろのまにこそつかうまつらめとて。御口に指さしあて。守りをれば。せんかたなし。露のまだに存へ給はんはわづらはしきものから。いのち消給はんこと將難しや。たゞ御心のうちにかに計りてか。彼が目を窺ひて。とく死んとおもひつゞけ給ふにつけて。またおぼしめぐらすことは。われ兼世になからんには。かく横事なる事に。家擧りてうせぬと誰かはしらん。荒ましき海神の怒にあひて。溺れにけりとのみ世の人のいひてや止なん。かく甚しき讎敵をおきて。怨果さざらんことあるべからず。ちゝはゝの爲にむくいせざらん事は罪いと重し。操を穢し身に恥負んも。時に

とりては猶各輕きかたならずや。いのちしなんこと遅からずとおぼしなりて。なみだおし拭ひ給ひて。さらばわれ死ぬまじ。なぞやわれを殺不とはおもふぞとの給へば。千引よろこびて。皆人は寶むさばらんとてこそ。頓心をばお起侍れ。われは君を得たてまつらん爲にしも。こゝろをくだき侍る也とて。やがてかき抱きて几帳のうちにいるを。御こゝろをだにたて給はず。強て御こゝろをおさへ給ひて。隔無く御身をまかせ給ふ。御心のうちいかばかりかありけん。さるは薪にくだく花の枝よりもうたてぞおぼゆるや。鮑鼠鷹人々にむかひて。かれ見給へ。今宵は舟長の妻聘ひ給ふはじめなるを。いかでか祝ひ事もせてたゞにあらんといへば。皆うちわらひて。げにさる事なりとて。舟のうちの穢しき物どもかき拂ひて。あまたの酒壺どもとりいで。おのく酔ひ罵る。鉢頭聲うち惜めて。人々ふかくなゑひ給ひぞ。猶こゝろおくべきことあり。姫君今は舟長がこゝろに従ひ給ふやうなるも。いかでかまこと心の心ならん。夜もあけゆきて。人め見えなんには。かならずこゑたて給ひぬべし。もしさもあらん時。聞き繼ぐ人おほくいり來て。問ひ勘へなば。のがるべき辭なからん。世の諺にも。草をはらはんには。種勿残そといふにはあらずやといへば。皆さもあることよとて。几帳のもとにより來て一人が聲作るを。千引こゝろ得ていで來ぬ。しかくなんおもふと人々耳言いへば。千引領狀てわれ過り。今たゞいま人々の御心やすからしめんとて。太刀拔持てまた几帳のうちに入來。姫君は千引が形勢を見給ひて。さはわれをころすなりけり。いのち死なん事は露惜からねど。ちゝはゝの爲に報いをもせて。身をいたづらになしはつることよと。くちをしうもかなしうも御心塞きあへ給はず。噫もよと泣給ふ。涙に濡ち給へる御顔の色。消殘る火影にもて賞されて。いと艶に媚かしきが。いみじき虎狼の心持とも。得も荒だつまじき貌のし給へるを。千引見るまゝにたゞ勞たさのみまさりて。慮はかりし事も忘れ。悍き心も婀娜ゆきて。勿恐れ給ひそ。君をばいかでかとして。太刀うちおきてまた搔抱きて寝ぬ。舟人どもは姫君をうしなひまゐらすにこそとて待つに。千引さらにいで來ず。磯家の鳥の音はるかに聞えて。夜もはやあけなんとすれば。皆屏語いふやう。雨

を慕ひ雲にまどふらん。舟長が心のはれゆかんをまたば。皆人いかなるあら汐にあひて。千尋の底にしづみはてんもはかりがたし。舟長こそおもふやうなる夢を見つれば。さしも悔なくやおもふらん。わが輩なにのすてがたき縁にてか。もろともに辛苦をば見ん。いざ各寶どもわかちとりて。跡をこそかくさめとて。許多とり並べたる唐櫃。長櫃。何是の調度ども。皆掣りいで。手ごとに撰うばひて。行方もしれずうせぬ。千引は鳥のねにふとおどろかされて。かく不堪言夢心裏の覺が難に關らひて。かく時うつりぬる事を。舟人どもいかに思ふらんとおもへど。強に荒にとりなしたてまつらんことはえもおもひかけず。しばしおもひわづらひけるが。さはいへ。人々の諫しごとく。姫君の御ころの底はいかてか知べき。また身の害引出んことは。たゞ目前にあれば。よしこれまでの縁にこそありけれ。今は不及本意叶ひぬるを思ひてにして。後のおそれあらせじとつよくおもひなりて、われを勿怨み給ひぞ。我はかくて長く君に事へまつらんと思ひ侍れど。舟人どもさらにうけ引侍らず。さるを強て生るまらすとも。人々いかてかたゞにあらせさてまつらん。他人の手に憂め見給はんよりは。われこそみ魂の行方見果たてまつらめ。あなあみだ佛念じ給へとて。御袴の片端を引きりて。御頸を經ぎてつよくひけば。すなはち絶入り給ひぬ。今は心にかゝる事なしとて。几帳おしひらきていで来て見るに。舟人一人だにあらで。帳引はなち蓋打ち毀ちたるものども。亂がはしくうち荒したり。千引あきれて。こはわれを言詮なしと思ひて見離ける也けり。されどいかゞはせん。猶とりのこしたる寶もぞ有乎。索り見れど。さらに物一つだになし。たゞ錦に褻る物のみぞ。櫃の底に残しおけるがあるを。とりて見れば帯なり。こは累代の寶と爲なるも有なりとかいふめる。もしよの常の品ならずは。思ひがけぬ價をこそ得けれとおもひて。懷に押包て。やがて戕軻振立たる邊の續切り放ちて。さしも大きやかなる舟を。ちからかのかがり沖のかたに押遣ば。舟は波に漂ひ出づるを。顧見だにせて。足疾歩みて。鳥傳ひししつゝ逃さりぬ。かくてこの浮舟の行方いかゞありけん。そはつぎの巻にこそ。

つれ／＼なる窓のうちの手ならひに書きし給ひしほうこともつし一よろひにつみおき給ひしも父のいませし世こそは塵うちはらひなともし給ひつれ今は手ふるゝ人たになければむつかしけなる虫の壽みかとのみな理もてゆくをかくてのみはいかにとてとりしたゝむるにつけてこの一卷を所見出たるざるをりしも高田與清ぬしまて來ましてこは大人の御筆すさみにこそあなれかくさるかうかましき跡なし事もまたさるかたに御ころこめたまひけんものをいかてか物の底にしもくたしはて給はん板にゑりて人々にも見せまほしきをさもお本さはおのれよきにはからひなむと勢ちにいはれけりうれしとおもふものからかゝる壽さみことをさへこと／＼しけにもてなさんは人わろくやなととかくやすらはれしかと此ぬしはしもそのかみ父のもとにうるはしうなれむつはれつゝ心のへたてなうおは勢しかは今はたさ理ともあしうやはとてかの虫にそこなはれて筆のたたすまひさへおほつかなきをそかまゝにまいらせたれはとかう考へかき清めてかくはものせられしにな舞

文化のとをま理一と勢きさらぎ

むら田のたせ子

津くしぶねの於九が幾

昔もろこしに楯と矛とをひさくもの、我楯はかたく我矛はとしとてうけは理本こらし位にある比とのなれか矛もてなれか楯をとほさむはいかにといへる時かの人こたへあへさりきとか抑中國まなひする人のもろこしのことにはくはしから傳かれをもしり顔つくり唐學ひする輩の美國のことにはうとくて猶心えつるさまにほこれるよこれむすんのせちにひとしからさらめやさるを獨にしこりのやの翁はこゝの事に心をとかしこしこの事に思ひをかためて二つながら全く兼られたりともいふへくこそかゝれはめ傳度歌ともをはしめくさゝの妙なる詞もろゝの新しきかうかへなと年月になむつもりにたるさて古き物語書はいとも多かめれど卷々なかくてかきのそける斗りにてはすへての心言葉もわきかたきを此つくし舟與かり初のすさみ書にてか理そめに見つへきにあらずそは此露ばかりの卷にこゝのこともてかしこの一ふしをうつされあるは親を思ふ子のせちなるを顯はしあるは遠みな心のさか奈さをしらせあるは腹黒なる人とちの情なきさへつはらに書とられにたる詞はにひ學比のわらへの物かゝん先したてをもしつへく心は大かたの人の世のさまざまらむ教にも成ぬへくといとよき物語に社有けれしかるを書さゝれて次の卷のあらぬなむいとよあかず口をしう思はるれとさりとして誰にかは筆さしつ閑るへきいか傳かくあはれには書うへきさるは聞つき言ひ傳へて世に見まほしう思ふ人多かりよりて我友松のやのあるしのにひ學ひの人に見やすからしめむ爲にかたはらに漢文字をしるして板にゑりなむとするにおく書してよとあるまゝもたしかたくなむ文化といふとし始りて十とせあまり一と勢の春のすゑなる月のしものとをかに今いつか置ての日

まさきの千幹しる數

題辭

錦翁元是錦爲腸 寫出悲歡夢一場 誰續遺篇洗遺恨 親仇未報此翁亡
白石灘頭夜色妍 醉中好伴月明眠 何圖一陳狂風起 倒卷波瀾來打船
酒能爲病兼生事 此翁此篇眞酒箴 不爲女兒雙淚下 從來我亦醉沈々
文化甲戌初夏 詩佛老人大鶴行書於玉池精舍

文化十一年歲次甲戌春二月 江戸梓行 須原屋 茂兵衛

昭和五年七月十三日印刷
昭和五年七月十五日發行

特製
第二十五回配本
追加募集
第二十一回配本

【非賣品】

帝國文庫
(第二篇)

珍本全集

編輯者兼
發行所

右代表者
取締役社長

株式會社
博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

大橋進一

東京市小石川區久堅町百〇八番地

君島潔

印刷者

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行所
株式會社
博文館

振替口座東京二四〇番

製版所
印刷所
製紙所
製本所
函所
共同印刷株式會社
共同印刷株式會社
王子製紙株式會社
中條製本所
香取製函所

583
15

